

奈良國立 文化財研究所 年報 1998-II

ANNUAL BULLETIN
of Nara National Cultural Properties
Research Institute 1998-II



飛鳥池工房発見の宝飾類

上、玉類、左下、金銀類。今回の調査で、この工房ではガラス玉・鏡・鏡・漆器の他に、馬脛・鏡舟・水晶製の玉類、金銀製品をも生産していたことが判明する。宝飾類は、仏や天蓋を飾る莊嚴用具の部品とみられる。本文48頁参照(撮影/井上直夫)



飛鳥池工房跡と産廃を掩埋した溝
谷を埋め立て階段状に造成した工房作業面が営まれている。
工房の東側には産廃を棄てる溝が掘られ、深い所で
は深さ1m以上の崩落が堆積する。

本文50頁参照(撮影/中村一郎)



四分造跡見の合葬墓

(第85次)

弥生時代中期。東西方向に長い墓壙に、2体の成人を交互に横たえ、木蓋で覆っていた。南側の女性は右胸に石頭を装着し、矢が射込まれており、北側の男性の左肩甲骨・胸骨などには金属とみられる利器による多数の創傷が残る。治癒反応はない。ほぼ同時に二人を喪ったとの暴力的な死が、同じ墓壙に合葬させることになった一因であろう。

本文4頁参照(撮影/中村一郎)



吉備池唐寺の塔心礎抜取穴
西側土壇の中央で抜出した心礎抜取穴。底には人頭大の積石が残る。東西約6m、南北8m以上、深さ40cmの巨大な穴で、日本最大と目される奈良縣香芝市尼寺唐寺の塔心礎がすっぽり納まる。穴は基壇の高い位置にあり、地上式の心礎であったと考えられる。南西から。

本文58頁参照(撮影/井上尚夫)

目 次

I 藤原宮の調査

西方官衛南地区の調査 第85次	4
内裏南辺地区の調査 第83-7次、第83-12次	17

II 藤原京の調査

藤原京右京九条三・四坊 第88次	22
藤原京右京七条二坊 第83-14次	26

III 飛鳥地域等の調査

飛鳥寺の調査 第83-1次、第83-2次	28
坂田寺の調査 第83-9次	30
飛鳥池遺跡の調査 第84次・第87次	34
飛鳥池東方遺跡の調査 第86次	52
吉備池廃寺の調査 第89次	58

凡 例

- 本書は、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が1997年度に実施した藤原宮跡、藤原京跡および飛鳥地域等の発掘調査の概要報告である。執筆は主として調査担当者が当たり、出土遺物については各調査室のメンバーが執筆した。
- 遺構図に付す座標値は国土方眼第VI座標を基準とし、高さは海拔高で表す。
- 遺構には一連の番号を付し、その前に遺構の種別を示す記号を付した。略称は以下の通りである。SA（築地・塚）、SB（建物）、SC（回廊）、SE（井戸）、SF（道路）、SG（池・園地）、SI（土坑）、SS（足場穴）、SX（その他）。
- 藤原宮の地区区分については、「飛鳥・藤原概報26」（3頁）を参照されたい。
- 7世紀代の土器の時期区分は、飛鳥I～Vと表す。詳細は、「藤原報告II」（92～100頁）を参照されたい。
- 藤原京の京城については、従来の東西8坊、南北12条説を超えた広がりをもつことが確実であるが、当初から大きかったのか、後に拡大したものか、逆に縮小したのかと言った未解決な問題を残し、京極（特に南北の京極）も未確定である。当調査部で実施した京内の調査は、岸説藤原京の範囲内に納まるため、調査位置図は岸説藤原京城図を使って現わすこととした。
- 本報文未収録の調査については、29頁の「その他の発掘調査概要」を参照されたい。

奈良国立文化財研究所年報 1998-II

発行日——1998年9月30日

編集発行——奈良国立文化財研究所

〒630-8577 奈良市二条町2-9-1 TEL 0742-34-3931

印刷——岡村印刷工業株式会社

ANNUAL BULLETIN
of Nara National Cultural Properties Research Institute
1998-II

C O N T E N T S

I Excavations of the Fujiwara Palace Site

- Excavation on southern area of government offices in the west of *Fujiwara* Palace ; No.85
- Excavation on southern area of the Imperial Residence(Dairi) ; No.83-7, 83-12

II Excavations of the Fujiwara Capital Site

- Excavation on the third and forth wards on ninth street, the western sector ; No.88
- Excavation on the second ward on seventh street, the western sector ; No.83-4

III Excavations in the Asuka area and others

- Excavation of *Asuka-dera* temple Site ; No.83-1, 83-2
- Excavation of *Sakata-dera* temple Site ; No.83-9
- Excavation of *Asuka-ike* Site ; No.84, 87
- Excavation of Eastern of *Asuka-ike* Site ; No.86
- Excavation of *Kibi-ike-baif* Temple Site ; No.89
- Other excavations

表1 1997年度 飛鳥藤原宮跡発掘調査部発掘調査・立会調査一覧

調査次数	調査地区	調査期間	面積	調査地	担当者	調査要因	掲載頁
飛鳥藤原							
84次	SBAS-M・N 飛鳥寺東南隅	97.01.09~12.03	3,000m ²	明日香村飛鳥	毛利光俊彦	万葉ミュージアム建設	34~47
85次	5AJL-D 藤原宮西方官衙南地区	97.04.07~06.25	703m ²	櫛原市御手町	深澤芳樹	宅地造成	4~16
86次	5AKA-A・SHAS-M・N・5AMEE-F	97.07.07~11.11	1,113m ²	明日香村飛鳥	長尾 充	万葉ミュージアム建設	52~57
飛鳥池東方遺跡							
87次	5AKA-J・H 飛鳥池遺跡	97.12.04~継続中	1,900m ²	明日香村飛鳥	花谷 浩・小澤 敦	万葉ミュージアム建設	48~51
88次	5AMQ-K・L 右京九条三・四坊	97.12.18~98.02.23	630m ²	櫛原市城殿町	千田剛道	食料事務所建設	22~25
89次	5ADD-T・U 吉備池廃寺	98.01.07~04.17	351m ²	明日香村吉備	佐川正敏	学術調査	58~68
83-1次	5AKA-H 飛鳥寺南方	97.04.21~04.25	117m ²	明日香村飛鳥	寺崎保広	住宅埋蔵	28~29
83-2次	5BAS-Q 飛鳥寺講堂北方	97.05.06~05.13	12.5m ²	明日香村飛鳥	羽鳥幸一	住宅建設	29
83-3次	5AJF-M 大極殿	97.05.20	1m ²	櫛原市高殿町	伊藤敬太郎	取水権設置・立会	29
83-4次	6AJL-A・6AJF-K・6AJE-S	98.06.24	3m ²	櫛原市醍醐町・桃手町	鳥山敏男	測量基準点設置・立会	29
内裏 西面大垣地区							
83-5次	5AJH-A・B 南面大垣	97.06.25~06.30	155m ²	櫛原市別所町	伊藤敬太郎	上水道付替・立会	29
83-6次	5AJH-M 朱雀大路	97.09.09~09.11	30m ²	櫛原市飛脚町・高殿町	黒崎 直	下水道管理設(現状変更)	29
83-7次	5AJF-J 内裏南辺	97.09.30~10.20	168m ²	櫛原市醍醐町	伊藤敬太郎	堤防復旧工事(現状変更)	17~20
83-8次	5AJC-L 左京五条三坊	97.10.23~10.30	70m ²	櫛原市木之本町	鳥山敏男	青空駐車場	29
83-9次	5BST- 板田寺金堂	97.11.04~12.12	140m ²	明日香村祝戸	松谷忠司	下水道敷設	30~33
83-10次	5AJF-J 内裏南辺	97.12.09	1 m ²	櫛原市高殿町	羽鳥幸一	電柱復旧・立会	29
83-11次	5AJC-L 東方官衙南地区	98.01.12~01.29	250m ²	櫛原市高殿町	水戸部秀樹・羽鳥幸一	上水道付替・立会	29
83-12次	5AJF-J 内裏南辺	98.02.25~02.27	12m ²	櫛原市醍醐町	賀淳一郎	取水口補修(現状変更)	17~20
83-13次	5AJL-C・D 西面大垣	98.03.03~03.04	13.8m ²	櫛原市禪手町	伊藤敬太郎・水戸部秀樹	堤防新設	29
83-14次	5AJM-D 右京七条二坊	98.03.16~03.18	47m ²	櫛原市飛脚町	賀淳一郎	地区改正事務所建設	26
83-15次	5BYD-D・E 山田寺	98.03.10~03.11	100m ²	桜井市山田	水戸部秀樹	設備工事・立会	29

藤原宮の調査

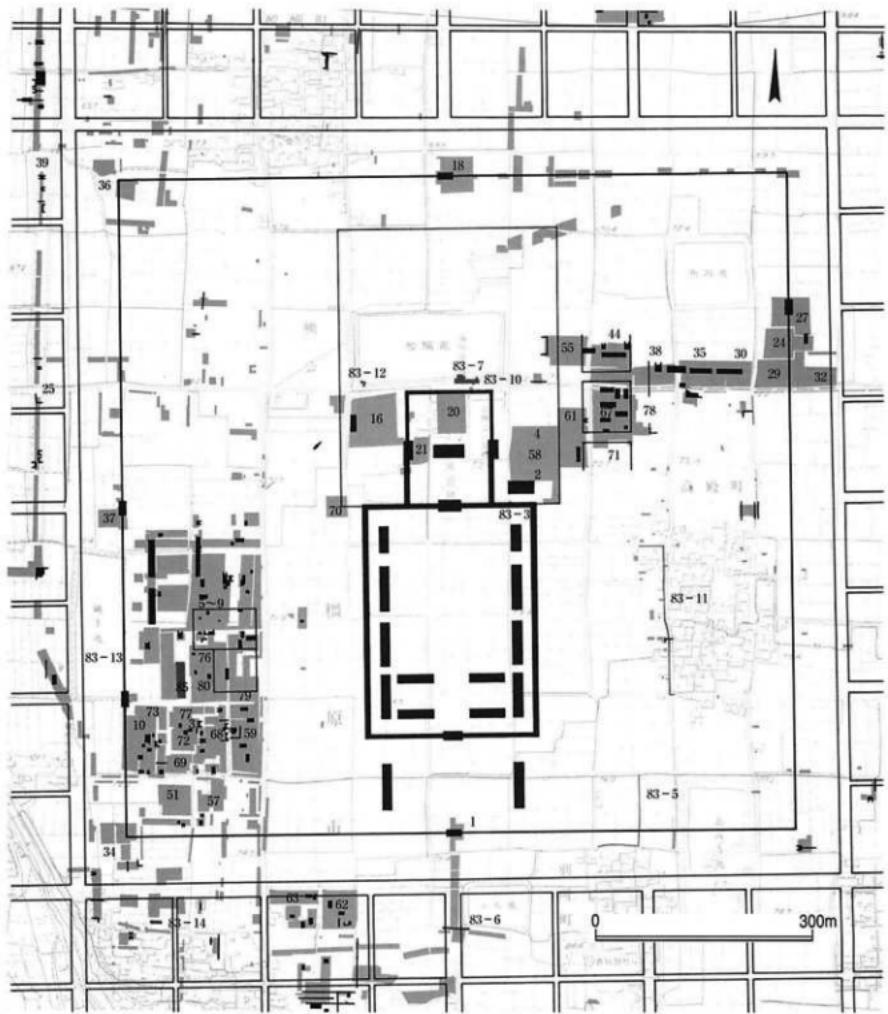


図1 藤原宮の調査位置図 1:7000

◆西方官衙南地区の調査—第85次

1はじめに

本調査は、宅地造成に先立ち、櫻原市縄手町で実施したものである。調査地は藤原宮西方官衙南地区にあたり、第76・第80次調査区の西、第82次調査区の東に位置する。

今回の調査では、藤原宮期における当地域の利用状況と、中層で弥生・古墳時代の水田を、さらに下層で弥生集落・四分遺跡の広がりを確認することを目的とした。上層は、東西12.5m・南北50.5mの範囲を、中・下層はこのうちの南半部、東西12.5m・南北20mを調査し、その一部

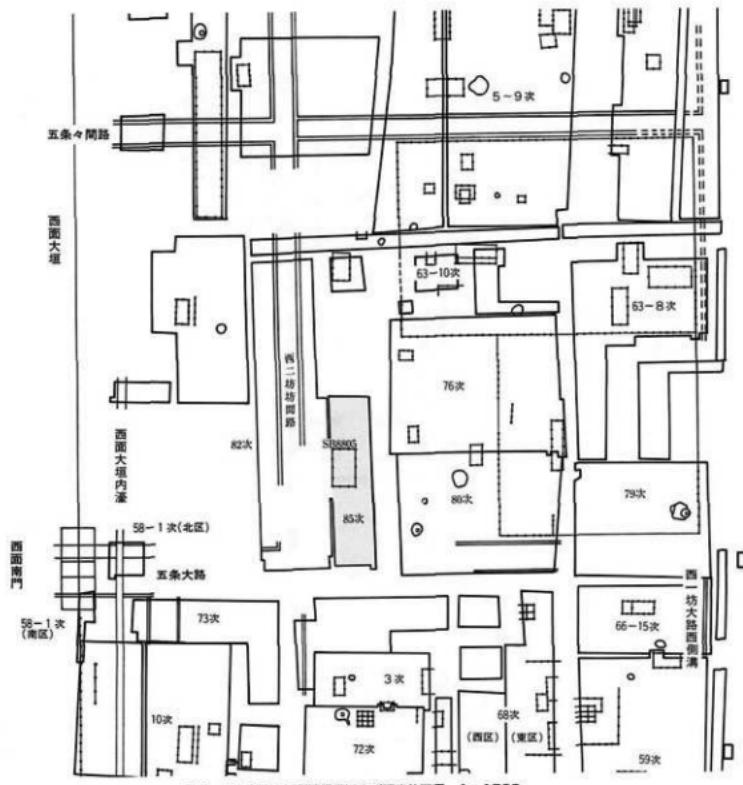


図2 西方官衙南地区遺構図および調査位置図 1:1500

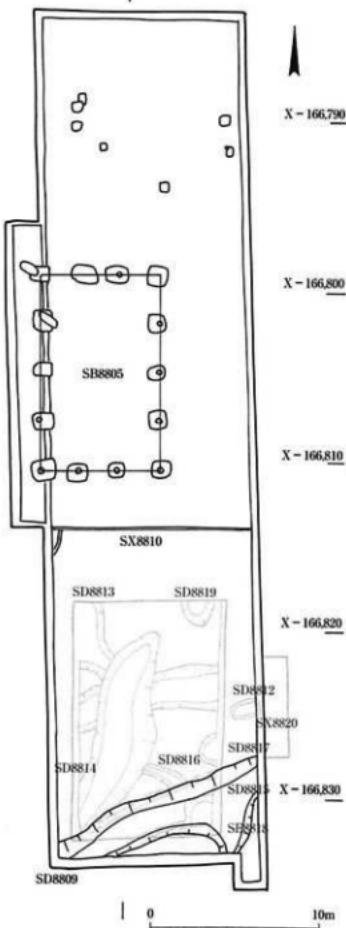


図3 第85次調査遺構図 1:300

東西溝SD8812は、調査区中央を東西に横切る溝である。上幅2.3m、深0.8mで、中期前葉に属す。土器の他、磨石が出土した。

溝SD8817は、調査区中央東端にかかる溝で、上幅1.9m、深0.6mである。中期中葉の土器が出土した。この溝と調査区北西隅部にある上幅1.7m以上、深0.3mの溝SD8813が組み合う可能性が高い。

調査区南東隅部で検出した井戸SE8818は、その大半が調査区外であるが、少なくとも南北は2.5m以上ある。深さは現状で1.5mである。緑色粘質土を掘り込み、疊混灰色砂（湧水層）に達して下げるのをやめている。出土

を拡張した。上層の調査面積は、703m²である。

調査区の基本層序は、上から茶褐色土（耕作土）、淡灰色土（床土）、黄灰色微砂、褐色粘質土、黒色粘土①～③、緑色砂質土・緑色粘質土（地山）の順である。

2 遺構

上層遺構は黄灰色微砂の上面で検出した。主な遺構に、掘立柱建物SB8805がある。なお先行条坊五条大路はみつからなかった。

SB8805は、調査区中央で検出した桁行4間（柱間2.9m等間）・梁間3間（柱間2.4m等間）の大型の南北棟建物である。柱掘形は、一辺13m前後で、方形を呈する。現状の深さは20cm前後で、直径約15cmほどの柱痕跡が残る柱穴がある。藤原宮期直前か藤原宮期の遺構と考えられるが、柱穴から出土した遺物が少ないため、その細かな所属時期は明らかでない。

調査区北端部で柱穴を検出したが、建物や壠としてまとまらない。

中層遺構は褐色粘質土・黒色粘土①の上面で検出した。主な遺構に、水田SX8810と溝SD8809がある。

水田SX8810は、褐色粘質土・黒色粘土①を水田耕作土とする。中層調査区の北西隅部で検出した小畦畔は、幅約15cm、残存高約7cmである。土層の連続性から、第82次調査区の水田が、当調査区に広く及んでいるのは確かであるが、その遺存状態は悪く、この小畦畔のほかに稲株の痕跡など、水田にかかる痕跡はみつからなかった。

調査区南端に、Y字状を呈する溝SD8809がある。幅の広い溝は上幅2.5m、残存した深さは0.4mである。堆積層は、上から青灰色土混淡黄色土、疊混褐色砂の順で、流水の痕跡をとどめている。

下層遺構の検出は、緑色砂質土・緑色粘質土（地山）上面で行なった。壁面観察によって、黒色粘土層を振り込んだ遺構の存在を確めたが、平面調査の時点では、黒色粘土層を切る黒色の土層を埋土とする遺構を弁別するには困難であった。また当調査区の遺構の多くは、特に第79・80次の調査成果によって、その位置と規模から四分遺跡を囲む内濠に対応する。なお下層区の溝の埋土は、基本的に粘土や粘質土が厚く堆積したものであり、水の流れた形跡をとどめるものはなかった。また土壤幕を一基検出した。

土器は中期後葉に属す。ここからは、多量の土器や、柱状片刃石斧・扁平片刃石斧・石鎌などの石器とともに、ニホンジカの右尺骨を利用した骨製刺突具・イノシシ左肩甲骨を使ったト骨（図10-2・3）や獸骨片が出土した。

溝SD8814は、調査区西半部にある南北方向の溝で、北端が途切れている。中期前・中葉の土器を混じるが、溝SD8819とともに中期後葉に属すので、この2つが組み合いで、この間が通路として機能していた可能性が高い。SD8814は、上幅3.5m、深0.5m。SD8819は、上幅2.3m、深0.6m。SD8814からは、多量の土器とともに、未製品を含む石庵丁や石鎌の他、類縞の炭化米・アズキカリヨクトウ・シイの実、さらにト骨（ニホンジカ肩甲骨）・鹿角製鏃・獸骨などが出土した。なお図3に掲載した2点の絵画土器のうち、3は本溝出土、4は黒色粘土②③からの出土であるが、SD8814の堆積土であった可能性がある。またSD8819の埋土には、灰を混じていた。

溝SD8816は、調査区南半部中央にある、上幅0.7m、深0.4mの斜行溝である。SD8815で破壊されているものの、位置と出土土器のあり方から、SE8818とSD8814をつなぐ溝として機能していた可能性が高い。

溝SD8815は、調査区南端部にあり、上幅3m、深0.7mである。SE8818とSD8814の堆積土を掘り込んでいる。開削時期は、中期後葉である。この上層には後期の土器を混じているが、これは不等沈下による上部包含層の落ち込みとみられる。

土塙墓SX8820は、中期末に属す。調査区中央東端でみつかった。一部SD8812の埋土を掘り込んでいる。西でやや南に振れる東西方向に長い土塙で、長軸長1.84m、短軸長0.99mの隅丸長方形を呈する。掘形の輪郭が人骨の頭部付近で頭部に沿って弧状をなしており、木棺の木口板や側板を納める空間のないことから、土塙墓であるのは疑いない。また輪郭の検出時において、土塙の中央付近で土塙底部から15cmの高さで木目が長軸方向に走る土塙墓を覆っていた木製蓋の痕跡を確認した。

この土塙からは遺存状態のきわめて良好な2体の人骨が出土した。2体とも伸展葬である。南側の人骨（3号人骨）は頭部を西に、北側のそれ（4号人骨）は頭部を東に向けていた。2体の人骨は、頭部の向き、上肢の折り曲げ角度、足の揃え方に若干の差はあるものの、両者の姿勢は基本的に共通する。

埋葬順序は、北側の4号人骨の左上肢骨の上に、南側3号人骨の左脛骨がのっているので、4号人骨→3号人骨の順であったことが確定する。

また、3号人骨の左肘部が4号人骨の左膝部に接しているにもかかわらず、先に納めた4号人骨の骨の配置は左膝蓋骨を含めて乱れはなかった。この事実は、この2体は追葬ではなく合葬であったことを示している。

なおサスカイト打製石鎌が3号人骨の右胸腔内の第9・第10肋骨間の肋骨上に、先端を外側に向けた状態で出土した（図7-1）。骨には刺さっていない。肋骨に密着して出土したので、土中にあった石鎌が死後体内に侵入した可能性はほとんどない。つまりこの石鎌は、生前に射込まれた可能性がきわめて高い。

4号人骨は、左肩甲骨などに深い傷跡を残していた。片山一道氏によれば、切り口の状態から、鋭利な金属製利器によったかとのことである。

3号人骨にともなった打製石鎌のほかに、SX8820から武器は一点も出土していない。また副葬遺物もなかった。

3 遺 物

土塙墓SX8820内出土土器 副葬土器はなく、2体の人骨の周囲からは埋土に包含していた土器の小片が多数出土している。その内で最も新しいのは中期後葉の土器で、後期以降の土器は全く含まれていない。図3-1は、口縁部に四線紋が2条めぐる変形土器の小片。図3-2は変形土器あるいは壺形土器の体部の小片で、外面上部には右下がりの平行タタキメがあり、下半部にタタキの後に下から上に向けてヘラケズリを行なっている。内面はナデである。

絵画土器 図4-3は、SD8814から出土した、四線紋を体部中央と下端部にめぐらした中期後葉の器台である。外面は太い縦ハケメ→横ナデ。内面は全面に丁寧な横ナデで、新しい時期に通有の内面ヘラケズリはない。絵画はすべての調整の終了後に先端の細く薄い道具で、体部中央部の四線紋帯の下側に描いている。対向する鹿を合計3頭、この他に複合線鋸歯紋を単独に、あるいは2個一組ではほぼ全周にわたって所々に描いている。

図4-4は、SD8814の上部の黒色粘土②・③から出した、体部上半部に1.5cmと幅広の櫛描直線を多条に、その下段に幅狭の櫛描格子紋を描いた中期中・後葉の壺形

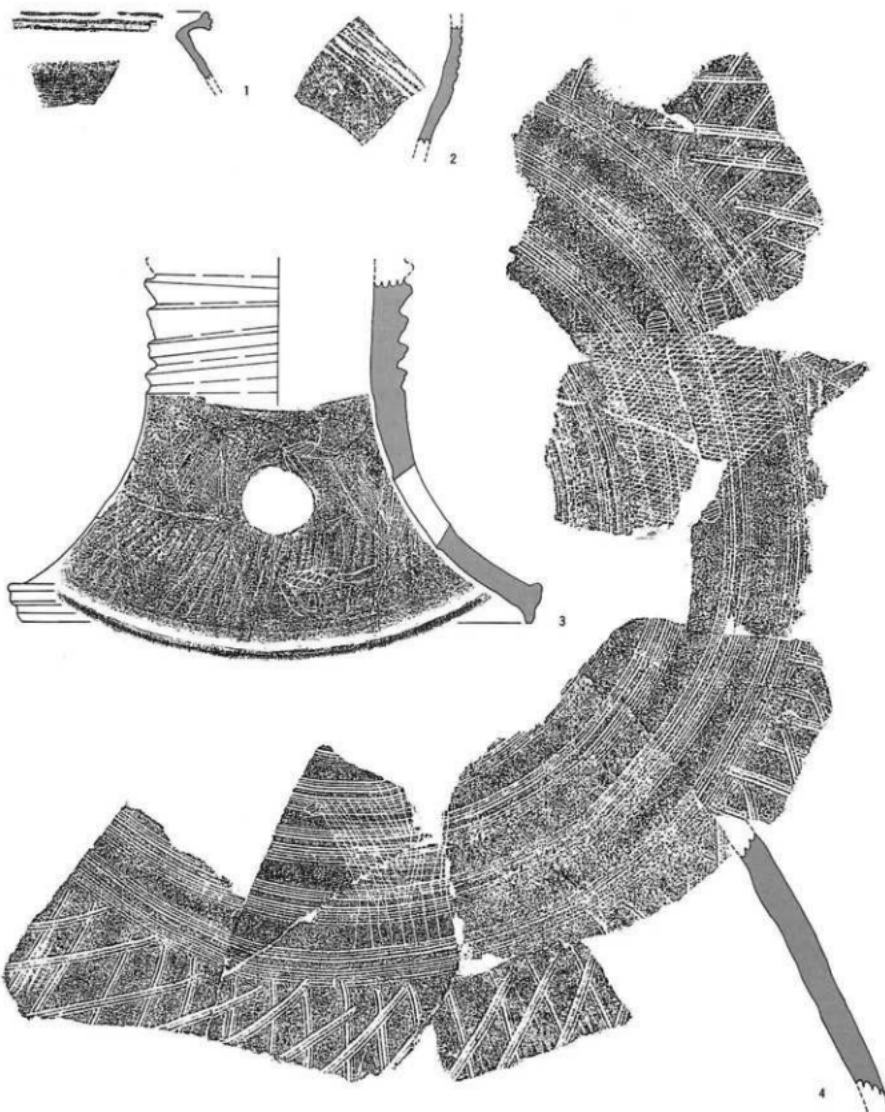


圖4 出土土器 1:2

土器である。外面はナデ後備攝紋を描いている。内面はナデまたはハケメである。接合こそしないが、同一個体とみられる体部下半部の破片があって、それによれば外面は上方向のヘラケズリ、内面は斜めハケメである。体部片は全体の約1/2あって、調整・施紋の完了後に先端が細くかつ薄い道具で2棟の建物を描いている。もし欠落部分も等間隔に描いてあったとするなら、合計4棟の建物を配置できる。ともあれ向って左側の建物は、切妻の屋根の棟先に飾りのある高床建物である。右側の建物も切妻屋根であるが、棟先飾りはない。屋根の側面の左右の対向位置に、輪郭が半円形をなし、内側を縦線で充填した突出を一对描いている。また屋根の右側下部に縦線を充填した短形で突出した床板を表現し、これに階段を斜めにたてかけている。この建物の下部にあるはずの柱は、器表面があれでいるためか、確かめることができない。

なお、残部において建物の間やその外側に、絵画の痕跡はない。
(深澤芳樹)

土壤墓SX8820内3号人骨胸部出土石鏡 長4.0cm・幅1.6cm、重量は3.34gのサスカイト製有茎式石鏡(図4)。主剥離面がわずかに残り、横長剥片素材と考えられる。風化は進んでおらず、自然面は有さない。両面左右縁辺とも薄形陰影細部調整を施し、刃部の多くには浅い薄形細部調整を、茎部の一部には浅い厚形細部調整を加えている。茎部側縁の研磨は認められないが、裏面茎部後縁の一部が钝くなっている。これは矢柄に装着した際に生じた可能性が高い。
(奈文研 墓誌文化財センター 森本 譲)

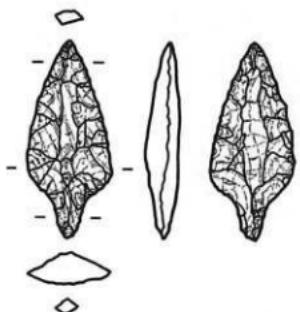


図5 3号人骨内出土石鏡 1:1

4 四分遺跡の合葬墓で出土した弥生時代の人骨

この人骨資料は遺跡から上げられ、洗浄されたのち、筆者らの研究室に移送されて、現在、分析作業に供されている。本稿では、これまでに得られた所見を中間報告する。

近畿地方で弥生時代の土葬人骨がみつかることは珍しい。ひとえに土壤のせいでのふつうは骨までも、早いうちに腐食、分解されて消失してしまうのである。その意味で本人骨資料は非常に貴重である。弥生時代の近畿地方人にに関する知見を提供してくれよう。

しかし同時に、いわゆる「湿原の人びと」、湿地帯に埋葬された人骨であるために形態的に分析するのが難しい。無酸素状態に近い条件で埋没していたから骨も腐らず残存したのであるが、きわめて軟弱な骨質しかとどめていない。酸性土壤のために骨の無機分が溶けだして、「柔らかい骨」となっているからである。このように湿原の酸性土は普通なら腐敗してしまう骨性部分を残してくれる反面、骨特有の堅さを失わせてしまう。そうした状態で出土した人骨は、まだ取り上げる前に発掘現場で周到に観察することが大切である。

そんなわけで、本人骨資料は遺跡での保存状態は極めて良好だったが、回収されたのちの状態は、すこぶる悪い。ほとんどの骨が破片となり、細かく碎け、骨表面や破断面が傷んでいるから、それぞれの破片をつなげて個々の骨を復元していくことも難しい。

まちがいなく2体分の人骨(3号、4号)が、しっかりと存在する。つまり発掘現場で確認したように2体分の骨しかなく、どの骨も細片に碎けてはいるものの、どちらの個体も頭蓋骨から足の指骨にいたるまで全身の骨骼がそろっている(図6)。人骨以外に、シカの右の距骨と中央足根骨が混じっている。埋葬されたときに土壤に存在していたものだろう。

〈3号人骨〉

〈保存状態〉

くまなく全身の骨が遺存するも、完形をとどめた骨は皆無である。長骨や足根骨にいたるまで、さまざまな形に壊れ、大部分は小さな破片となっている。

脊椎骨や肋骨や胸骨などの胴骨は、おそらく合計数千もの細片と化している。手骨や足骨などの小さな骨、腰

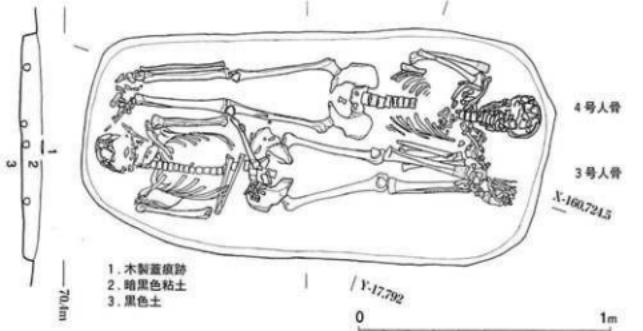


図6 第3・4号人骨出土状態 1:20

骨や肩甲骨、そして頭蓋骨も千々に壊れている。なぜだか頭蓋骨については、欠失する部分が少なくない。おそらく発掘の際に粉砕されてしまったのだろう。ほとんどの歯が残っているが、いくつかは消失している。

<性別>

右腰骨の大坐骨切痕部と寛骨臼部を含む断片があり、大坐骨切痕が大きく開いていること、寛骨臼が小さめであることから、女性の骨と判別できる。

その他、頭蓋骨の乳様突起が華者であること、乳突切痕が小さいこと、眼窩上縁が薄く明瞭であること、眉弓の膨らみが弱いこと、それに全体に頭蓋骨が薄く各骨の筋付着部が弱々しいことなども、女性骨と判別する傍証となる。

<死亡年齢>

ほとんどの骨の骨端部は粉砕されているが、健側にも、左右の鎖骨の胸骨端が一部、観察できる。そして未癒合だった様子が確認できる。この部分の化骨は、どの骨の骨端よりも遅く、だいたいのところ20-25歳で完成する。このことから、まだ25歳に達しない者の遺骨である可能性が非常に高いと判断できる。ちなみに腸骨後にも骨端線が識別できる。

つぎに歯であるが、右側は不明だが、左側は上下とも第3大臼歯が萌出している。しかし上下の第3大臼歯とも、まったく咬耗が認められない。隣接する第2大臼歯はエナメル質部分に弱い咬耗が認められるので、これら第3大臼歯は萌出したばかりの段階にあったのだろう。ならば、すくなくとも18歳程度の年齢に達していたのは間違いない。

これらの知見から、本遺体の死亡年齢は18-25歳の頃と推測できる。

<身長などの身体特徴>

すべての長骨は近遠の両骨端部だけでなく、骨体も破損している。しかし唯一、右の尺骨だけは最大長径を計測できるまで復元できた。その値は255mmで、藤井式に

適用すると、156.9cmほどの身長だったと推定できる。北九州の弥生時代の女性人骨の平均身長より少しばかり高い値である。

全体に骨格は華者、各骨の関節部が小ぶりで、上腕骨の骨体や桡骨粗面、大腿骨や脛骨の骨体では、大型の筋肉の付着部が弱々しい。生前、骨縫で華者な体格の女性であったと推量できる。

距骨には、弱いながらも蹠蹠面が認められる。肩甲骨の関節窓の形は左右ともに、よく似ているため、利き手は判別できない。出産痕の有無も確認できない。脛骨につき、おかしな特徴がある。右脛骨だけ骨間縫の上部が異常に張り出しているのだが、その原因については今後の検討を待つしかない。

<病痕と傷痕>

観察可能な範囲の骨について、病痕のようなものは、いっさい認められない。まったく虫歯もない。ただ犬歯や切歯に弱いエナメル質形成、そして多くの歯の周囲に軽度の歯垢が認められる。

傷痕のようなものが1箇所だけ認められる。左大腿骨の骨体上部の前外側の表面に4条ほどのカットマークがある。死亡前後につけられたようだが、狭い範囲に整然と並んでいること、いずれも極めて軽微であることから、刀創と考えるには不自然である。動物などの解体痕を彷彿とさせるもので、何らかの理由で埋葬時に付けられたのかもしれない。

この遺体の胸部で石墨が見つかったが（図7-1）、その辺りの肋骨はすべて、破損して粉々になっているために、石墨による創傷のようなものは検出できない。

<4号人骨>

<保存状態>

全体として3号人骨よりは保存が良い。頭椎や手骨や足骨の中には完形をとどめたものさえ存在する。相当に壊れてはいるが、頭蓋骨もよく残っており、近畿地方で出土した弥生時代の人骨としては最良の保存状態を示す



図7 人骨細部 (1 3号人骨内の石器 2・3 4号人骨の切創)

個体かもしれない。しかし上層に位置した顎面頭蓋や上顎骨の前部、および多くの歯が消失している。

〈性別〉

まぎれもなく男性の人骨である。左右の腸骨の大坐骨切痕は男性の典型と言えるほどの形状をしており、頭蓋骨の乳様突起は頑丈で、乳突切痕は深く切れ込み、眉間や眉弓が厚く膨隆している。ことに眉弓の膨らみは、眼窓上隆起と言えるほど強く、かつ頑丈である。各骨の関節部も大きく、骨格全体が骨太であることから、男性骨と判定する傍証となる。

〈死亡年齢〉

左右の鎖骨ともに壊れているが胸骨端の破片があり、骨体と融合していたのは間違いない。一部だけ骨端線が残っており、鎖骨胸骨端が融合を完了する25歳前後からさほど経年しない年齢で死亡したことを強く示唆する。

腸骨の耳状面の加給変化も壮年特有の状態にあり、頭蓋の3主縫合は内板も開放したままである。とても老年の年齢に達した個体のものとは思えない。下顎骨右側の第3および第2大臼歯の歯槽骨が強く退縮しているが、後で述べるように、これは病的な変化なので、年齢推定の参考にはできない。現に残存する歯の咬耗は、3号個体を僅かに凌駕する程度でしかない。

以上のことから、本個体の死亡年齢は壮年の前半あたり、およそ25~30歳くらいであったと推定できる。

〈身長などの身体特徴〉

下肢の長骨や上腕骨は被損が著しいが、右桡骨の最大長径が計測でき、左尺骨の最大長径も概測できる。その値は右桡骨が249mm、左尺骨が265mmで、藤井式に適用すると、それぞれ164.7cmと165.3cmの身長の推定値を求めることができる。この個体も北九州の弥生人の平均

よりは少しばかり高い身長だったようだ。

たしかに眼窓上部は頑丈だが、頭蓋骨の他の部分はそうでもない。どちらかと言えば下顎骨は華奢である。四肢の長骨なども遅しくて頑丈な印象は与えず、上腕骨や大腿骨や脛骨などの大きな筋肉が着く部分はすべて、さほど発達しているとは言えない。男性としては華奢なほうに属していたのは間違いないからう。

左右の肩甲骨の窩関節面の広がりを比較するに、左利きであった可能性を指摘できる。また左右の距骨には弱い膝面が認められる。

〈傷痕および病痕〉

特記すべきは、少なくとも4箇所、あるいは5箇所に目立った骨損傷が認められることである。いずれも堅い利器、たとえば鉄製の刀剣類などで受けたような傷である。治癒反応がうかがえないことから、死亡前後に受傷した可能性は極めて高い。

順番に列挙すると、まず左肩甲骨の外側縁。関節窓から23mmほど下方に数mmばかりの切れ込んだ創傷があり、その辺縁の陥没骨折の状況から、やや下方から入れられた切創と考えられる(図6-2・3)。左腸骨の骨体の外側部の外表面には浅く長い切創のようのが2個あり、ひとつは下前腸骨棘から約20mm後方、そして寛骨臼から13mm上方のところの長さ15mmのもの、もう一つは大坐骨切痕の最深部から真上38mmのところに水平に走る長さ22mmのものがある。右腸骨の骨体の外側部の外表面にも1個ある。大坐骨切痕の最深部から斜め上方25mmのところにあり、長さは13mmばかりで、これは刺創のように見える。さらに前頭骨の右側の眼窓上縁部にも強力に削ぎ落とされたような損傷がある。その周辺の骨が欠けているため、これについては死亡前後の受

傷かどうか、にわかには断定できない。しかし印象としては、その可能性が高そうである。

いずれにしても、この男性被葬者が死亡時か、その後、ただごとではないほどの受傷を蒙ったのは間違いない。あるいは何らかの争闘の犠牲者かもしれない。同じことは3号人骨についても言えるだろう。

病痕としては、鉄欠乏性貧血の兆候であるクリブラ・オーピタリアが認められるが、その程度は弱い。また下顎の第3大臼歯は歯根にまで及ぶ、ひどい虫歯状態を呈しており、隣の第2大臼歯も歯冠の一部が「虫食い状態」となっている。おそらく虫歯のせいだろう、その部分の歯槽が特異的に吸収され、ひどい歯槽膜漏となっている。残る歯にはすべて、3号人骨よりは多い歯垢が付着している。

附記

たんなる参考程度にとどめるが、3号人骨と4号人骨の類縁性につき、簡単に触れておこう。この両個体の身体特徴には軽視できないほどの相似性が認められる。まず身長であるが、どちらもかなりの高身長であったこと。次に、どちらも全体に華奢な部類に属する体格をしていたらしいこと。それに、どちらも左上腕骨に滑車上孔を有することなどである。この滑車上孔は男性では珍しい形質であることも強調しておく必要があろう。

こうした共通点を考えると、両被葬者の間に何らかの血縁関係があったと想定するのが理にかなっているようと思う。両人骨ともに顔面骨が完全に壊れ、それに4号人骨で残存する歯が少ないことが、かえすがえすも悔やまれる次第である。

(京都大学・霊長類研究所 片山一道・杉原清貴)

5 飛鳥藤原第85次調査（四分遺跡）

における自然科学調査

SX8820、SD8812、SD8819、SE8818、SD8814において、花粉分析、寄生虫卵分析、種実同定を行った。

分析方法について

寄生虫卵分析は試料となった堆積物に、簡別、沈殿、フッ化水素酸の各処理を加えて行った。花粉粒の分離抽出は、水酸化カリウム、簡分、沈殿、フッ化水素酸、アセトトリシス処理、染色の各処理を行った。プレパラート

はグリセリンゼリーで封入して作製し、生物顕微鏡で観察した。種実同定は試料となる堆積物に簡用いて水洗選別を行い、実体顕微鏡で観察を行った。同定は形態および現生標本との対比で行った。

SX8820人骨周囲の分析

SX8820では、2体の人骨の寛骨上、寛骨下、胃付近、ベースまた墓壙上の10点の堆積物の分析を行った。分析の結果、寄生虫卵と種実は、各試料とも検出されなかつた。花粉は、イネ科を中心に検出されたが、数量は少ない。花粉群集は、人骨と直接関連するものではなく、堆積物に取り込まれた周囲の植生を反映したものとみなすことができる。

SD8812、SD8819、SE8818の分析による弥生中期の古環境

弥生時代中期前葉にあたるSD8812では、コナラ属アカガシ亜属とイネ科の花粉が優占し、アカザ科・ヒユ科やヨモギ属、クリーシイ属が伴われる。周囲はイネ科を主にアカザ科・ヒユ科やヨモギ属の草木植物が生育し、水はけのよい環境であった。コナラ属アカガシ亜属（カシ）とクリーシイ属（ここではシイ）を主とする照葉樹の森林も比較的近接して分布していたとみなされる（図8）。

弥生時代中期後葉にあたるSD8819、SE8818では、上位に向かってコナラ属アカガシ亜属とクリーシイ属の花粉が減少し、イネ科を主にアカザ科・ヒユ科、ヨモギ属が増加する。この時期に周囲の森林が減少し、草本の生育する人為地が増加したと考えられる。

各遺構とも汚染による少量の寄生虫卵が検出された。

SD8814出土種実の栽培植物

SD8814の堆積物について、200ccを0.25mm簡、1000ccを1mm簡で水洗選別し、種実を検出した。その結果、ヒメコウゾ、キイチゴ属、イネ（炭化米）、雑穀、ササゲ属が検出された（表2）。雑穀は穎が欠落し細分は困難であった。ササゲ属は小型のもので、リョクトウないしアズキのいずれかである（図9）。イネ、雑穀、ササゲ属はいずれも火をうけて炭化して残存したものである。以上ここで四分遺跡の弥生時代中期後葉の構造において、イネ、雑穀の栽培植物のほかに、ササゲ属のマメ類が検出された。数量もまとまっており、栽培されていたとみなされる。なお、ヒメコウゾ、キイチゴ属も食用となる。

（天理大学附属天理参考館 金原正明、古環境研究所 金原正子）

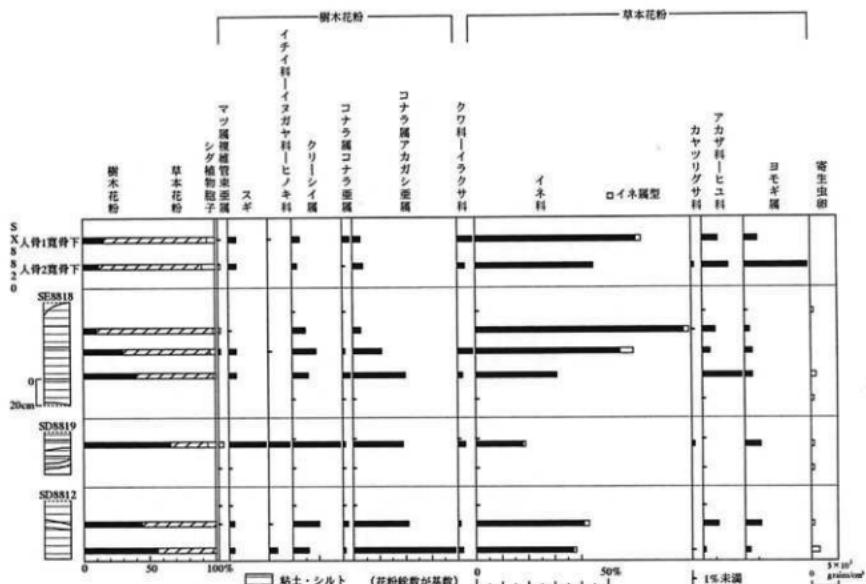


図8 飛鳥藤原第85次調査(四分遺跡)の主要花粉ダイアグラム

学名	分類群	和名	試料200cc中		試料1000cc中	
			部位	0.25mm筒	1mm筒	1mm未満
<i>Arbor</i>	樹木					
<i>Broussonetia kazinoki Sieb.</i>	ヒメウツジ	種子	6	1		
<i>Rubus</i>	キイチゴ属	核			2	
<i>Herb</i>	草本					
<i>Oryza sativa L.</i>	イネ	果実	6	1		
		穎	+	+		
<i>Milet</i>	雑穀	果実	1			
<i>Vigna</i>	ササゲ属	種子	13			
Total	計		26	4		

表2 SD8814出土種実

6 四分遺跡出土の動物遺存体

遺跡出土動物遺存体の概要

弥生時代の集落遺跡である四分遺跡からは多くの動物遺存体が出土し、そのうち同定できた破片数は422点にのぼる。それらは井戸や溝からの出土が多く、他の弥生時代の集落遺跡での出土傾向と類似する。出土した動物遺存体は発掘区の西側半分を占めるSD8814から最も多く出土し、同定点数は171点で、同定できた破片数の40%である。遺跡から出土した動物種は爬虫類1種、哺乳類8種の計9種で（表3）、そのうちイノシシ224点と



図9 ササゲ頭骨

ニホンジカ179点とで同定できた総点数の95%を占める。その他の種は各1~5点の出土である。イノシシはSD8814から88点出土しており、下顎骨8（遺跡全体23、以下同じ）点、椎骨7（16）点、頭蓋骨・上顎骨が各5（各12）点、上腕骨・桡骨・中節骨が各4（各11、9、6）点で主要な部位を占める。この他SD8812にも42点と集中が見られる。ニホンジカもSD8814から79点出土し、頭蓋骨・椎骨・脛骨が各7（各11、14、15）点、下顎骨・上腕骨が各5（各8、12）点で主要な部位を占める。両種とも各部位の骨が偏りなく出土している。

弥生時代の動物遺存体における最近の問題として、ブ

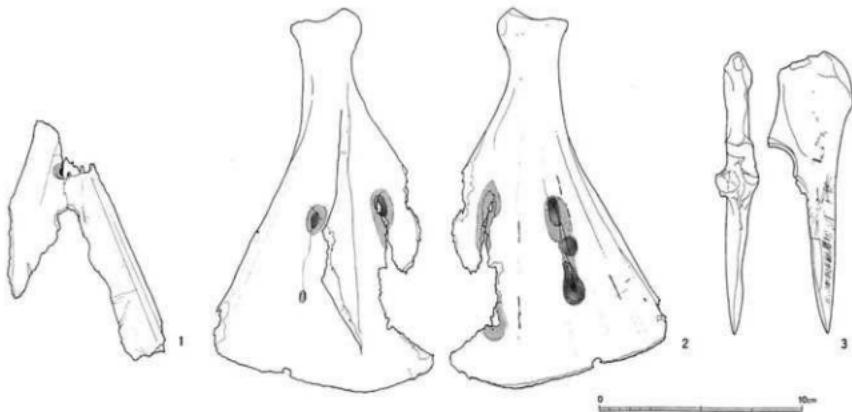


図10 出土骨器 (1 SD8844, 2・3 SE8818)

タの存在があげられる（西本豊弘、1992、「朝日遺跡の弥生時代のブタ」『朝日遺跡』愛知県埋蔵文化財センター、pp.213-241）。西本は弥生時代のブタの指標の一つとして若獣への偏りを挙げているが、四分遺跡出土イノシシの上下顎骨及び達歯齒の萌出段階と磨耗度、四肢骨の化骨化状態でもその傾向が見られた。しかし形態的特徴としては西本の挙げる指標を満たす資料はなく、今後の課題として残る。

また、SD8814からはニホンジカの肩甲骨を利用したト骨が出土している（図10-1）、直径5mmほどの扁円形の蛇目状を呈する灼痕が1箇所見られる。近位部に向かって複数の灼痕が存在すると思われるが、帶状に焼け抜け、骨の辺縁は波状になっている。一方SE8818からはイノシシの肩甲骨を利用したト骨が出土している（図10-2）。灼痕が2列に見られ、そのいずれもが筋粗面の発達しているところに位置する。これらのト骨は神澤の分類の第2形式に当たる（神澤勇一、1976、「弥生時代・古墳時代および奈良時代のト骨・ト甲について」『駿台史学38』駿台史学会、pp.1-25）。神澤は第2形式の特徴として、刀子状の利器で骨の表面を削ってから、焼灼を加えると述べているが、四分遺跡出土のト骨にはそのような痕跡は見られなかった。また、ニホンジカの頭蓋骨には、頭頂部が打ち割られているものも存在した。

SE8818からはニホンジカの尺骨を素材とした刺突具が出土している（図10-3）。近位部を握りとし、遠位部を研磨して尖らせている。この形態の骨角器は、绳文時代前期から見られる。

解体痕による石器・金属器の違い

遺跡から出土する動物骨の表面には、解体に伴う切痕、切痕などの傷痕が残っていることが多い。その切痕を電子顕微鏡で観察することにより、利器が石器か金属

爬虫類

カメ目 TESTUDINES

スッポン科 Trionychidae

スッポン *Pelodiscus sinensis*

哺乳類

食肉目 CARNIVORA

イヌ科 Canidae

イヌ *Canis familiaris*

タヌキ *Nyctereutes procyonoides viverrinus*

イタチ科 Mustelidae

テン *Martes melampus malampus*

クマ科 Ursidae

ツキノワグマ *Ursus thibetanus*

齧歯目 RODENTIA

リス科 Sciuridae

ムササビ *Petaurus leucogenys*

偶蹄目 ARTIODACTYLA

ウシ科 Bovidae

ニホンカモシカ *Capricornis crispus*

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

イノシシ科 Suidae

イノシシ *Sus scrofa leucomystax*

表3 四分遺跡出土動物遺存体種名

器かを区別することを試みた。分析手順としては、印象剤PROVIL（Bayer Dental社製）で切痕のレプリカを取り、観察を行った。比較標本として現生ブタの骨に石器及び金属器で傷を受けたものを作成し、遺跡出土の資料と比較した。石器は黒曜石及びサスカイトのフレイクを使用し、金属器はステンレス製の果物ナイフを使用した。その結果、石器による傷はV字状を呈し、傷の内部に平行する多数の細かな線状痕が走るのが特徴であることがわかった（図11）。一方金属器による傷は、1本の細い傷が走るだけで細かな線状痕を伴わないことがわかつ

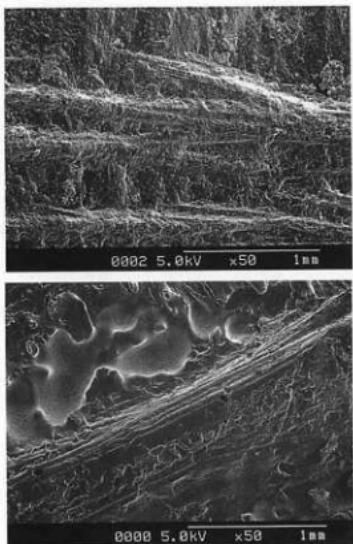


図11 上 四分遺跡出土イノシシ椎骨(SE8818)
下 現生ブタ比較標本(ワカイト)

た。この二種の違いを石器・金属器による切痕の違いと仮定し、四分遺跡から出土した傷痕のついた動物骨82点のうちの20点について観察を行ったところ、それらの切痕の多くが石器によると思われることが明らかとなった。出土動物骨は、出土遺構によって時期差があるが、その中の石器から金属器への移行は認められず、中期前葉から後葉にかけてこれらの作業には主に石器が使用されていたのではないかと考えられる。ただし、現段階では比較標本の数・種類ともに少なく、今後の検討が必要である。傷痕の残る位置としては、肩甲骨遠位部・上腕骨近・遠位部等に多く見られた。今後さらに分析を進め、金属器の使用開始時期の推定と、それに伴う解体技術の変化の様相を明らかにしていきたい。また解体に関しては、骨齧食の結果と思われる螺旋状に削れた骨が40点出土している。このような螺旋状の骨や骨に残された切痕は、弥生時代においても動物資源が積極的に利用されていたことを窺わせるものである。なお、本研究では京都大学農学研究科並びに理学研究科の協力を得た。

(京都大学大学院人間・環境学研究科 田邊由美子)

7まとめ

第85次調査における成果をまとめると、以下のとおりである。

☆藤原宮期あるいはそれに先行する時期については、比

遺構	種名	部位	判定
SD8812	イノシシ	大腿骨	不明
SD8812	ニホンジカ	大腿骨	研磨?
SD8813	ニホンジカ	軸椎	石器
SD8814	イノシシ	上腕骨	石器?
SD8814	ニホンジカ	中足骨	擦り切り
SD8814	ニホンジカ	換骨	イヌによる噛み痕?
SD8814	ニホンジカ	寛骨	石器
SD8814	ニホンジカ	上腕骨	不明
SD8814	ニホンジカ	上腕骨	石器
SE8818	イノシシ	上腕骨	不明
SE8818	イノシシ	椎骨	石器
SE8818	ニホンジカ	上腕骨	石器
SD8815	ニホンジカ	頭蓋骨	石器
包含層	イノシシ	上腕骨	石器
包含層	イノシシ	下頸骨	石器
包含層	ニホンジカ	上腕骨	石器
包含層	ニホンジカ	大腿骨	イヌによる噛み痕?
包含層	ニホンジカ	中足骨	石器
試掘トレンチ	イノシシ	肩甲骨	石器
耕土中	ニホンジカ	換骨	石器

表4 解体痕分析結果一覧表

較的規模の大きい建物の存在を確認した。

☆弥生後期・古墳時代の水田については、遺存状態はきわめて悪いが、当地点におよんでいることを確かめた。☆下層区では、内濠が中期前葉から後葉にかけて、幾次にもわたって掘削されていた。特に中葉から後葉の内濠は途切れで陸橋になっており、四分遺跡の北西部にあたるこの地点が通路になっていた可能性が高い。出入口については、第80次調査区において既に1箇所確認しているので、四分遺跡の北側において東・西に2箇所あてていたことになる。

☆四分遺跡では、土壤墓は第79・第80次に統いて、これで3例目である。第79・第80・第85次調査区と四分遺跡を囲む北部中期環濠域に築いている。すなわち中期後葉に環濠の機能が中断し、中期に土壤墓域が形成された。

☆第85次調査でみつかった土壤墓は、2体合葬で、人骨の遺存状態はきわめて優良である。

☆3号人骨(女性)には、生前に内臓に射込まれたとみられる打裂石器がみつかった。4号人骨(男性)には、鋭利な金属器によるとみられる切傷が多数あって、治癒反応はない。これらの事実は、中期には、石器と金属器による武器を併用していたことを示す。この2体は、このような環境下に、暴力的に生命を絶たれたと推定できる。

☆花粉分析によれば、中期前葉から後葉にかけて、周辺の照葉樹林は次第に減少していった。

☆中期後葉には、四分遺跡においては米の他に雑穀やササゲ属の豆を確実に食用にしていた。

☆中期前葉から後葉まで、長骨は折って骨髓を利用していたこと、獸骨の骨端に残った解体痕跡から、基本的には肉は骨から切り離して調理していたこと、さらにその利器には石器を用いていたらしいことがわかった。

(深澤芳樹)

付 編

藤原宮第80次調査(四分遺跡)出土2号人骨

<保存状態>

人骨の保存状態はきわめて悪い。すべての骨は、表面が風化し、ひどく腐食した状態である。水分を多く含んだ粘土質の土壤に埋まつた骨特有の腐食状態となってゐる。多くの骨について、左右、上下、前後の判定はそれほど正確にはできない。頭骨は比較的よく残り、かすかにではあるが、顔の輪郭がわかる状態である(図12-13)。

<骨格の所見>

1体分の人骨の全身の骨格が残っているようである。

南側から順に頭蓋骨・上肢骨・鎖骨などがあり、その東に、頭蓋骨からはずれた下頸骨が存在する。

椎骨は上肢骨などの下に潜っているが、ほぼ交連した状態で腰の方にのびているようである。

腰椎は仙椎と交連しているように見える。左右の腰骨と仙骨は骨盤を形づくった状態である。右の腰骨と交連した状態で、右の大転骨が西にのびる。右の脛骨は大転骨と交連した状態で東にのびる。従って腰は非常に強く鋭角的に折れ曲げられた状態である。左の大転骨は、上部が潜っているために定かでないが、おそらく左腰骨に交連した状態であろう。左の大転骨は下部を破損する。左脛骨は動いた状態で東の方に位置する。右足の骨は下腿骨と交連した状態で左の大転骨の東の方にちらばっている。一番北に骨塊があるが、これについては何の骨かわからない。

<頭蓋骨>

頭頂が南を向くようにやや動いている。

<下頸骨>

原位置から大きくはずれた場所にある。しかも天地逆さまとなっている。

<肋骨>

とくに動いているとは見えない。何本かの肋骨は整然と並んだ状態にある。

<鎖骨>

これが左の鎖骨だとしたら、原位置からそれほど動いているとは思えない。

<下肢骨>

大腿骨はいずれも股関節で腰骨と交連しているようである。とくに右側は確実である。右の下肢骨は、股関節・膝関節・足関節すべて交連した状態である。しかし、左の下肢骨については大転骨の下部から遠位の骨がひどく位置がずれているのは間違いない。

<計測値>

頭蓋骨	最大長概測径	175mm
"	最大幅概測径	140~145mm
"	上顎高概測径	62~65mm
下顎骨	下顎角幅概測径	100mm
右大転骨	最大長概測径	400~410mm
右脛骨	最大長概測径	310~320mm

推定身長は150cm程度で、小柄な骨格であろう。

<身体特徴>

顔は非常に扁平で、眉間から鼻根部、鼻骨にかけてのプロフィールは、ほとんどのストレートである。頬骨はよく張り出している。顎面骨も脇頭蓋も変形しているため、詳細な特徴はわからない。

下顎骨は小柄である。

各長骨も小柄である。

<性別>

大坐骨切痕の形状、乳様突起の大きさ、眉間の膨らみの弱さなどから、女性骨と考えられる。全体的に骨格が小柄であること、眼窩上縁が鋭いことなども、女性骨であるという可能性を補強する。

<死亡年齢>

詳しい年齢はわからないが、大転骨や各長骨の骨端が完全に融合しているように見えることから、成人的骨であることは間違いない。

<埋葬姿勢>

骨盤の位置から、腰の部分は前部が上を向いていたこ



図12 2号人骨出土状態 西から

とは確かである。しかし脊柱に関しては、上半身をひねって、顔が西を向くような体勢で並んでいる。右腕は外側部を上に向けて肘を折り曲げ、前腕が頭部の方に向かっている。左腕は上腕骨の前部を下に向け、肘を折り曲げ、前腕骨は頭部の方に向く。

＜総括＞

右の下肢骨を見る限り、届葬の状態で埋葬されたのは間違いない。骨盤はともかく、上肢と下肢は横臥の状態となっている。右膝の部分、および両手骨の状態から判断して、結縛などの方法で強く固定して埋葬された可能性が大である。まだ軟部組織が付いている時に結縛したと考えられる。下頸骨・頭蓋骨・左大腿骨が動いているのは、埋葬後しばらくの間、墓壙内に相当のスペースがあったからであろう。墓壙は掘ったままの状態ではなく、上に蓋などをかぶせていたと思われる。

(京都大学・芸長類研究所 片山一道)

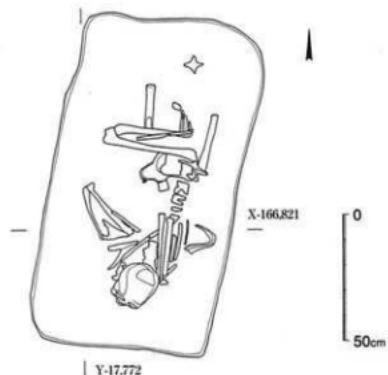


図13 2号人骨出土状態 1:20

春	夏	秋	冬
※毛利光俊彦（史料） 深澤芳樹（考古第1） 寺崎保広（史料） 村上 隆（考古第2） 羽鳥幸一	黒崎 直（考古第1） 西口壽生（考古第2） ※長尾 充（遺構） 木戸部秀樹	松村恵司（考古第2） 串花谷 清（考古第1） 島田敏男（遺構） 伊藤敬太郎	巽淳一郎（遺構） 千田剛道（考古第2） 佐川正敏（史料） 串小澤 繁（史料） 鈴木恵介
調査期間 97.04.01～97.10.03	97.07.07～97.11.11	97.10.06～98.02.03	97.12.18～98.06.05
括弧：部長 堀熊兼勝		写真担当：井上 直夫／ 保存科学：村上 隆	

表5 1997年度 現場班編成 中核担当者

◆内裏南辺地区の調査 —第83-7次・第83-12次

1 はじめに

内裏南辺地区にあたる醍醐池南岸で、現状変更に伴う事前調査を2件実施した。第83-7次調査は擁壁改修に、第83-12次調査は西端の取水口改修に伴うものである。第83-7次調査地は内裏内郭の南辺に位置し南を限る施設や第18・20次調査（『概報』6・8）で検出した先行朱雀大路SF1920、南北大溝SD1901Aの存在が予想された。内裏外郭施設は、第2・4・11・22・55・58・61・70次調査（『報告』I・III、『概報』5・9・18・20・21・23）や、奈良県教育委員会の調査（『藤原宮』奈良県、1969年）によって、北面が掘立柱単廊、東・西・南面が掘立柱廊で、南の廊は朝堂院北回廊の両翼に取り付くことが分かっている。規模は、東西303m、南北378m、柱間は約3m等間である。外郭内は、南半分で調査が進んでいるが、確認された建物は少ない。東側には、桁行8間、梁間2間以上の掘立柱南北棟建物SB6052と朝堂院北回廊に接して桁行6間以上、梁間4間の礎石建東西棟SB530がある。西側には、桁行7間、梁間2間の掘立柱南北棟建物SB1751があるのみ。内郭では、掘立柱建物SB2230→東西廊SA2231→東西廊SA2232の2回の建て替えが確認された。また奈良県の調査では外郭の北単廊から約18.5m南で、柱間約3mの東西廊SA125を確認している（図14参照）。内裏は、その中心に醍醐池が位置するが、今回の発掘により、池岸においては、造構が比較的良好残っている状況が確認できた。

2 基本層序

第83-7次調査地の基本的な土層は、茶褐色粗砂（池の堆積土）、茶灰褐色土、その下に、西側では茶褐色砂質土、灰褐色粘質土、黄褐色微砂、東側では暗灰褐色粘質

土・暗黄褐色土が堆積する。地表面下0.2~0.3mの茶褐色砂質土または暗灰褐色粘質土の上面で造構を検出した。第83-12次調査地は、深さ1m以上にも及ぶ池の堆積土で被われ、池底は確認していない。北トレントの西端部にわずかに旧池岸が残るが、その部分では厚さ0.2m程の遺物含包層（暗灰褐色粘質土）の下に黄褐色粘土の造構面（標高68m）を確認した。

3 検出造構

検出した造構は、古墳時代・藤原宮直前期・藤原宮期、藤原宮期以降の4時期に大別できる（図15・17）。

古墳時代の造構

構4条、土坑1基がある。SD8862は調査区西端にある。幅約1.5m以上、深さ約0.4m以上の南から北に流れる自然流路である。調査区の東側でも、自然流路3条を検出した。いずれも地形に沿い南東から北西に流れる。SD8863、SD8864、SD8865の順に新しい。SD8863は幅2m以上、深さ0.2m、SD8864は幅0.6m以上、深さ0.3m、SD8865は幅1m前後、深さ0.3mである。SK8867はSD8863の西北にあり、長辺が0.8mほどの不整形の土坑である。埋土から少量の須恵器片が出土した。

藤原宮直前期の造構

先行朱雀大路SF1920の東側溝SD1921と南北大溝SD1901Aがある。SD1921は幅1m、深さ0.6mで、南北約3m分検出。それより北は削平されて残っていない。上層に灰褐色微砂、下層に茶灰褐色粗砂が堆積する。

SD1901Aは、藤原宮・京の造営に関わる資材運搬のための運河造構と考えられる。今回は、南北約10mを検出し、約2m分について溝底まで掘り下げた。幅5m、深さ1.6mある。従来同様、護岸施設はない。溝内の上層は4層に大別できる。下層は厚さ0.4mほどで粗砂が堆積

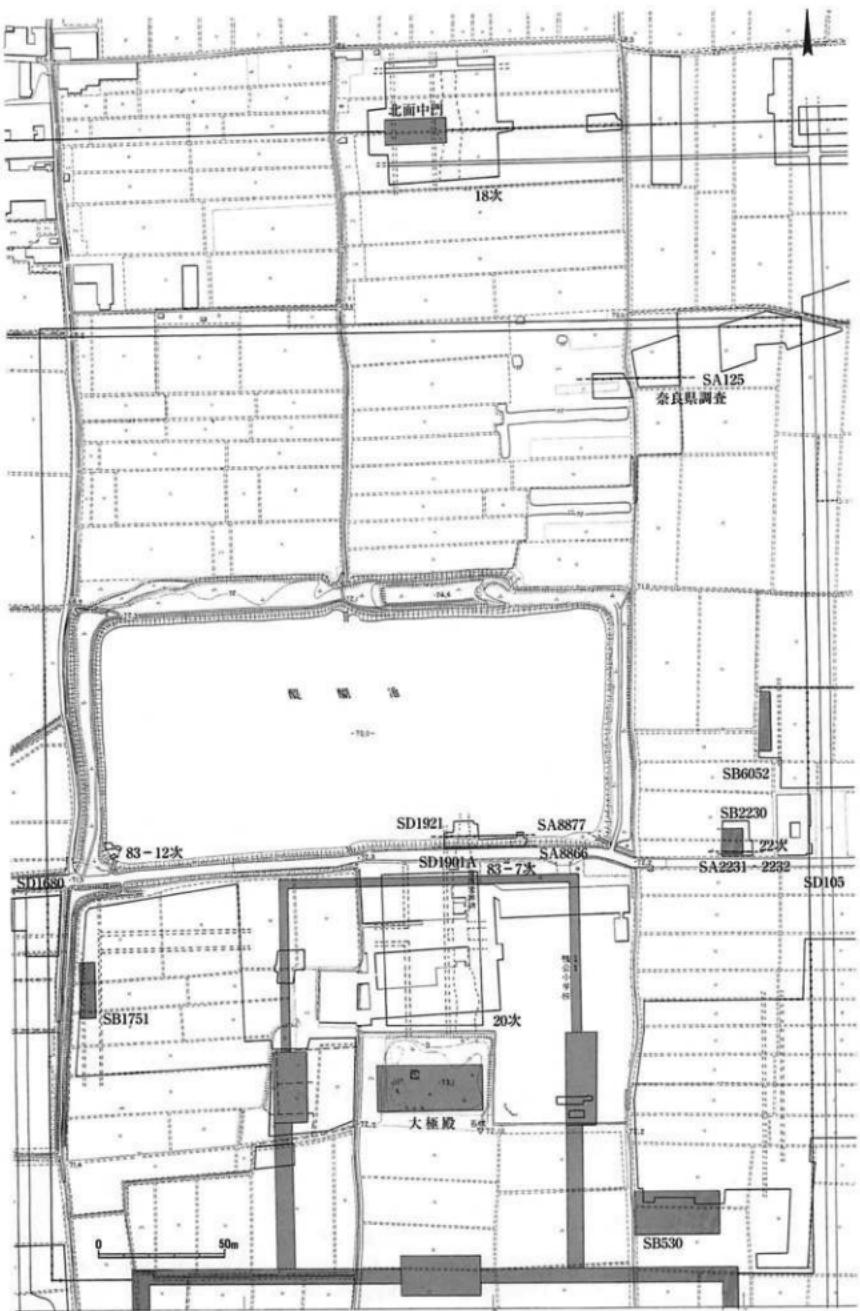


図14 内裏地区の構造図および調査位置図 1:2000

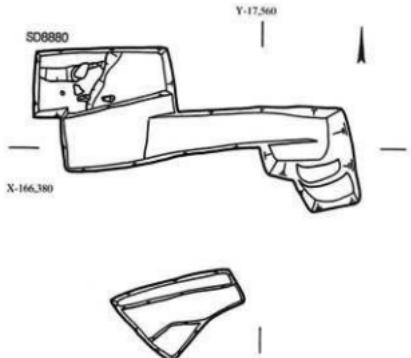


図15 第83-12次調査断構図 1:100

し、かなりの水量があったことを示す。中層は厚さ0.6mほどで、粘土や粗砂が互層に堆積する。中層の上面には多量の木片や木屑を含む。上層(厚さ0.4m)と最上層(黄褐色粘土、厚さ0.2m)は、藤原宮の造営時に、一気に埋め立てた整地土と考えられる。上層と最上層の間には、多量の丸・平瓦を敷き詰めるように投棄している。最上層は堅くしまっており、池の水に洗われることなく、この部分だけが島状に盛り上がって残っていた。これらの仕事はSD1901Aを埋め立て時に不同沈下を防ぐ目的で行われたと考える。今回確認したSD1901Aは、上流の南側延長部分(幅6~7m、深さ約2m)や下流の北側延長部分(幅7m、深さ1.4m以上)より、規模が一回り小さい(図18)。

藤原宮期の遺構

東西塀2条がある。2条とも、SD1921やSD1901Aを埋め立てた後に作られている。掘立柱東西塀SA8877は、調査区西側で4間分、さらに東端でも柱穴1個を検出した。柱間は約3m等間である。柱穴は1辺1~1.2mの方形で検出面からの深さは、0.5mほどである。仮に、SD1901Aの上を覆う整地土の上面が藤原宮期の地表面に近いとするとき、深さは、1~1.2mほどになる。柱抜取穴の埋土にのみ



図16 南北塀SA8877と下層の溝SD1901A・SD1921 西から丸・平瓦が含まれる。SA8877を東へ延長すると22次調査で検出したSB2230の身舎の北側柱列に当たるので、ここまででは延びないようである。掘立柱東西塀SA8866は、SA8877の南4.2mに位置する。柱間は約3m等間で柱筋がSA8877と当たる。9間分検出。柱穴は1辺0.5mの方形で、検出面からの深さは、0.2~0.3m程度である。本来の深さは、0.5m以上はあったのだろう。SA8866を東へ延長すると22次調査区にかかるが、ここでは検出されていない。2条の東西塀が同時併存するのか、前後関係があるのか明らかにできなかった。

第83-12次調査地では、北端で東西方向の石組溝SD8880を検出したのみである。

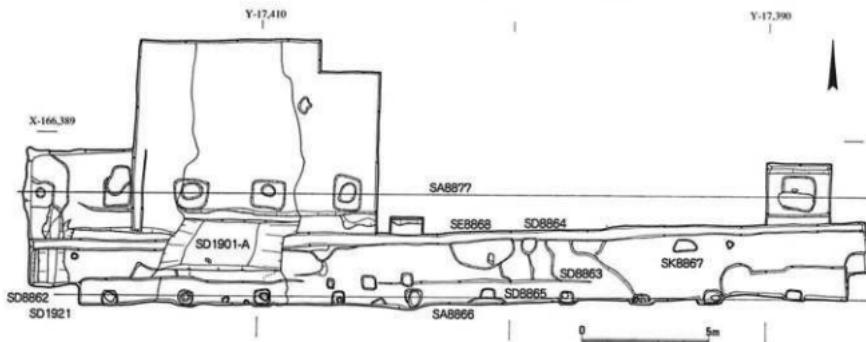


図17 第83-7次調査断構図 1:200

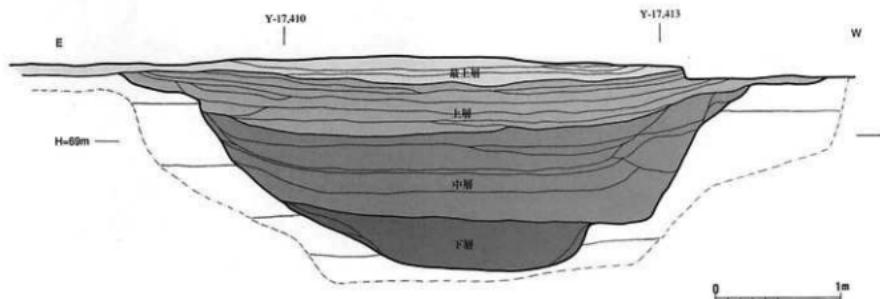


図18 連河SD1901A南壁土層断面図 1:40

藤原宮期以降の遺構

調査区中央北辺に素掘井戸SE8868がある。円形で、直径2m、深さは0.7mである。南半のみ検出。出土遺物が少ないので時期ははっきりしないが、池の堆積土直下で検出した。醍醐池築造前に作られた野戸であろう。

4 遺物

遺物には土器、瓦、木製品がある。

瓦壙類 軒瓦、丸・平瓦、切面戸瓦、塙がある。軒丸瓦は、6273B、6273D、6281Aが各1点、軒平瓦は6641Eが4点、6643Cが1点、6646Dが2点、丸瓦は、226点、53kg、平瓦は、333点、72kgが出土した。丸・平瓦の大半は粘土縁巻きつけ作りである。SD1901Aの最上層と上層からは、6273D、6643C、6646D、丸瓦(82点、25kg)、平瓦(94点、33kg)、中・下層からは、軒瓦は出土せず丸瓦(3点、0.5kg)と平瓦(9点、0.4kg)が出土した。この他、醍醐池岸辺で、遺物の採集をしたところ、南岸に濃密な瓦の散布を認めることができ、軒丸瓦6275D 1点と6281A 2点、軒平瓦6641F 3点と6646D 1点、丸瓦66点41kg、平瓦97点25kgを採集した。

木製品 SD1901Aの下層から曲物と横樋が出土した。木簡は、SD1901Aの下層から1点出土した。断片のため読みはできない。

5まとめ

今回の調査の成果と今後の課題を以下に列記する。

- 醍醐池の岸際には、遺構が比較的良好残っていることが確認できた。
- 藤原宮期直前の、先行朱雀大路側溝SD1921と南北大溝SD1901Aを検出した。ともに、藤原宮造営に先立つて埋め立てられており、SD1901Aの最上層・上層からは、多量の瓦類が出土した。
- 藤原宮期の東西堀2条を確認した。この2条の堀と

大極殿院北回廊や内裏北單廊などとの南北距離は以下のようになる(図18)。

SA8877とSA8866	4.2m
SA8877と大極殿院北回廊(心心)	18m
SA8877とSA125	約179m
SA125と内裏北單廊(心心)	約185m

ここで、特に注目されるのは、SA8877とSA125の南北距離が約179mになることである。これは、平城宮内裏(1期)外郭の南北距離176.7mに近い。また、ともに外側の区画施設から内側へ18mの位置にあり、柱間が3mで同じような大きさの掘形をもつ。これらのことから、藤原宮内裏の内郭を囲む北と南の堀である可能性がある。ただし、東と西を限る堀は、未検出のため、東西の長さは不明である。また内郭の南を限る堀SA8866とSA8877の関係についても明らかにできなかった。22次調査で検出した堀(SA2231・SA2232)の西への延長も含めて、内郭を限る区画施設についてはさらに検討が必要である。

(伊藤敬太郎)



図19 調査風景 背後の森が大極殿 北から

II

藤原京の調査

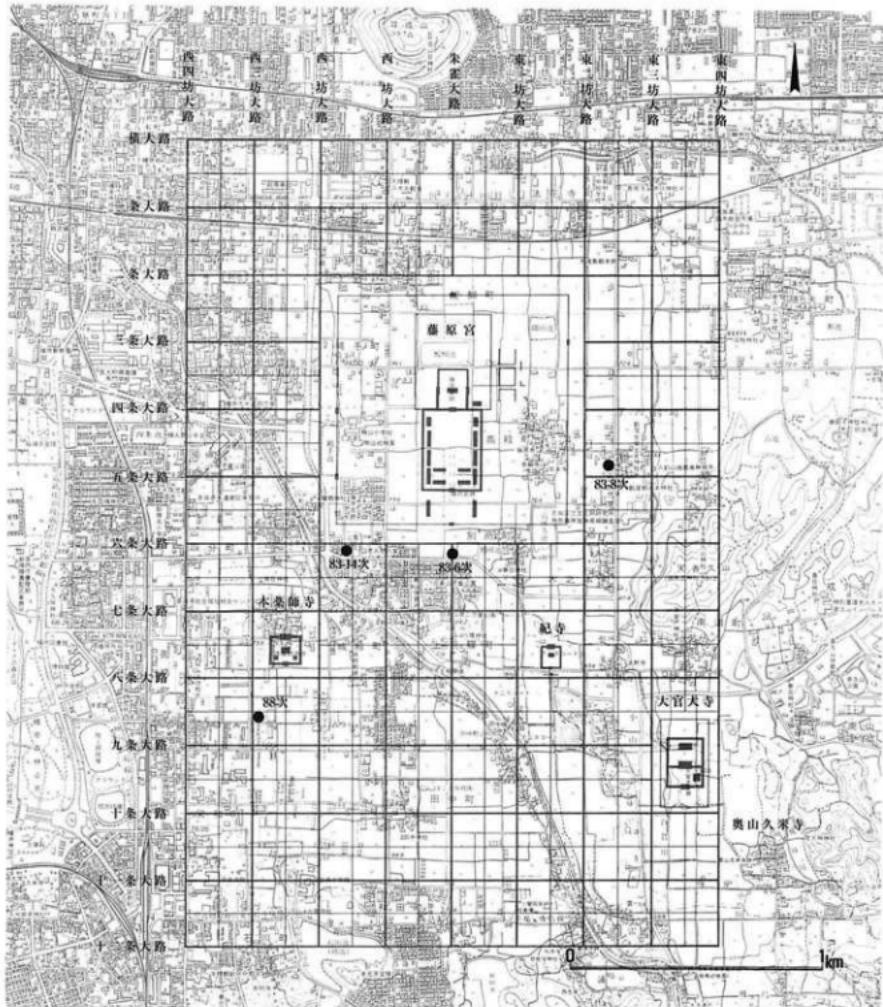


図20 藤原京の調査位置図 1:20000

◆藤原京右京九条三・四坊の調査 —第88次

1 はじめに

この調査は、食糧事務所建設とともにう事前調査として櫛原市城殿町で実施した。調査地は、本薬師寺西塔跡南西約400mに位置し、藤原京右京九条三・四坊にあたり、西三坊大路、九条条間路交差点などの遺構の存在が予想された。調査地周辺では、これまでに、本調査区のほぼ真北約130m、本薬師寺寺域西南隅位置における西三坊大路・八条大路交差点の検出（1976年、奈文研調査）をはじめとしていくつかの調査が行われている。これらの調査によって、特に、西三坊大路の路幅などに興味ある知見を得てきたが、一方、条坊側溝の認定に関わる問題なども浮上してきている。

今回の調査地は、こうした条坊道路関係および坊内

の状況を探ることを主な目的として、調査区を南北2区に分けて設定した。調査面積は、両区あわせて650m²である。

2 土層

調査地の基本的な土層は、上から水田耕土・床土（0.2～0.5m前後）でその下は、部分的に遺物包含層（灰褐色、0.1～0.2m前後）をはさみ、遺構検出面となる。遺構検出面は、南区では茶褐色粗砂層上面、北区では粗砂層の上に堆積した茶褐色粘質土上面である。粗砂層・粘質土は、旧河川による堆積である。

遺構検出面の標高は、南区東南隅付近が75.03mで、最も高く、北にいくにつれて下がり、北区西北隅付近が、74.50mで最も低く、調査区全体では、約0.5mの差がある。



図21 第88次調査区東半部の状況 中央の箇がSD3761 北から

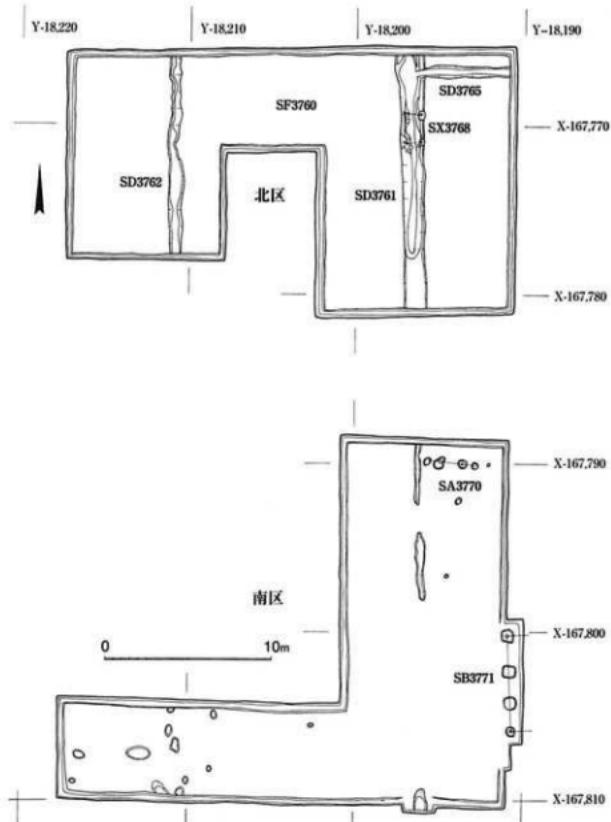


図22 第88次調査遺構図 1:300

3 検出遺構

古代の遺構は、藤原京期の南北方向の道路1条、東西方向の溝1条、掘立柱塀1条、建物1棟で、他に大小の土坑がある(図21・22)。なお、調査区全面にひろがる多数の中・近世以降の耕作溝については記述、図示を略す。西三坊大路関係 SF3760は、南北方向の道路で、西三坊大路と考えられる。北区では、残りがよく、東西両側溝をともない、道路規模は側溝重心で約14mある。東側溝SD3761は、幅約1.2m、深さ約0.4mある。溝内の堆積層は、底に薄い灰褐色粗砂層(3cm前後)、その上に灰褐色質土(0.2m前後)がある。南区では、底部の粗砂層がごく浅く断続的に遺存する。堆積層からは藤原京期の土器が少量出土した。今調査区内における東側溝の方は、座標北に対し、西に振れる。西側溝SD3762は、幅約1.0m、深さは北よりで、0.2mあるが、南ほど残りが悪く、南区

では、まったく残っていない。溝の方は、SD3761同様、北で西に振れる。溝内にはごく一部の箇所で、底部に0.1mほどの青灰砂礫層があるほかは、大部分、暗茶褐色質土が堆積する。ごく少量の土器片が出土した。

SD3761の北よりには橋SX3768がかかる(図23)。東南をのぞく3箇所に橋脚の柱根が残り、いずれも打ち込み式で、一辺約5~10cmの断面不整形の角材で下端を削って尖らす。残存長90~96cm。橋脚の間隔は、東西0.9m、南北1.8mである。西南の橋脚は、垂直に打ち込まれるが、西北と東北の2箇所の橋脚は内側に傾斜している。東北には小型の柱穴掘形(一辺35~50cm)が重複する。掘形は、橋脚の打ち込みに先立って設けられており、柱痕跡が残る。橋の改修を示すものであろう(図24)。東南には橋脚は残らず、小型の柱穴のみである。橋の周辺には小さく削った板石(椎原石)や、平瓦片をまばらに敷く。

九条大路関係 北区には、東西溝SD3765があり、幅0.4



図23 橋SX3768 南東から

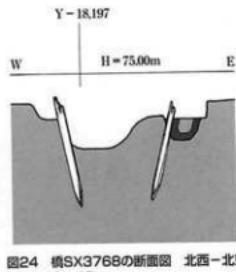


図24 橋SX3768の断面図 北西—北東
1:40

m、深さ0.4mで、西端で西三坊大路東側溝SD3761と接続する。溝理土は灰茶褐色質で、土器小片を含む。この溝は、位置から見て九条条間路の側溝と思われるが、後述するように、南、北のいずれの側溝であるかは、問題がある。なお、SD3765と対称位置の東三坊大路の西側には、対応する東西溝は検出されなかったが、削平の著しい場所であり、存在したとしても、失われたとみられる状況であった。

掘立柱壠・建物 南区において、掘立柱壠、建物を検出した。東西塀SA3770は3間、柱間長2.9m。柱間隔は中央間が1.3m、両脇が0.8m。柱穴の方位は東で南にやや振れる。建物SB3771は、南北方向の3間分を検出した。柱穴掘形は、一辺が0.6~0.8mで、埋土は、わずかに10cmを残すのみ。削平が著しいことを示している。南端と北端の柱穴に柱痕跡がある。柱間総長5.8m。調査区の東に本体のある建物の西辺と思われる。柱穴は、東側溝とはほぼ一致する、北で西に触れる方位を示す。上記の塀、建物の柱穴埋土は、茶褐色質で、遺構検出面や遺跡の基盤をなす層とは土質が異なる。現状での遺構検出面の上に、かつて堆積していた土層のなごりであろう。

4 出土遺物

西三坊大路東側溝東側溝SD3761から出土した藤原京期の土器器・須恵器などの土器類が主なものである。瓦は、ごく少量である。土製品には泡彫形の埴輪がある。土器 遺物包含層(灰褐色)や中世以降の耕作溝からは、古代から近・現代にいたる土器類が出土した。藤原京期の土器類には、土器器の皿Cを漆のパレットに使用したものや須恵器の円面鏡の破片などがある。遺跡全体が後世に削平を受けたために、西三坊大路東側溝SD3761の遺物も少なく、かつ下層のみの堆積が残ったために比較的古い様相の土器類が出土している(図25)。土器器の器種には杯A(1)・杯B・杯C・杯H・皿A(2)・高杯H・小壺・壺(4~8)・鍋(9)等が、須恵器の器種には、杯A(15~17)・杯B(19)・杯B蓋(11~14)・碗A(18)・細頭瓶・壺等がある。土器器の壺(7・8)

は、あまり見かけない形態で、8は、壺の形態に似るが、火を受けた痕跡をとどめる。この他SD3761からは縄文土器・弥生土器・古墳時代の土器器も少量出土しているが、それらは、藤原京期の地盤をなす旧河川堆積や茶褐色土から遊離した遺物である。

瓦 本葉師寺所用の軒丸瓦6276Ab1点のほか、丸瓦6点、280kg、平瓦43点、1,930kgなどが出土している。

5 まとめ

西三坊大路 予想通り西三坊大路SF3760を検出した。東側溝の位置については、調査区のすぐ北の右京八条(1995年奈文研本葉師寺1994-3次調査)や、右京一条(1995年、櫻考古研究調査)などのこれまでの成果と照らし合わせると、同一の触れ(北で西に約25度強振れる)をもって一直線に通り、南北溝SB3761を西三坊大路の東側溝とみなすことには問題はない。いっぽう、西側溝の位置に関しては、東側溝との間隔が一定ではなく、右京八条では、溝心心15.2m(奈文研、1976年調査「藤原概報6」)であるが、右京一条(「奈良県道路調査概報1995年度第2分冊」)では、約8.3m、右京二条(1986年、奈文研第45-10次調査「藤原概報17」)では17m、などと場所によって異なる。最近の右京八条・本葉師寺寺域西辺における調査(1995年本葉師寺1994-3次調査)では、「藤原概報26」75頁参照)や、1996年奈文研本葉師寺1995-2次調査では、8.3mという数値が得られており、西側溝の認定に関して問題のあることが指摘されている(「奈文研年報1997-II」31頁)。今回は、東側溝SD3761と対になる南北溝としてSD3762があって、東側溝との心距離は約14mという、これまでの調査のいずれとも異なる値が得られた。従前の京内の奇数大路の検出例によると、7~8m前後であるが、これを本調査区にもそのまま適用できるかどうかは、問題である。本調査区の西三坊大路に関しては、本葉師寺寺域に近い場所に位置していることから、一般の条坊道路とは異なる規模を有していた可能性も考えられる。西三坊大路の規模については、なお周辺の調査例の集積を待って検討する必要があろう。

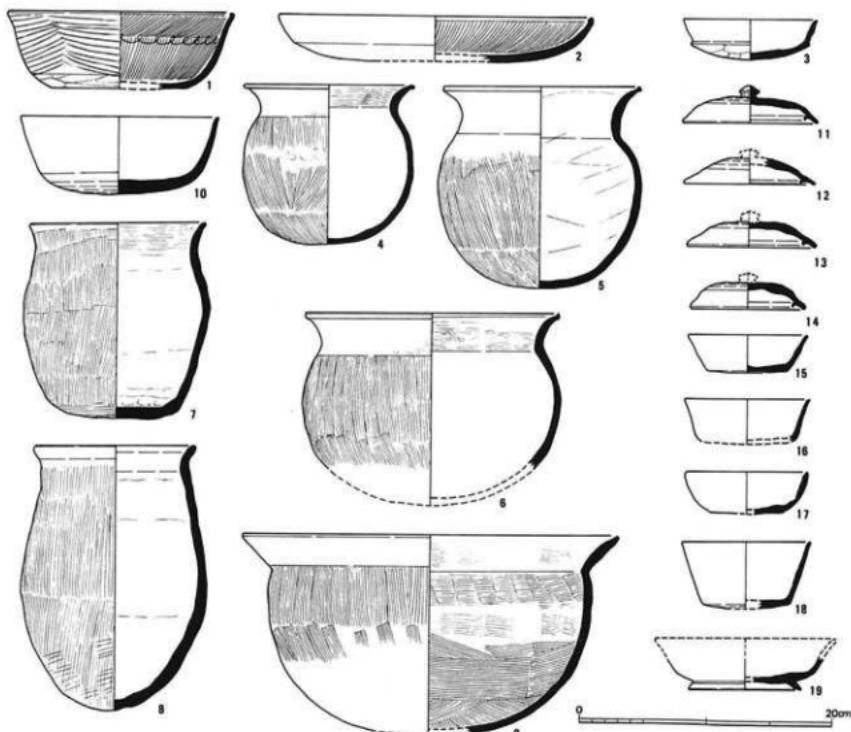


図25 西三條大路東側溝SD3761出土土器 1:4

九条間路 今回検出した東西溝SD3765が南北いずれの側溝に相当するかによって九条大路の位置が異なってくる。まず、八条大路心からSD3765までの距離は約133mである。九条大路との距離関係によって、判定する方法も考えられるが、残念なことに、近辺では、両側溝をともなった形での九条大路の検出例がなく、八条・九条両大路間の2分の1の距離をもって、条間路の位置を推定する方法は取り難い。また、これまでの実例では、条間路の位置にかんしては、路心を大路間の2分の1にあわせる場合と、条間路の南・北いずれかの側溝にあわせる場合など、多様なあり方が知られつつある。したがって、この数値のみから、SD3765がいずれの側溝に属するかを決めるこことはますます困難である。

SD3765に対応する側溝が検出されない理由としては、二つの場合が考えられる。一つは、SD3765が南側溝であって、北側溝は北の調査区外にある場合である。もう一つには、本来あったものが、削平によって失われた場合である。後者の場合は、造構面のレベルなどからみて、SD3765と同様の深さを持った溝であれば、当然検出されしかるべきであるので、削平されたとすれば、南側溝が極

端に浅かった状況を想定しなければならない。問題の決着は、北隣接地の調査をまたなければならないわけであるが、現状で二つの場合を想定して、今後に備えたい。

第一は、SD3765を北側溝とする場合である。この場合橋SX3768の位置が示唆的である。つまり、これまでの藤原京の調査例では、橋は、通例、道路交点に設けられており、かつ道路心と一致している場合が多い。橋の中心とSD3765の距離を南に折り返すと約7mとなり、これが九条間路の幅となるが、この値は既知の条間路の規模と大差はない。第二は、SD3765が南側溝の場合である。この場合、この橋は、大路から坊内（宅地内）への出入り口としての機能を果たすことになるが、従来の発掘例では、大路から直接坊（宅地）内へかかる橋の例はほとんど知られておらず、問題は大きい。

また、坊内の施設としては、塀や、建物の一部と思われる柱穴群を検出した。東西溝SA3770は、その位置からみて坊内の地割りなどにかかる施設かと思われる。特に、建物SB3771は柱穴の規模や、柱間からみて、規模の大きな建物の存在を示唆する。

（千田剛道 土器：巽）

◆右京七条二坊の調査—第83-14次

1はじめに

当調査は飛騨地区改良事務所建設に伴う事前調査であり、調査地は西二坊坊間路寄りの右京七条二坊の西北坪東北部にある。従前の同坪内で実施した調査（第29-1・5次、第48-11次北区）では、後世の擾乱や旧飛鳥川の氾濫によって大きく削平を受け、藤原京期の頗著な遺構は検出されていない。

2基本層序と検出遺構

調査地の土層は、上から客土・旧宅地の整地土・旧水田耕土・床土・遺物包含層（暗灰粘質土・茶褐粘質土）・弥生土器を含む黒褐粘土の順で、中世の耕作構は遺物包含層の面で、藤原京期の遺構は黒褐粘土面で検出した。遺構面は予想に反して西側が高く、東と北に傾斜する。

藤原京期の遺構には掘立柱建物があり、2棟分の計6基の柱穴を検出した。狭い調査区のため、棟方向・規模については定かでないが、柱筋・方位・柱穴の規模や形状から西と東の2棟に分離可能である。両建物間の距離は、約2.4m。西建物SB8883の柱間は2.4m等間、東建物SB8884の柱間は2.2m等間である。東建物SB8884の東から2番目の柱穴底面には根巻状の石の配列を確認している。いずれの柱穴も浅く、後世に大きな削平を受けたことを物語る。

3出土遺物

瓦と土器が整理箱1箱分出土している。瓦は極めて少ない。土器には、平安時代の土師器・黒色土器、藤原京期の土師器・須恵器と弥生土器がある。

(賀淳一郎)

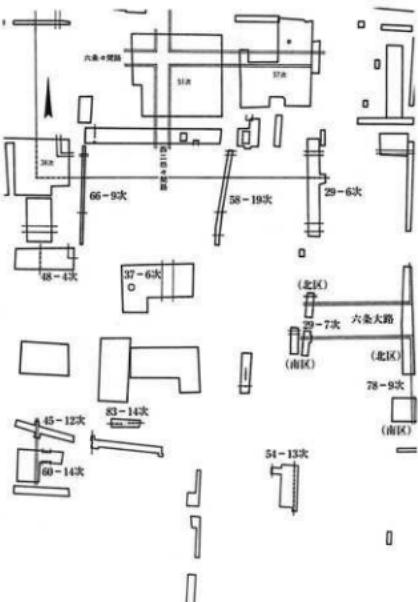


図26 右京七条二坊の遺構と調査位置図 1:2500

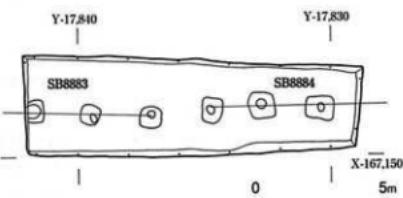


図27 第83-14次調査遺構図 1:200

III

飛鳥地域等の調査

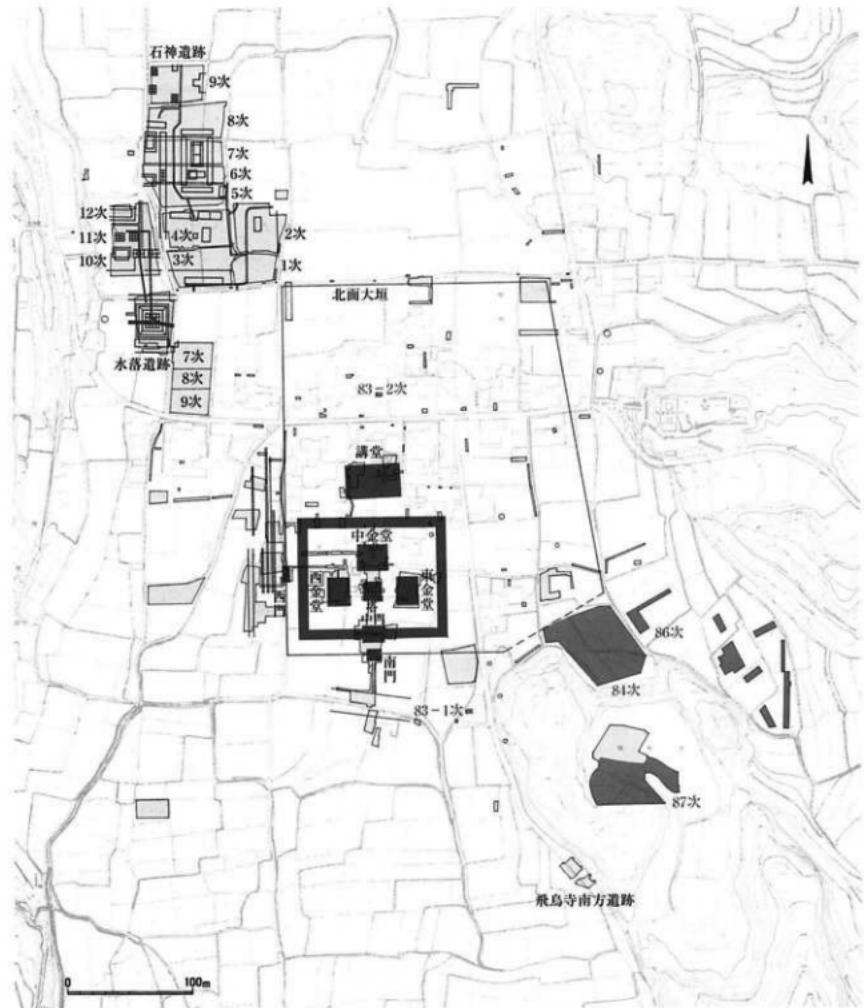


図28 飛鳥地域の周辺調査位置図 1:4000

◆飛鳥寺の調査—第83-1・2次

飛鳥寺東南方の調査（第83-1次）

調査は住宅改築に伴う事前調査として実施した。調査地は、飛鳥寺南門の東南方約80mに位置する。 5×3 mの東区と 1.5×2 mの西区を設定した。

東区の層序は上から、耕土、床土、黄褐色粘土、暗灰色砂質土（10世紀前後の土師器などを含む）をへて、約120cmで暗褐土なし暗黄褐土の遺構面にいたる。また、発掘区の西3分の1を更に掘り下げ、地表下約150cmで暗褐粘土の下層の遺構面を確認し、この面で小ピットなどを検出した。小ピットから出土した須恵器は5世紀後～6世紀初の年代である。二つの遺構面はともに東から西に緩く傾斜している。

検出した遺構は、上層の遺構として石敷SX041、石列SX042、南北溝2条、東西溝1条がある。

石敷SX041は上面が比較的平らな人頭大の石を敷いたもので原位置を止めていると判断した。この東と南にのこる石の抜取穴も一連のものであろう。石列SX042は発掘区を横切るように東西に並ぶが、石組溝や縁石のように面を

嵌めた様子は何れず、あるいは本来の位置から移動しているかも知れない。ただし、西で北に振れるあたりは、後述する周辺の遺構と類似する方位であり、やや気になるところである。南北溝SD043は石敷より上で、南北溝SD044は下で検出した。共に残りが浅く顕著な遺物はない。

西区も基本的な層序は同じで、地表下約140cmで暗灰砂質土の遺構面にいたり、中央が高く東西に緩やかに傾斜する落込を確認したのみである。更に地表下約2mで暗青灰色の地山となる。

これまでの調査によって、飛鳥寺南門より南には参道のがび、その南には南北幅約25mの石敷が東西方向に拡がることが判明している。この石敷は参道の延長部分が未舗装で途切れ、これを境にして東と西に拡がっているが、方位は西で北に約7度振れている。東西ともにどこまで及ぶかは未確認で、今回の調査区の西約30mで行った飛鳥寺1983-B調査までは石敷の存在を確認している。仮にこの振れのまま東に延長すれば、今回の東西両区はともに石敷の中に含まれてしまう位置にある。したがって東区で検出した石敷SX041はその一部に当たり、ここ

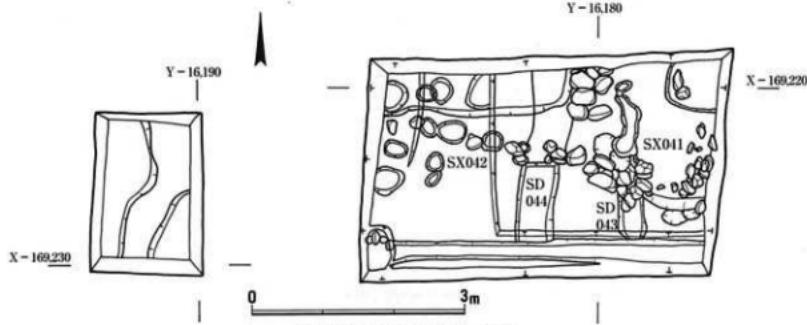


図29 第83-1次調査遺構図 1:70

以外は削平されてしまったと見るべきかもしれない。いずれにせよ、調査面積の制約があり、十分な結論が得られなかつたが、なお周辺の成果を待ちたい。

(寺崎保広)

飛鳥寺北方の調査（第83-2次）

調査は住宅改築に伴う事前調査として実施した。調査地は、飛鳥寺講堂基壇北邊から北へ52mに位置する。東西5×南北25mの調査区を設定した。

基本的な層序は上から、表土、灰色砂質土、暗褐色土（山土混じり）、褐色土をへて淡茶褐色砂質土の地山にいたる。褐色土までの各層上面で遺構を検出した。

主な遺構は、柱穴2基、土坑1基、近代の井戸1基である。検出した2つの柱穴は、共に山土を多く含む黄灰色土を埋土することから、一連の建物ないし廻になるものと考えられるが、調査区の制約から、その施設は判然としない。西の柱穴は東西にやや長い0.7×0.5mの方形の堀形で、深さは検出面から0.9mあり、残存状況は良好であった。円形の柱抜取穴を作った。東の柱穴堀形規模は判然としないが、柱痕跡をとどめる。両者の距離は柱穴位置間で2.5m（8.5尺）ほどである。柱穴堀形からは7世紀代の土器小片が出土した。

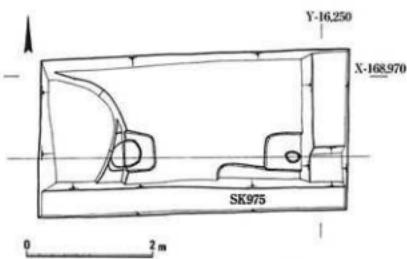


図30 第83-2次調査遺構図 1:80

東の柱穴より新しい土坑SK975は北肩の一部を検出したのみである。深さは0.25mで、断面は皿状を呈する。埋土は黄灰色粘土で、遺物は出土しなかった。

本調査区内の古代の遺構は、弥生・古墳時代の土器を少量含む褐色土を掘り込む形で検出され、地山と山土を含む埋土の色差が際立つ。地山を覆う暗褐色土に山土が混じることから、かつて褐色土上に遺構埋土と類似する整地が施されていた可能性が高い。したがって、遺構はその整地上面から掘り込まれ、埋められた後に削平を受けたために、上述のような土層観察結果となったものと推定できる。

本調査は調査面積が極めて狭い上に、遺物も少ないとから、遺構の性格・年代を確定することができず、今後の周辺における調査成果を併せて検討しなければならない。

(羽鳥幸一)

次 数	地 区	概 要
飛鳥寺原第83-3次	大極殿	取水堰設置工事に伴う立会。堰堤設置部は、平面・深さとともに水路堆積土の範囲内に納まり、遺構面に達しなかった。
第83-4次	内裏・西面大垣	測量規準点設置に伴う立会。内裏地区に2箇所、西面大垣地区（绳手池北堤）に1箇所設置したが、いずれの地点も遺構面に達しなかった。
第83-5次	南面大垣	旧上水道管の取替え工事に伴う立会。南面大垣・内塙・外塙ともに確認できなかった。
第83-6次	朱雀大路	調査区西端で暗褐色粘土上面から掘り込んだ幅3.1m、深さ40cmの構造遺構を確認。朱雀大路西側溝の想定位置に近いが、遺物もなく、確認範囲も狭いため断言できない。構造の位置は、 $x=-167.157.0$ 、 $Y=-17.432.4$ 、 $H=75.1$ m。
第83-8次	右京五条三坊	地表下60cmの暗褐色粘土面上で斜行する石列を検出したが、時期・性格不明。確認レベルは、 $H=74.00$ m。調査区全域泥堆積で湧水が激しく、地山面を確認できずに調査を終えた。
第83-10次	内裏南辺	電柱復旧工事に伴う立会。绳手池東の路引をドリルで2m掘削したが、遺物は認められなかった。
第83-11次	東方官街南地区	上水道管取替え工事に伴う立会。三橋喜代三氏宅付近 ($x=-166.650 \sim -166.700$) の旧管掘開断面に6基の掘立柱建物の掘立を確認。
第83-13次	西面大垣	绳手池東側防護壁工事に伴う立会。遺構面の深さ、遺存状況の確認を目的に北から南に向か三箇所小規模なトレンチを設定。西面南門に近い南のトレンチで大垣の柱抜取穴と日ざし石の入った穴2基検出。
第83-15次	山田寺	整地に伴う立会。講堂東に残る旧里道の盛土から大量の瓦類を採集。

表6 その他の発掘調査・立会調査概要

◆坂田寺の調査—第83-9次

1はじめに

調査は、明日香村大字阪田地内における公共下水道敷設に伴う事前調査である。調査地は、主要地方道桜井・明日香・吉野線から淨土宗金剛寺に向かう村道の道路敷部分で、遺構の保護を目的に、工事掘削の深度や位置の決定材料を得るために確認調査を実施した。

坂田寺は、「扶桑略記」によると司馬達止の高市郡坂田原の草堂に由来するといい（欽明十三年（552）十月十三日条）、「日本書紀」には鞍部多須奈・鳥による造寺記録が残る。当調査部は、1972年以降、10次に及ぶ調査を行ってきたが、現時点で確認した堂宇はいずれも奈良時代の再建伽藍の一部で、7世紀に遡る堂宇は未発見である。

今回の調査地は、第3次調査区と第4次調査区の間を走る村道部分で、仏堂SB150の東北隅から仏堂背面にあたる部分である。

調査区は、南方の山手に設けたI区と、その北方に設けたII区からなり、幅2~2.8mで長さ67mのS字状に屈曲する調査区を設定した。調査面積はI区38m²、II区102m²の計140m²である。

2遺構

I区には顯著な遺構がなく、調査区北端では現路面下2.7mで平坦な花崗岩岩盤に達する。ここでは調査区北東隅から西方へ下降する岩盤の段差が認められたが、これは寺院造営時に東側の尾根据を直線的に整えた造成とみ

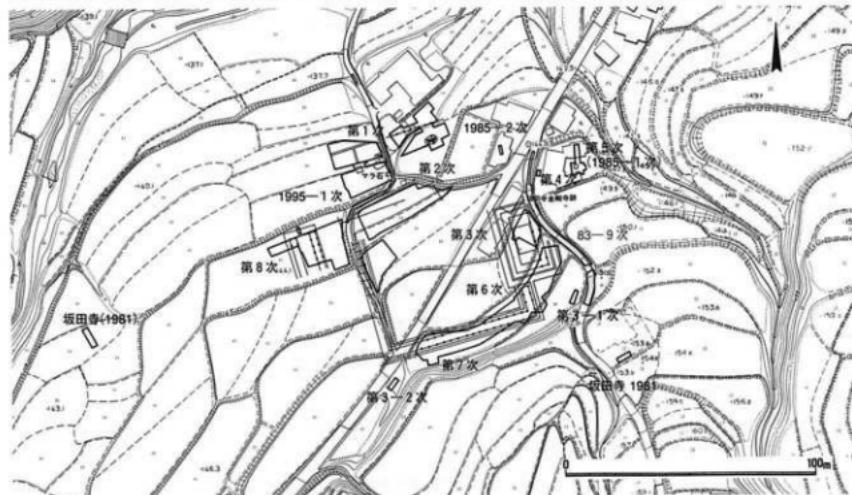


図31 坂田寺調査位置図 1:2000

られる。またⅠ区南端部では、路面下13mで斜行する石列と溝を検出した。現在の丘陵部の東延長上に位置することから、村道建設以前に存在した南側の丘陵部の護岸と排水溝にあたるものと考えられる。

Ⅱ区では調査区の南端で、Ⅰ区から続く尾根の裾部と、それに直交する大溝SD260を検出した。大溝は調査区の東壁から始まって西方に延びる。溝幅3.4m、深さは北側岩盤から1mを測り、第6次調査で検出した仏堂の雨落溝SD176Aに類似した規模をもつ。両溝は直線的には繋がらないが、SB150基壇の築成時に基幹排水路である南北溝SD177に直交するように掘られた一連の溝であつた可能性が高い。SD260の埋土からは、7世紀代の瓦や土器が出土したが、その多くは東方の尾根上から流れ込んだ遺物とみられ、東方尾根上の平坦面に7世紀代の瓦葺き建物の存在を推測できる。

仏堂SB150は、桁行5間・梁間2間の身舎に四面庇がつく礎石建ちの基壇建物である。西を正面とする檜皮葺の南北棟で、棟方向は北で西に約15度振れる。今回、建物の北東隅と基壇北辺を検出したことにより、建物規模や基壇規模が確定した。庇北東隅の礎石は抜き取られていたが、東庇の北第2礎石が現存する。庇の出は従来の想定通り2.68m(9尺)であり、これによってSB150の桁行総長が24.7m(83尺)であることが確定した。

基壇上面には焼土や炭化物が散乱するが、これは建物SB150廃絶後に基壇上で廃材を焼却した10世紀後半代の焼土層と考えられる。礎石は花崗岩を加工し円形柱座を造り出す。礎石抜取穴は、径約1.7m、深さ0.6mで、据付掘形はさらに0.15mほど深いが、根石は存在しない。また礎石間には、壁受けの地覆材を抜き取った溝がある。水道管理設溝の壁面に現れた基壇の断面には、明瞭な版築が認められず、20~30cmの厚さで基壇土を8層ほど雜然と積み上げている。

基壇の構造は、東・南辺の調査結果をもとに、花崗岩自然石を並べた二重基壇が全周すると考えてきたが、今回の調査によって、北辺には下成基壇が巡らぬことが明らかになった。基壇化粧も北辺のみ凝灰岩切石を使用するなど、東・南辺とは様相を異なる。おそらく基幹排水路と接する東・南辺のみ、基壇の保護を配慮した重成基壇構造をとるのであろう。北辺の基壇化粧は、幅70cm以上、高さ60cm、厚さ30cmの凝灰岩切石を30cm大の自然

石上に立て並べたもので、羽目石や葛石の存在は確認できなかった。基壇の北側には明瞭な雨落溝がなく、北に向かって下降する地形に雨水を直接たれ流している。礎石心からの基壇の出は1.5m(5尺)で、東・南辺の上成基壇の出(6尺)よりも1尺ほど出が短い。

東辺の二重基壇は、上成・下成ともに花崗岩自然石を化粧材に用いている。下成基壇は長辺50cm前後の石を縦に並べ、上縁に葛石風に30cm大の石を置く。下成基壇上面には拳大から人頭大の石を敷き詰めている。下成基壇幅は65cm前後で、下成基壇高は70cmである。上成基壇の化粧は長辺80~120cm、幅40cm前後の自然石を横長に並べたものである。基壇高は40cmで、東雨落溝底面からの基壇總高は約1.1mを測る。

東雨落溝SD177は、下成基壇の埋没後に数度にわたる掘り直しがなされており、流水と土砂堆積の激しさを物語る。下成基壇の東2mで10~30cm大の自然石を5段積み上げた護岸施設を検出したが、SB150下成基壇までの距離が第6次調査で確認した雨落溝SD176B・177Bと等距離であるため、基壇築成当初の雨落溝の東岸にあたると考えられる。SD177の東岸はこの護岸からさらに東に広がり、溝の最大幅は3.4mを測る。またSD177は、SB150廃材焼却時の炭化物層の堆積状況からみて、10世紀後半にはほぼ埋没していたことが知られる。SD177の東は一段高いテラスとなり、一面に拳大のバラスが敷かれている。このテラスはⅡ区南端で確認した東方の尾根の立ち上がりや比高差などからみて、幅9m前後で東方の尾根を巡り、基壇建物のある第4・5次調査地に至るものと考えられる。なおバラス上には銅鋳物が多量に投棄されており、近隣に銅鋳造構の存在が推測される。

3 出土遺物

瓦類のほか、土器、金属製品、木製品が出土した。瓦類には軒瓦、丸・平瓦、切妻斗瓦、塙瓦、埠がある。

軒丸瓦 坂田寺出土の軒丸瓦は、これまで10型式21種が知られているが、今回はこのうち1C・6A・7A・21Aが各1点、6Bが2点出土した。このうち1Cは、中房部分が出土し、蓮子を2重に配置することを確認した。「概報22」で桜花形の素弁10弁蓮華紋軒丸瓦1型式をA~Eに細分したが、これに訂正の要が生じたので今回報告する(図32-4~7)。1A:弁の盛り上がりや、先端の反

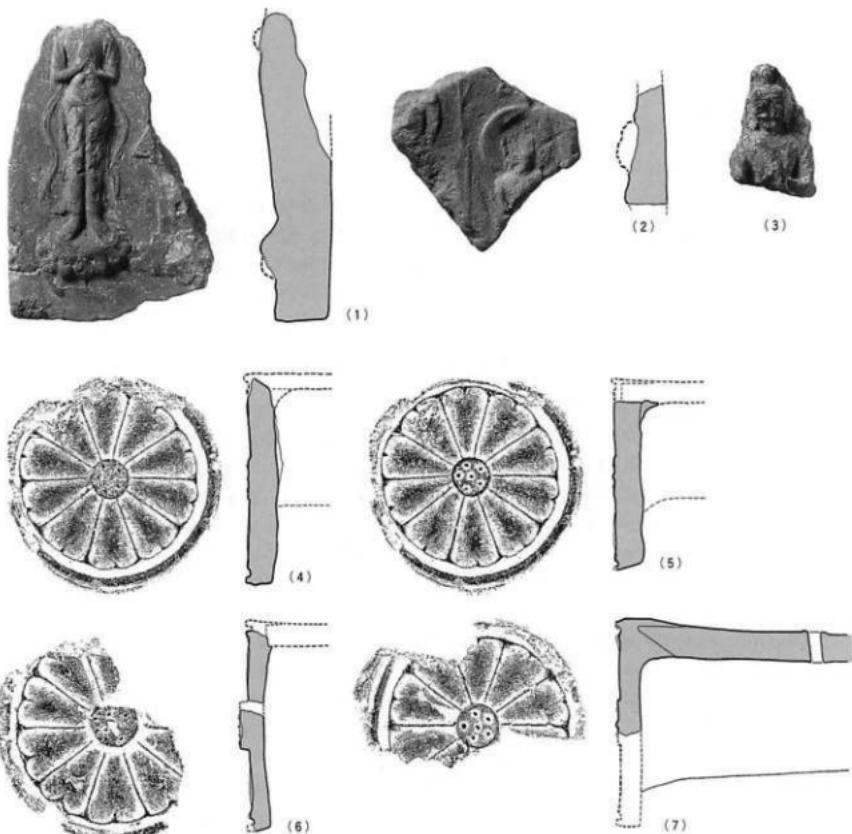


図32 塚田寺出土 塚仏（1～3） 軒丸瓦（4～7） 1：4

転が小さい。中房は平板で、蓮子は1+5。瓦筋の傷みがほとんどないものでは、丸瓦先端の四面だけを削って接合する（4）が、全体に傷が進んだものでは加工しないものを接合する（5）。1B：弁の盛り上がりが大きい。「概報22」以降、良好な資料の出土はなく、蓮子数不明。1C：弁先端の反転が大きく、中房は高い。正確な数は明らかでないが、蓮子が2重に巡る。中心蓮子は割れのため不明。丸瓦先端を加工しないものを接合（6）。なお以前に1Eと報告したものは、1Cとの同範を確認したため削除する。1D：弁の盛り上がりや、先端の反転がもっとも小さい。中房はやや突出し、蓮子は1+5。丸瓦先端の四面もしくは凸面いずれかを削って接合する（7）。

軒平瓦 101Aが3点出土した。

丸・平瓦 丸瓦608点（305.9kg）、平瓦2,878点（481.9kg）が出土したが、大部分が7世紀代のもので、奈良時代以

降の一枚造り平瓦は162点（64.4kg）しかない。

塚仏 川原寺や橋寺と同范の方形三尊塚仏A（大脇瀬「塚仏と押出仏の同原型資料－夏見庵寺の塚仏を中心として－」『MUSEUM』418、1986.）の左脇侍菩薩の首から上を残す部分（3）が出土。6次調査で同型式の右脇侍菩薩の首から下の破片（1）、3次調査で菩薩頭部の小片（2）が出土している。菩薩頭部片は全体に立体的な表現をとる。3点とも仏堂とその周辺から出土。金属製品には鉄釘や鍵、銅鋳、金銅製飾り金具がある。またSD177から、表面に唐草の蜜陀絵が描かれた黒漆塗り板材が出土した。扇子もしくは板の一部とみられる。

4まとめ

今回の調査は道路敷に限定された調査区ではあったが、奈良時代の仏堂SB150の北東隅付近の様子が明らかになった。調査によって建物規模や基壇規模が確定した

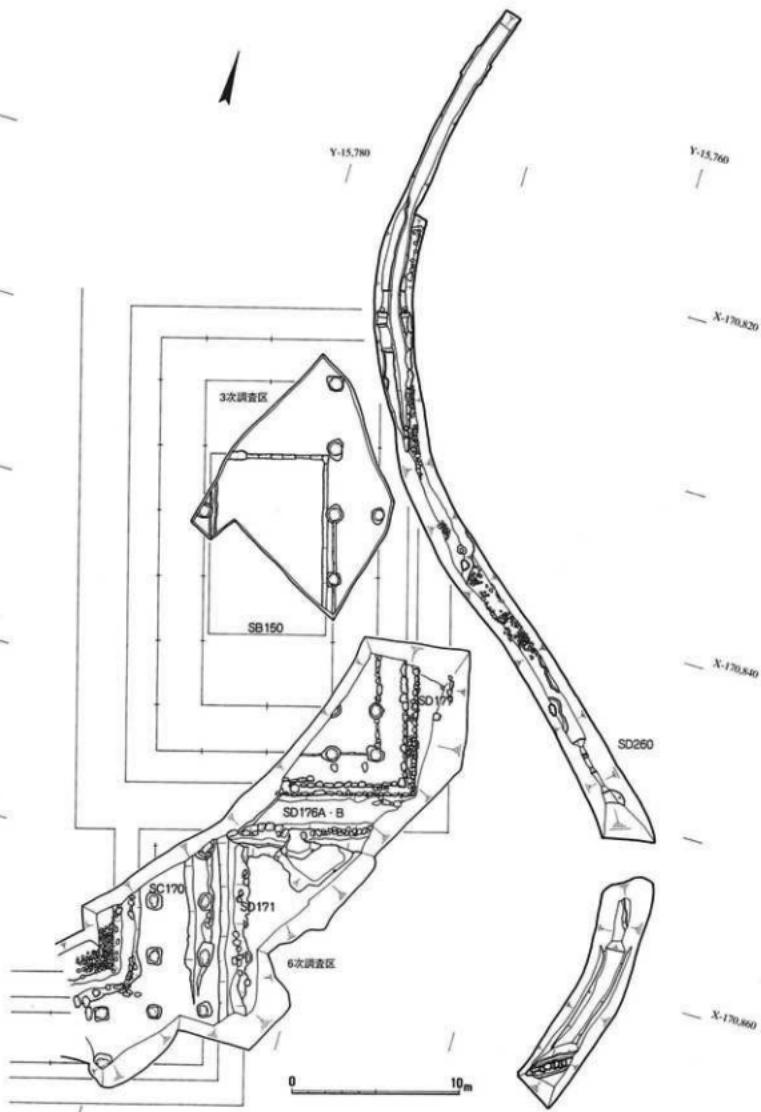


図33 第83-9次 坂田寺の調査遺構図 1:300

が、基壇北辺は重成基壇ではなく、基壇化粧に凝灰岩切石を用いるなど、東・南辺とは大きく様相を異にする状況が明らかになった。これは西を正面とする仏堂の背面、すなわち旧地形の谷に雨落ち溝兼用の基幹の排水路を配したため、流水の影響を強く受ける南・東辺のみ下成基

壇を築いて基壇を保護したものと考えられる。

また瓦や土器の出土状況から、東方の尾根上の平坦面に創建期の瓦葺き建物が存在する可能性が高まつた。奈良時代以前の坂田寺伽藍の解明が今後の大きな調査課題となろう。

(松村恵司 瓦類：伊藤敬太郎)

◆飛鳥池遺跡の調査—第84次・87次

はじめに

飛鳥寺のすぐ東南の谷間には、谷口を堰止めてつくった飛鳥池があった。1990年にこの池を埋め立てる計画が出来、1991年4月から事前調査を実施したところ、7世紀中頃から8世紀初め頃にかけての金属・ガラスなどの工房跡と判明した（飛鳥寺1991-1次調査）。飛鳥池遺跡の発見である。その後1996年に、飛鳥池の埋め立て地に万葉ミュージアムを建設し、周辺一帯も整備する計画が県から出され、1997年1月に事前調査を開始した。第84次調査である。1997年度には第84次調査を継続し、さらに第87次調査を手掛けた（図28参照）。調査面積は計4900m²に及ぶ。調査と遺物の整理は進行中であり、以下では成果の概要を報告する。なお、前年度に第84次調査の中間報告を行っているが、簡単な記述にとどめたので、今回はその成果も含めて記述する。

1 第84次調査

調査区は、飛鳥池の堤防より北の、谷の出口に約3,000m²を設定した。調査区の西は飛鳥寺南門との間を遮断する丘陵の裾に接し、東南部も小さな丘陵の裾に接する。調査の主目的は、これまでの調査で存在が推定される飛鳥寺の南の区画施設を確認することと、飛鳥池遺跡の北辺の様相を明らかにすることにあった。

基本層序

調査地の大半は水田である。東が低く、さらに北に向かって段々と低くなる。谷筋の方向を示す。基本層序は、耕土・床土（40~60cm）の下に中世の遺物を含む灰褐色土（10~30cm）などがあり、整地土面に至る。整地は西と一部は東南から谷筋に向かって重層的に行われている。

大半の遺構はこの整地土面で検出し、一部は整地土を掘り下げて検出した。これらの遺構は、藤原宮期以降と以前に大きく区分できる。

藤原宮期以前の遺構は、調査範囲も狭く、不明な点が多い。時期は天武朝を中心だが、池や溝など一部の遺構は、藤原宮期にも存続する。これらの下には、さらに古い遺構・遺物があることはほぼ確実である。藤原宮期以降の遺構は、藤原宮期から奈良時代を中心とし、一部は平安時代に及ぶ可能性がある。東西大溝SD27は鎌倉時代。この時代には、他に頗る著しい遺構がないことから、水田に変わったと推定される。

（毛利光俊彦）

藤原宮期以降の遺構

道路と溝 SF50はバラス敷の道路で、とくに発掘区西端ではバラス敷が良好に残る。道路の南側には、道路に沿って大きな溝SD47がある。

SD47は幅1.5~2.2m、深さ40~80cmで、発掘区のほぼ中央付近には、石組の橋状遺構SX48がある。SX48の西側では、南側の法面だけに石組の護岸が残っている。石組は、最下段に高さ40cm程度の大きな石を据えて、その上に人頭大の石を1段もしくは2段積む。出土遺物から、この溝は藤原宮期から奈良時代前半にかけて機能していたと推定される。発掘区西端では、溝内で3個の柱穴SX44を検出した。SD47の下層溝が埋まつた後に掘られ、柱を抜いた後に再びSD47が機能しており、一時的な施設の一部と考えられる。

発掘区の北辺付近から瓦が集中して出土しており、発掘区のすぐ北側に瓦葺の解があった可能性が高い。道路北側溝も発掘区のすぐ北側にあるものと推定される。

井戸と暗渠 発掘区の西端には、井戸SE42があり、SE42とSD47を暗渠SX43がつなぐ。



図34 井戸SE42全景 東南から

SE42は、井戸本体の周囲に石敷および排水溝をもつ。東西6m、南北8.5mの範囲を、60cm~80cmの深さまで掘り下げる、その法面に2~3段の石を積んで擁壁とし、床面には拳大の石を敷きつめる。石敷面に降りる階段が南面と北面それぞれの東端にある。井戸本体から北の方向と、石敷の周囲とに排水溝を設け、SX43に排水する。溝はいずれも拳大よりやや大きめの石を側石にする。井戸本体からの溝では溝底に拳大の石を敷きつめるが、周囲の溝には底石はない。

井戸枠は、石敷面の中央南寄りに、直径3m、深さ3mの穴を掘って据えられている。井戸廃絶後に、井戸枠の上部約1/3が抜き取られている。井戸枠は二段で構成される。下段は長さ140cm、断面16cm×20cmの角扇形の細長い材を、内法直径1mになるように円形に立て並べる。上端から約45cm下の位置に長方形の納穴を彫り、太納を埋め込んで部材同士を繋ぐ。材の背面側には、底面から45cm程度の高さまで隙を詰め込み、井戸枠内への泥の侵入を防いでいる。

この円形に組まれた材の上に、薄い板を挟み込んで水平を調整しながら、上段の井戸枠の土居桁を組む。土居桁は長さ150cm、幅12cm、厚さ10cm前後の材を、内法幅が113cmになるように正方形に組む。合い欠きで組んで、南北方向に置かれた土居桁を上木とする。この土居桁の上に束を立てて、束の外側に横板を貼る。束は残存しないが、束を立てるための納穴が土居桁に残り、納穴周囲で確認できる風食差から、束は直径12cmの円形断面であったことが確認できる。束は方形に組まれた土居桁の四隅と各辺の中央に立てられる。なお、土居桁はいずれも小規模な建物の柱や桁を転用したものである。横板は高さ50cm前後、厚さ4cmの板材で、長さは東・西辺に置かれた板が138cm前後、南・北辺に置かれた板が150cm前後である。板材のうち、西辺の1枚とその裏に埋められていたもう1枚の板は本来1枚の扉板を転用したものである。

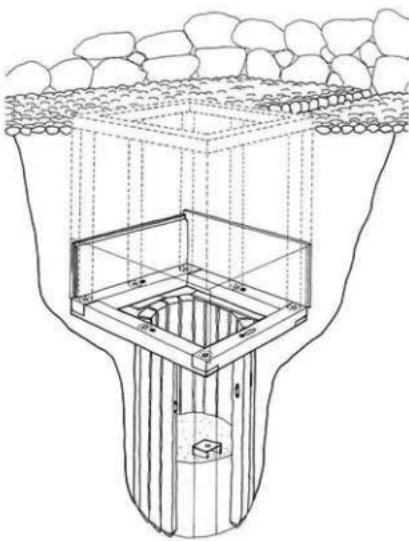


図35 井戸SE42透視図

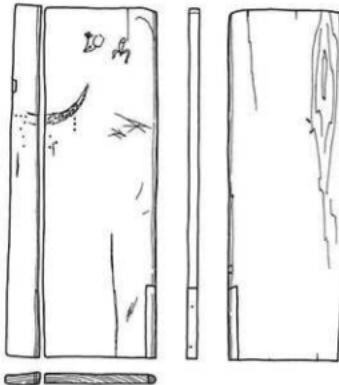


図36 井戸SE42井戸枠(扉板)実測図 1:20

釘穴から扉の門の形式が判明した上に、興味深い戲画や墨書きが残っていて注目される。この井戸は藤原宮期に造営され、奈良時代末~平安時代初期頃に井戸枠が抜き取られている。

暗渠SX43は、幅1.5mの溝状の掘形を掘り、そのなかで石を組む。暗渠の内法幅約40cm、内法高70cmで、側石を3段前後積み上げ、大きな石で蓋をし、その隙間に拳大の石や瓦片を詰め込んでいる。SD47側の出口では、逆流を防ぐために、水の流れを誘導する石組をSD47に張り出すようにつくる。暗渠は井戸と同時に造営され、奈良時代前半には機能を停止している。



圖37 第84次調查遺構圖 1:350

道路南側の塀や建物 発掘区北半部のSF50の南の区画では、主として道路近い部分に、道路の方方に近い振れをもつ塀や建物がある。

SA39はSD47の南肩から南約3mの位置に並行する東西塀で、柱間寸法は一部乱れているもののほぼ8尺等間である。SA45はSD47に先行する東西塀で、柱間寸法はほぼ6尺等間である。SA38とSA40はSA39に直交する南北塀で、柱間寸法はいずれも8尺等間である。ある時期にはSA38・39・40によってコ字形の区画が構成される。SA25はSB41の南に位置する南北塀で、柱間寸法は11尺等間である。

SB41はSE42の東に並行して建つ南北棟で、桁行6間、梁間2間で、桁行柱間寸法は8尺等間、梁間柱間寸法は9尺等間である。SB36は桁行4間、梁間2間の東西棟で、桁行柱間寸法は7.5尺等間、梁間柱間寸法は5.5尺等間である。SB35・SB37は同規模の建物で、桁行、梁間とともに2間で、柱間寸法はいずれも7尺等間である。

以上の遺構に重複関係はないが、2時期にわけられるかもしれない。一方、これらの遺構群とやや方位の異なる塀や建物がある。SB34は桁行6間、梁間2間の東西棟で、桁行柱間寸法は8尺等間、梁間柱間寸法は9尺等間で、平面規模がSB41と一致する。この建物の北と東に建物に沿うようにSA32とSA33がある。柱穴の重複関係から、これらの遺構は前出の遺構群よりも新しい。

発掘区南半部にも、以上の遺構に近い方位をもつものがある。SA19は東西塀で、柱間寸法はおよそ2m等間、藤原宮期以前に遡るかもしれない。SB06は桁行3間の南北棟で、桁行柱間寸法が8尺等間である。柱穴が浅いうえに、東半部の遺構面が下がっているために東側柱筋は削平されたと推定され、梁間は2間であろう。

発掘区南半部の小穴群 発掘区南半部の地山に近い西南部には建物や塀の柱穴が多数分布する。これら柱穴は北半部の柱穴とは異なって、直径が20~30cmの円形をした小規模なものが多い。藤原宮期以前に造営された溝SD01や塀SA02の方に従うものと、東西道路SF50の方に従うものが現在しているようである。塀や建物の平面の復原および時期変遷は今後の検討課題である。数時期の建物や塀が重複して存在していると推定され、古いものでは7世紀まで遡り、新しいものは平安時代まで降ると考えられる。

鋳造に関わる遺構 鋳造に関する遺物が出土している反面、今回の調査区内で直接鋳造に関係したと断定できる遺構は限られる。鍛冶炉SX13は発掘区の中央付近に位置する。地面を掘り込む形式で、東西1.8m、南北90cm、深さ25cmの檻鉢状である。壁面は焼きしまり、埋土には炭化物を大量に含んでいる。

土坑 SK26は東西6.5m、南北4mの不整形土坑で、南西部の東西3m南北2.5mの範囲が一段深くなる。最も深いところで、深さが約1.4mである。埋土はおよそ3層からなり、中間の木屑層から「郡里」の記載をもつものをはじめとする木簡が多量に出土した。

平安時代以降の遺構 SE12は平安時代の井戸。直径1m、深さ1.4mの掘形を掘り、内径50cmの曲物を据える。曲物は三段が残っていた。延喜通宝が出土した。

発掘区の中央 には、東西に貫通する中世期の溝SD27がある。この溝は幾度か流れを変えている。本流部分は幅1m弱、深さ約50cmの素掘溝で、西側に蛇行部分があり、ここに石組の堰が設けられている。 (島田敏男)

藤原宮期以前の遺構

調査区北西部の溝2条、調査区東南部の石組池とこの導水路・排水路、若干の建物・塀・土坑などがある。

調査区北辺部の遺構群

石組東西溝SD52 北辺の道路SF50下で検出した東で北に大きく振れる溝。北東に向かってかなりの傾斜で下がり幅も広くなる。中央付近では、深さが約0.5m、幅が1.7m以上。北岸は人頭大の川原石で護岸しているが、底石が残る程度である。南岸の石列は確認できなかった。遺物は少なく、年代の決め手に欠ける。

SX49 SD52の中央部付近で検出した沼状の遺構。底に木の枝や葉が堆積していた。深さは約0.5m、南北幅は3.4m以上。SD52より新しく、SD51より古い。

東西溝SD51 道路SF50下で検出した素掘りの溝。SD52より新しいが、振れは近い。東に向かってかなりの傾斜で下がり、幅も広くなる。中央部付近での幅は肩で約1.7m、底で約1.2m、深さは約0.6m。溝内からは、藤原宮期直前頃の土器が出土した。

掘立柱建物 SB53調査区北西部にあり、道路SF50の瓦敷下で検出した。総柱建物かもしれない。柱間は、東西が2.1~2.2m、南北が2.4~2.5mである。

掘立柱建物SB46 北辺の東寄りで検出した。西に庵か下屋がつく南北棟と推定できる。身舎の柱間は、桁行が2.6~2.7m、梁間が約2.0m等間である。SD51より新しく、藤原宮期のSD47より古い。

石組方形池SG30とそれに隣接する遺構群

石組方形池SG30 石組方形池SG30は調査区の東辺ほぼ中央にある。平面規模は底面で、東西約7.9m・南北約8.6m。池の四周はすべて急傾斜の玉石積。石積は後世部分的に抜かれてはいるが、最も高いところで8段・高さ約1.6m残っている。池の東辺は一度改修されており、石積の裏側に当初の石積がある。改修以前には池はより正方形に近かったようだ。池底には拳大の石を敷いていたと推定されるが、それほど広範囲には残っていない。埋土から土器・瓦・木器・鉄器が出土した。土器では土師器の鍋が目立ち、また漆壺と漆皿、墨書き土器、硯などがある。木器では鉄錠の様（ためし）、鉄器ではヤスリの出土が注目される。

方形池の東北隅には、石積の排水路SD31がとりつく。上幅0.9m、下幅0.5~0.7m、高さ約1.3mあり、長さ約5mを確認した。池の方位に対して斜めに北東方向に延びる。調査地の東には、86次調査区で確認した河川があるので、ここに向けて排水したのだろう。方形池に水を導いた導水路は池の西南隅に注ぎ込む南北溝SD01。護岸の石組の一部を階段状に組んで水を流し込んでいた。奈良時代以降に池の大半が埋没した時点では、池の東南隅に幅約1mの浅い素掘溝SD29が注ぎ込んでいた。

南北溝SD01 石組方形池SG30の西南隅につながる素掘の導水路。長さ約27mを検出した。池に取り付く部分は中世の東西溝SD27に埋されている。方形池から南約12mの位置に石組の護岸をともなう堰SX16があり、このあたりでは溝幅約1m・深さ約0.5mだが、そこから南に向かって幅と深さが大きくなり、調査区南端では幅約3m・深さ約1mに達する。堰以南の溝底には分厚い木屑層が堆積し、大量の木筒と削屑が出土した。（ほかに飛鳥IV~Vの土器や瓦、鉄器、木器がみつかった。調査区南端から北へ約3mの溝西岸には木樋暗渠SX03の排水口がある。堰SX16 南北溝SD01と方形池とのとりつきから南約12mにある。両岸を長さ15mほどの石積2段で護岸し、杭を2本づつ計4本打ち込んだ施設。杭は柱材の転用品で長さ1~1.2m。北側の一対には、内側に各々10cm角の

枘穴が切ってあり、この杭の部分で石積に隙間がある。ここに堰板を立てたのだろう。堰の西側には石敷SX17と踏石列SX14・15がある。

石敷きSX17は、東西・南北とも約1mほどの狭い玉石敷。西側に踏石列SX14がつながる。これらが埋まつた段階で踏石列SX15に改修される。踏石列SX15は長さ約9m残っていた。南北溝SD01にはば直交して西に延び、掘立柱東西塀SA19にぶつかってそれに沿って方向をやや変える。これらの施設は調査区の西部から堰を管理するための通路だろう。

掘立柱東西塀SA19 南北溝SD01の西側で7間分を検出した。柱間1.8~2.1m。導水路に東側にも柱穴が1個あるが、それより東は東西溝SD20に埋されているため、さらに続くかどうかわからない。

掘立柱南北塀SA02 南北溝SD01の西側に平行して並ぶ塀。柱間1.8~2.1m。調査区南端から14間約25mを確認した。南端から2本目と3本目の柱だけが残り、ほかはすべて抜き取られていた。2本目も抜き取ろうとした痕跡がある。柱掘形は柱抜取穴検出面から0.6m下にあり、柱を立てたあとで粘質土を積み上げて細長い基壇状の高まりを作っている。この基壇状の高まりが南北溝SD01と南北大溝SD05の溝肩を構成する。南から1・8・11間目には、西から導水路に流れ込む東西溝が3条ある。

東西溝SD04・07・22 いずれも素掘溝。SD04とSD07は約12mを、SD07とSD22は約6mを隔ててほぼ平行する。東西溝SD04は幅約1mほどの浅い溝。東西溝SD07はA~Cの3時期があり、検出面での溝幅はAが0.6m、B1.2m、C0.4mある。最上層のSD07Cは木樋SX09で南北塀SA02をくぐる。東西溝SD22は、A・B2時期あり、最も広いところで幅約1m。上層のSD22Bは木樋SX23で南北塀SA02をくぐる。これらの溝は調査区西部の雨水などを南北溝SD01に排水するための溝だが、水量が多いときには周辺に溢れたらしく、石敷きSX17や踏石列SX14が埋没したのも、またSD07とSD22が何處か掘り直されているのもそのせいだろう。

南北大溝SD05 掘立柱南北塀SA02の西側にある素掘溝。溝幅6~7m、深さ約0.7~1m。溝の東肩は南北塀SA02の基壇状高まりでかなりの急傾斜をもつが、西肩は地形に沿った比較的緩い傾斜である。木筒や削屑を大量に含んだ腐植土層を何層も挟んで比較的短期間の内に



図38 調査区南部の遺構 南北溝SD05・南北溝SA02・南北溝SD01・土坑SK10 南から



図39 方形池SG30全景 西南から



図40 石列SX14-15と南北溝SD01の堤岸 東から

埋め立てられていた。南端から8mほどの溝底からは漆木状の木製品が多量にみつかった。ほかに、土器、瓦、木器、鉄器、銅津などが出土した。

この南北大溝SD05と南北溝SD01および掘立柱南北溝SA02は、調査区の中央部にあった谷を埋め立てた工事に関連する一連の造作である。まず、谷筋で最も低いこの部分に厚さ約0.5mの粘土質の土をおいて南北溝SA02をたて、さらにそこに基壇状の高まりを作る。これと平行して南北溝SA02の東に南北溝SD01を掘り、あわせて木鋪暗渠SX03を埋め込む。南北大溝SD05を埋める。南北溝SD01に堰SX16を作り、石敷SX17や踏石列SX14を設ける。以上のような手順で調査区南部の施設が作られたと推定する。当然、これと平行して石組方形池と排水路も作られた。

その他の遺構

掘立柱建物SB11 南北溝SD01の東にある東西棟建物。梁間2間×桁行5間か。柱間は梁間がL8m、桁行2.1m。

掘立柱建物SB24東西溝SD22の北側にある南北棟建物。2×3間以上で、柱間は約2m。

土坑SK10 調査区東南部にある素掘の土坑。東西5.2m、南北4mの楕円形で、深さ1.7mある。堆積土は三層に大別され、上層から大量の木屑とともに木簡および削屑が約2,140点出土した。ほかに、瓦・土器がある。木簡に「評」の表記を持つものがあり、大宝令施行以前。

土坑SK28 石組方形池SG30の西南にある平面形が長方形をした土坑。南北約4m、東西4.5m以上、深さ1.3m。理土から土器、瓦、曲物、銅製箸などが出土した。

(花谷 浩・毛利光俊彦)

出土遺物

土器・土製品 圧倒的多数を占めるのは藤原宮期直前から宮期の土器群である。この土器群の特徴を概括すると、煮沸具の大半が土師器の鍋形態であること、漆塗り土師器食器が豊富なこと、墨書き土器・陶硯の量が多いこと、取瓶に使用した土師器が多いこと等である。他に土馬・輪の羽口等も出土している。

瓦塼類 丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、垂木先瓦、鶴尾瓦、道具瓦（熨斗瓦・面戸瓦・雁振瓦など）、埠、土管のほか、方形三尊塔が出土した（図41）。軒丸瓦

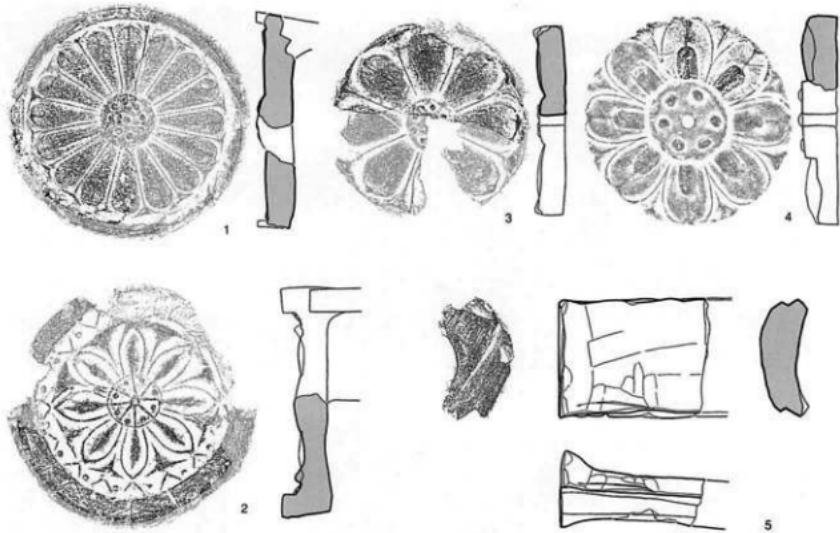


図41 飛鳥池遺跡出土瓦類 1:4

は194点あり、素弁蓮華紋（飛鳥寺I・Ⅲ～Ⅴ型式など）が88点、単弁のI3型式（図41-2）が34点、複弁蓮華紋が66点。奈良時代以降の軒丸瓦はない。素弁蓮華紋ではI型式の56点が最も多く、Ⅲ型式の17点がこれに次ぐ。他型式は数点づつ出土したのみ。また、飛鳥寺Cは奥山庵寺II型式Eと、飛鳥寺D（1）は奥山庵寺IV型式Cと同範。後者は発掘調査では初出。複弁蓮華紋は、14型式が11点、17型式が15点、18型式が38点、19型式1点の内訳。

軒平瓦は62点出土した。すべて重張紋軒平瓦で、三重弧紋のI型式が55点と四重弧紋のII型式が7点である。I型式は隅切り2点を含む。

複弁蓮華紋軒丸瓦は、伽藍中心で多い14型式よりも17・18型式が目立ち、これらが三重弧紋の軒平瓦I型式と組み合う。この出土傾向は北側の1992-1次調査区や1991年の飛鳥池遺跡調査区と共通している。

垂木先瓦は4点ある。VI型式（4）は山田寺A（金堂所用）と同範で初出。特殊なものに小型の雁振瓦（5）がある。丸瓦は10,584点1,326kg、平瓦は50,199点5,316kg出土した。創建期から奈良時代まであるが、奈良時代のものはごく少ない。丸瓦には竹状模骨丸瓦が多数ある。

小 結

今回の調査成果の第一は、飛鳥寺の南限について有力な手掛りをつかんだことである。南門から東に延びる南面大垣は、従来の予想に反して、位置は調査区北端のすぐ外側あたりで、方向を東で北に振ることが、検出した

道路SF50と南側溝SD47・51・52などから推測できた。南側溝はSD52→SD51→SD47の順に南に移っており、SD47とSD51の出土遺物から藤原宮朝頃から奈良時代まで存続したことがわかるが、SD52からは年代を窺う遺物が出土していない。調査区付近での南限の堀や道路の建設がいつ頃まで遡るかは、今後の課題である。

調査成果の第二は、上述の道路南側溝の南で東西堀SA45・47を検出したことから、飛鳥池遺跡の北限が明らかになったことである。第84次調査区と1991年の調査区との間は未調査だが、遺跡の営まれた時期がほぼ一致すること、それぞれから南や北に延びる造構があることなどからすると、一体の遺跡である可能性は高い。

調査成果の第三は、飛鳥池遺跡の内部の様相が次第にわかってきたことである。第84次調査区で検出した建物群は、1991年の調査区の建物と比べて規模の大きなものがあり、配置もかなり整然としている。造構・遺物からみて谷奥が工房で、谷口にその管理施設があったとみることができよう。石組の方形池は、飛鳥では確実には5例目の発見である。従来、これらは宴遊施設とみてきたが、飛鳥池遺跡ではなお検討をする。

最も大きな問題は、飛鳥池遺跡がどこの組織に付属したかである。遺跡の場所や出土木簡からすると、飛鳥寺との関係が重視されるが、木簡には公的な施設と関わるものもあり、判断が難しい。今後の調査・研究の進展にまちたい。

（毛利光）

2 飛鳥池遺跡出土の木簡

1997年度に実施した飛鳥池遺跡（飛鳥藤原第84次）の調査で出土した木簡について、以下、概略を述べる。ただし、同木簡は現在も整理・検討中であるため、点数などのデータは今後も変動する。また、ここで紹介する木簡は特徴的なものに限ったので、より詳細な解説については『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報13』を参照されたい。

木簡出土遺構 木簡が出土した遺構は多岐にわたる。まず、遺構別に木簡の点数を掲げると次のようになる。

土坑SK10	2140点
土坑SK26	700点
南北溝SD01	1180点
南北溝SD05	3450点
東西溝SD20	1点
東西溝SD08	1点
土坑SK28	6点
井戸SE42	1点
南北溝SD29	1点
方形石組池SG30	11点
方形池外側の整地・土坑群	16点

これらのうち特に出土点数の多い遺構は次の4箇所である。各々の推定年代と併せて略記する。

SK10は、東西5.2m、南北4m、深さ1.7mの土坑で、堆積土は3層に大別される。木簡はこのうち上層の木刷屑を中心に出土した。年紀をもつ木簡は1点もないが、⑤の「粒評石見里」の表記からみて、7世紀末（天武朝末年以後か）の年代が与えられる。ちなみに、⑤は後の播磨国掛保郡石見郷にある地名で、そこからの荷札木簡である。

SK26は、東西6.5m、南北4m、深さ1.4mの土坑で、埋土は3層に大別される。このうち第2層を中心には木簡が出土した。この土坑は南北溝SD05と重複する位置にあり、溝の埋土を切って掘り込まれている。この土坑からも年紀を記す木簡がないが、やはり荷札木簡が手がかりとなる。⑩と⑪に例示したように、地名表記がいざれも「国・郡・里」となっているから、大宝元年（701）から靈亀3年（717）の間の年代である。なお、SK26出土の荷札木簡は播磨国からのものが6点とまとまって確



②表

③

図42 出土木簡1

認される点が注目される。⑤の「粒評」も含めて、この一帯から播磨国の荷札が特に多いのは、あるいは飛鳥寺と同団との密接な関連があるのかも知れない。

南北溝SD01は、幅約3m、深さ約1mの溝で、北流し、方形池に注ぐ。木簡は、主に溝底に堆積した木刷屑から出土した。年紀を記すのは、⑩の「丁丑年」のみで、天武6年（677）にあたる。

南北溝SD05は、SD01の西にある幅6~7m、深さ0.7~1mの溝で、やはり北流し、方形池の西をさらに北へ



図43 出土木簡2

伸びるが、遺構と重複するため、方形池以南を掘り下げた。木簡は、互層になって堆積した層のうちの腐植土層から主に出土した。年紀を記すのは3点あり、②「丁丑年」と③「丙子年」の他に「庚午年」の断片がある。⑤は天武5年、庚午は天智9年にあたる。

SD01とSD05の下限は、両溝出土遺物からみて、一応持統朝頃と考えている。ただし、木簡に見えるサトの表記が⑩・②・③・⑤といずれも「五十戸」となっており、「里」という木簡が1点もないことは重要で、あるいは木簡に関しては天武朝におさまる可能性があるのかも知れない（後述）。

木簡全体の特徴 内容からみた場合の大きな特徴は、第1に、寺院関係の木簡が多数を占めるという点である。その出土場所からみて、飛鳥寺との関連で考えるべきであろう。また、前記4個所のいずれの遺構からも寺院関係木簡が出土していることは注目すべきであり、幅広い年代にわたることが確認できる。

まず、僧侶の名前あるいは尊称・別称を記した木簡として、①「願恵」「知事」、②「大徳」、④「智調師」、⑦「観勒」、⑧「沙弥」、⑨「大徳」、⑬「智照師」、⑭「賢聖僧」、⑮「大師」「道性」、⑯「弁徳」、⑰「覚道」などがある。

このうち、文献史料に登場する著名な人物は、⑦の観勒で、彼は推古10年（602）に百済から来日し、わが国に曆本・天文地理書・通甲方術書などを伝えた高僧である。推古32年に初めて僧正・僧都の制が設けられたが、観勒は最初の僧正となっている。また、三論宗の法匠であったともいう。彼が飛鳥寺に住んでいたという史料は14世紀の『三国仏法伝通縁起』が最も古いが、木簡によってその点も裏付けられたといって良い。

また④の「智調」に関する史料が『日本靈異記』にある。上巻第22緑に、道照が東南禪院で亡くなる時に立ち会った弟子として「知調」なる僧が見える。道照は文武4年（700）に亡くなっている、年代としてはちょうど合致するので、同一人物と見てよかろう。この他には、文献史料に登場する僧侶名は確認できない。

次に經典に関わる木簡として、⑩「法華經」⑪「□多心經」⑫「経蔵」⑯「觀世音經」などがある。

⑩は法華經の借貸について記した文書木簡。⑪は般若波羅密多心經のことであろう。⑫は上部に穿孔があり、

「益」は鎌と同義とみて、経蔵のカギに付けたキーホルダーの木簡である。⑦は習書の一部に經典名をしるしたもの。

次に寺院名を記す木簡として、③「飛鳥寺」⑧「葛城」そして⑨の寺院名を列挙したものなどがある。

飛鳥寺は『日本書紀』をはじめとする文献史料では、「飛鳥寺西」という表記を別とすれば、法興寺・元興寺と記す例が多いが、③によって、7世紀に明らかに飛鳥寺とも称していたことが改めて確認できたといえよう。⑧は「南」(あるいは南院といった飛鳥寺内の呼称か)から、「葛城」に対して沙弥の派遣を依頼した木簡の一部であり、宛先は葛城寺と推定できる。

⑨は、上下が欠損しているため、木簡の機能を明らかにすることができないものの、全て寺院名を列挙していると判断される。「波若寺」は般若寺、「洗尻寺」は池尻寺(法起寺か)、「立部」とは立部寺(定林寺)、「平君」は平群寺(平隆寺)、「龍門」は龍門寺、「吉野」は吉野寺(比曾寺)のことであろう。したがって「春日部」「矢口」「山本」も地名にもとづく寺名と見るべきである。

それぞれの寺院名をどこに比定するかについては、遺構・遺物などの裏付けも含めて、十分な検討が必要である。たとえば、般若寺の場合、奈良の般若寺・飛鳥の日向寺・葛城の片岡寺のどれに当てるのか。あるいは「山本」については、櫻原市に山本町があり、その地名は「山本荘」として少なくとも10世紀までは遡るから、この周辺に7世紀の寺跡を探すべきか。もししくは、「法起寺塔露盤銘」に聖徳太子の遺願によって「山本宮」を寺としたという記述を再評価して、「山本寺」を法起寺にあて、「洗尻寺」はこれとは別とするなど、いくつかの問題が提起されこととなろう。

いずれにせよ、ここに列挙された寺が7世紀後半に存在したことは確かであり、古代寺院研究に資するものである。

これらの他に、①の木簡は「院堂童子」が病を得たために薬を請求したもの、④は寺院内における糸の出納記録、⑦は「飢者」に対して米を支給した記録木簡、⑨と⑩は僧侶名のみを記し、上端に穿孔をもつ個人札など、寺院内部での動きを示唆する木簡が多く含まれており、その方面での史料としても貴重である。

全体的な特徴の第2に、天皇に関わると推定できる一

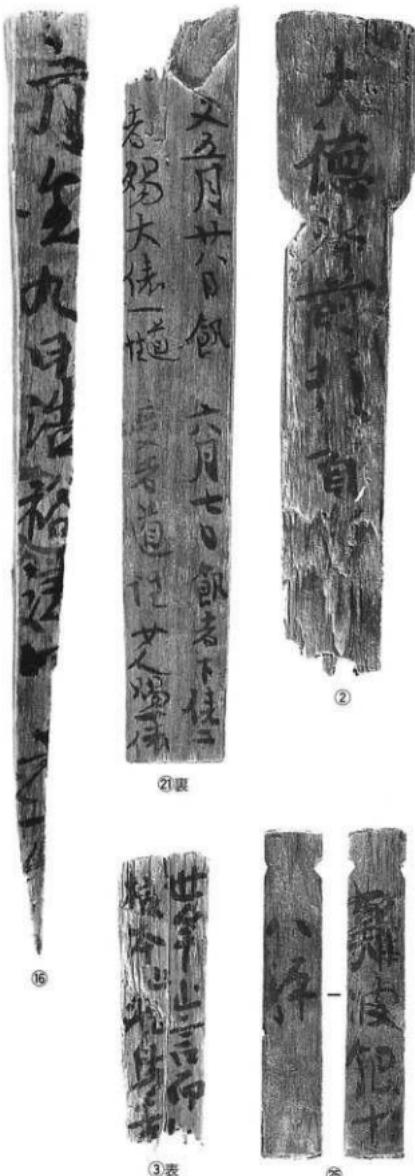
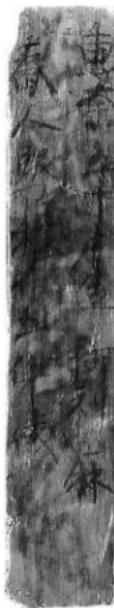


図44 出土木簡3



⑮

⑯



⑯表

⑯

⑰

図45 出土木簡4

群が含まれる。⑯は下端折損のため文意が不明であるが、出土遺構・伴出遺物からみて、天武ないし持統朝のものと判断できるから、「天皇」と明記した確実な史料としては最古のものである。

天皇号の成立時期について、これまででは、法隆寺金堂の薬師如来像の光背に丁卯年（607）のこととして「大王天皇」と見えるのを、推古朝当時のものとみて、この頃には天皇号が成立していたとする説、野中寺弥勒菩薩像台座に丙寅年（666）に「中宮天皇」とあるのを確実な最古史料と考えて、天智朝の成立を説く論、それらはいずれも当時のものではなく、後刻であるとして否定し、確実には淨御原令から、若干遡っても天武朝から天皇号が使われたとする説などが提起され、決着を見ていない。

⑯の木簡によって、少なくとも天武・持統朝には天皇号が成立していたこととなり、こうした研究に一石を投ずる木簡である。

⑰の「湯沐戸」は湯沐戸の誤記とみられ、7世紀に皇后・皇太子などの経済的基盤となった封戸の一種と言える。木簡はその湯沐戸から「調」として貢進された物品に付けられた荷札木簡である。

さらに⑯と⑰に見える「次米」は「すきのこめ」と読み、新嘗祭における悠紀・主基のスキの地から送られた米である可能性が高い。「書紀」によれば、天武2年12月に大嘗、5年11月と6年11月に新嘗、持統5年11月に大嘗が行わされたとある。8世紀以降になると、即位に伴う大嘗祭の場合は悠紀・主基を占定して、そこから米を取り寄せ、毎年秋に行う新嘗祭では畿内官田からの米を用いたが、7世紀にはその区別なく、いずれも悠紀・主基を定めていたことが「書紀」から知られる。したがって、⑯・⑰の木簡は、天武6年（丁丑年）の新嘗祭に用いられた米の荷札と推定できる。ただし、木簡が12月の日付で「書紀」と1ヶ月の違いがある点、スキの地が「刀支評」と「加爾評」と二つの評にまたがる点など、若干問題点も残っている。

このように、寺院関係の木簡とは別に天皇、皇族ないし宮廷祭祀に関わる一群が存在することは見逃すことのできない要素である。

第3に、工房に関わる木簡もある。⑯「銀」⑰「金屑」⑯「銀鉢」⑯「難波銀」などがそれで、銀に関わる付札類が多い。特に⑯と⑰を考え併せると、「銀」「難波」を

ともに地名と見て、軽市や難波からもたらされた素材としての銀に付けられた付札、といった推定が可能である。発掘地の南には、金属製品やガラス製品の工房があったと考えられるから、こうした木簡は、溝の上流から廃棄されたのであろう。

以上にあげた特徴的な木簡のはかに、習書として、⑥や⑨は「千字文」の表題部分を記し、⑩は千字文本文の一部を写したものである。また⑪も論語の一部ではないかと思われる。⑫は漢詩の習作か。さらに⑬は漢字の読みを音仮名や類音字で示した木簡で、これまで類例がない。出典等もいまのところ判然としないが、国語学的にも興味深い資料で、今後の検討が必要である。

古代史研究上の意義 以上、木簡の内容をごく簡単に紹介したが、これらが古代史研究に及ぼす影響は極めて大きいと言わなければならぬ。特に、年代的に天武朝に遡るものを含むSD01とSD05出土の木簡は、当該期の文字資料が少ないだけに、「書紀」の記述の信憑性を検討するためにも貴重である。ここではその一例として、地方行政組織の問題を取り上げてみる。

国都里制が大宝令によって成立し、それ以前には国評里制であったことは周知のことである。ところが、7世紀のどの段階で律令的な国が成立したのか、サトの成立はいつか、またその表記が五十戸から里へ変わったのはいつからか、などについては未だ確定していない。⑩・⑪・⑫・⑬などの木簡はそうした問題を考える手がかりとなるものである。

律令的な国成立について、書紀では古い時期から国名を表記するが、それらは後世の知識にもとづく調色の可能性が高く、確実なところでは天武12年12月と翌年10月に国境を定めたとする記述を待たなければならない。

これまで、癸未年（天武12・683）の年紀をもつ藤原宮木簡には「三野大野評阿漏里」とあって「国」と明記していないことから、金剛場陀羅尼經奥書に丙戌年（朱鳥元・686）の年紀で「川内国志貴評」とあるものが、国としては確実な最古の史料であった。ところが、⑩と⑪では丁丑年（天武6・677）に既に「三野国」とあり、国が天武朝初年以前に遡ることを示したのである。

また⑩の「恵奈五十戸」⑪の「久々利五十戸」は行政単位としての「五十戸」史料としても、年紀を伴う最古の木簡である。かつて飛鳥京から649～664年の冠位名を



⑯



⑪



⑬



⑮



⑰

図46 出土木簡 5

		国造のタニ	(木簡等)	(書紀等)
645(大化1)	東國國司 (かにハシモトモト)	評		
646(2)				改新詔
649(5)	国宰・惣領 (せんか)			
652(白雉3)			五十戸 里回 *	班田・造籍という
664(天智3)			「白髮部五十戸」飛鳥京木簡649-664項	
670(9)				民部・家部を定む
675(天武4)	書紀国名列擧 (しょきこくなめりゆ)			庚午年籍 部曲廃止
677(6)	*	*	五十戸(サト) *	「三野国刀支許奈五十戸」
681(10)	*	*	*	「紫江五十戸」伊場木簡
683(12)	国	*	里 *	この領「伊勢国」か飛鳥京木簡 「三野大野評阿漏里」藤原京木簡 [にて御記引け、號給用]
686(朱鳥1)	*	*		国境確定
689(持統3)			「川内國志貫評」写經 [にて御記引け]	
690(4)				淨御原令完成
700(文武4)	*	*	*	庚寅年籍
701(大宝1)			「若佐国小丹生評木ツリ」藤原京木簡	
717(嘉永3)				
740(天平12)			部 一里	
			部 ×	
			↓	
			↓	
				*は対応する木簡があることを示す

表7 国造の変遷

記す木簡とともに「白髮部五十戸」と表記した木簡が出土しているが、これは特定集団の幅戸単位としての五十戸であり、行政単位の五十戸（サト）はそれより遅れて、天智朝ないし天武朝初年の間に成立したと推定できる。またSD01とSD05から出土した木簡には今のところ「里」という表記が見られず、⑨や⑩などいずれも「五十戸」となっている。両溝の下限を特定するにいたっていないが、少なくとも年紀をもつ木簡はみな天武朝であることを重視すれば、およそ天武朝までは「五十戸」であり、癸未年の藤原宮木簡「三野大野評阿漏里」を初見として、天武朝末頃に「里」に変わると考えることができよう。

以上の他にも、サトの役人の官職名として⑩「五十戸造」（サトノミヤツコ）と称したこと、61歳の男性の年齢呼称として「次丁」ではなく⑪「老夫丁」と記されたことなど、用語の点でも、淨御原令ないしそれ以前の制度を考えるための史料が散見しており、検討課題が多い。課題 今回の木簡は、総点数が7,500点余と、飛鳥・藤原京地域で出土した木簡としては最大の点数にのぼり、また内容豊富な史料群であることから、個々の問題点として深めるべき事柄は多いが、ここでは全体的な課題をあげておく。

さきに特徴として3点指摘した。まず寺院関係木簡について、発掘地が飛鳥寺のどのような部分にあたっているのかが問題である。発掘の知見では寺域は第84次調査区の北端より北までとなり、この場所は一応寺域の外と考えている。したがって、寺域外に別区画として一院

を形成して、寺務を担当する部局がそこに置かれたと見るべきか否かが問われる。その場合には、⑧の木簡の差出機関としての「南」などは部局名の一つの候補となる。

第2に天皇および宫廷儀式に関わる木簡は、飛鳥寺というよりも、西南方の淨御原宮推定地に引きつけて考えるべきかも知れない。ただし、その場合でも、発掘地に近接した場所にどのような施設を想定すべきであろうか。例えば、「次米」に関して言えば、平安時代では大嘗祭を行なう場合に、その準備を整えるために北野に斎場を設けており、宮の北方にそうした施設を作ることが古く遡るすれば、発掘地が淨御原宮の北に位置する点が符合する。ただし、これも今のところは憶測の域を出ない。

第3の工房関係木簡についても同様であり、この付近で行われたであろう工房の性格、製品、原材料など、南の第87次調査で検出した遺構・遺物との関連を考える必要があろう。

これらのうち、第2・第3の点については、1991年調査で出土した木簡にも類似した内容のものがある。すなわち、「大伯皇子宮物」「石川宮鉄」といった皇族・宮に関する木簡、「本用鉢」「大釤」「堅釤」といった金属製品名、あるいは釤の様に墨書きしたものなどの存在は、工房との密接な関連を示すものである。さらに、1998年度の第93次調査でも、新たな遺構・遺物の発見が予想されるから、それらの成果も合わせて、全体像がいま少し明らかになった段階で、再検討を加えたいと考えている。

（寺崎保広）

140

- | | | |
|---|--|------------------------|
| ① | 恐々申院堂童子大人身病得侍
故万病膏神明着右□一受給申願惠 | 105. (18). 8.011 |
| ② | 照御前謹白昔日所
白法華經本傳而□ | 225. 20. 3.011 |
| ③ | 世卒止言面□
本止飛鳥寺 | 115. 21. 5.032 |
| ④ | 月卅日智調傳入坐糸舟六斤半
又十一日余十斤出 | (167). (36). 7.039 |
| ⑤ | 粒評石見□
里力 | (266). (28). 3.081 |
| ⑥ | 千字文□□□
勤員外力 | (106). 26. 3.039 |
| ⑦ | 觀勒口
大夫 | (128). (11). 5.081 |
| ⑧ | 南請葛城明日沙勞一人
天天天天天天天□天天 | (131). (39). (10). 065 |
| ⑨ | 大德前 | (54). (14). 6.081 |
| ⑩ | 播磨國穴粟郡山守里
日泰部奴比白米一俵 | (252). 25. 3.065 |
| ⑪ | 播磨國穴粟郡
野里出雲部生手 | 165. 28. 5.033 |
| ⑫ | 熊汗羅彼下迎左志耶
葛上横詠嘗詠 | 144. 21. 5.033 |
| ⑬ | 八秤 | 187. 15. 5.051 |
| ⑭ | 此者牛価在 | (75). (22). 3.019 |
| ⑮ | 多心経百合三百
十一口 □ □ | (162). 15. 3.081 |
| ⑯ | 二月生九日浴裕法師□
賢カ | (235). (20). 11.081 |
| ⑰ | 聖僧銀口
三絕鏡 | (57). (11). 2.039 |
| ⑱ | 丁丑年十二月三野國刀支許次米
忠奈五十戸造 阿利麻 | 151. 28. 4.032 |
| ⑲ | 人腹部枚布五斗俵 | 152. 27. 3.032 |
| ⑳ | 四力年六十老夫丁 初□口
口口口口作佛□ | (138). 11. 2.081 |
| ㉑ | 口口口口作佛□
金屬 | (88). 20. 8.081 |
| ㉒ | 小升三升米「師力」用 又三升
又五月廿八日飢 六月七日飢者下俵一
者賄大俵 一性 受者道性女人賄一俵 | (190). 29. 3.019 |
| ㉓ | 南北溝SODOH
物部 古麻里 | 146. 31. 4.031 |
| ㉔ | 加爾許久利五十戸人 | 213. 24. 11.011 |
| ㉕ | 「慈寺」波若寺 流尻寺 日置寺 春日部 矢口
石上寺 立部 山本 平君 龍門 吉野 | (183). 25. 6.019 |
| ㉖ | 耶 耶 耶 耶
輕銀鉢 半秤 | 94. 17. 3.032 |
| ㉗ | 字文勤員
口 | (183). 25. 6.019 |
| ㉘ | 觀音經卷
支為口支照而為 | 145. (21). 20.011 |
| ㉙ | 昭カ | (左新) |
| ㉚ | 陽沫戶海部佐流
調 | 152. 19. 5.033 |
| ㉛ | 三枝部赤男綱
次詳上部五十戸恭宜部 | 123. 21. 3.032 |
| ㉜ | 刀由勢力 | 168. 27. 5.031 |
| ㉝ | 三間詳 小豆 □□ | (134). 21. 5.032 |
| ㉞ | 弥奈部下五十戸
口代□口尺四枳
「一區力」 | 131. 23. 7.032 |
| ㉟ | 丙子戴代四枳
口代□口尺四枳 | 114. 23. 4.032 |
| ㉟ | 桑根白皮
弁德 | 129. 24. 3.032 |
| ㉟ | 竟道 | 152. 27. 3.011 |
| ㉟ | 天皇眾口弘寅口
露カ | (110). 24. 5.011 |
| ㉟ | 白馬鳴向山 欲其上草食
女人向男笑 相逆其下也 | (118). (19). 3.081 |
| ㉟ | 推位口國
海誠河通力 | (右細)
(左細) |
| ㉟ | 口口口口口
口 | (156). 24. (10). 011 |

3 第87次調査

はじめに

飛鳥島遺跡は、1991年の発掘調査（飛鳥寺1991-1次調査）で存在が明らかとなつた、7世紀後半を中心とする大規模な生産工房の跡である。ここでは、炉跡、掘立柱建物や堀、井戸のほか、多量の炭とともに不要品を廃棄した厚い遺物包含層を確認した。包含層からは、さまざまな銅製品・鉄製品のほか、ガラスの坩埚や鋳型、木簡、金属製品を注文する際の木製の見本（雑形）など、多様な遺物が大量に出土している。

今回の第87次調査区は、この1991年調査区の南に隣接する場所にあたり、一部を重複させるかたちで調査区を設定した。発掘面積は1900m²である。全体に南から北へ下る丘陵の斜面であるが、ほぼ中央に丘陵が張り出し、その東西が谷地形をなす。1991年調査区は、この2つの谷の合流地点であったが、今回は、それぞれの上流部を調査したことになる。

ただ、発掘調査は1998年度もひきつづいて実施しており、遺物整理もいまだ継続中である。そのため、詳細については別途刊行予定の報告書に譲り、ここでは1997年度の成果を中心に、概要を報告することとしたい。

遺構

今回の調査でも、掘立柱堀、掘立柱建物、炉跡など、7世紀後半を主体とする多数の遺構を検出した。また、これに重複して、江戸時代の梵鐘鋳造土坑を確認した。

炉跡をはじめ鍛冶関係の遺構は、西側の深い谷筋に集中しており、その上を炭・廃棄物の包含層が厚く覆う。この一帯は、北下りの斜面を何段にもわたって削りだし、平坦面を造成していた。炉や掘立柱建物は、こうした平坦面に設けられたものである。

一方、それと合流する東側の谷筋はかなり深く、水量も多いが、大部分が今次調査区の外側となるため、南岸近くを部分的に調査したことにとどまる。この流路を埋めたて、掘立柱の区画壁を設けていた。

掘立柱堀 調査区の東北部から東南部にかけて、生産工房の北（北東）と東（南東）を区画するとみられる2条の堀（SA01・SA02）を確認した。いずれも、先述の東

側の谷を埋め立てたのちに掘削されている。SA02は、中間部分が削平のため消失しているが、丘陵の頂部付近に3つの柱穴が残る。急な斜面を避け下るようなかたちで設けられたことがうかがえる。柱間寸法は、SA01が9尺、SA02が8尺である。柱掘形は、長辺で1.1～1.3mと比較的大きい。柱は抜き取られたものが多いが、直径約20cmの柱根を残す例がある。

掘立柱建物 調査区の西部、西側の谷の東で、2棟の建物（SB03・SB04）を検出した。また、調査区西北隅で、1991年調査区にまたがる柱穴群を確認した。後者は柱間寸法のばらつきが大きく、疑問もあるが、いちおう3×2間の南北棟建物（SB05）と考えておく。

SB03・SB04は、桁行・梁間とともに3間の、きわめて規格性が強い建物である。丘陵を削って平坦面を作り、その間に平行するかたちで配置されていた。両建物の桁行方向の柱筋は正しく一致しており、同時に存在したことは疑いない。SB03が総柱の形式であるのに対し、SB04は内部に柱をもたない構造であるが、ともに倉庫として使用されたものとみられる。

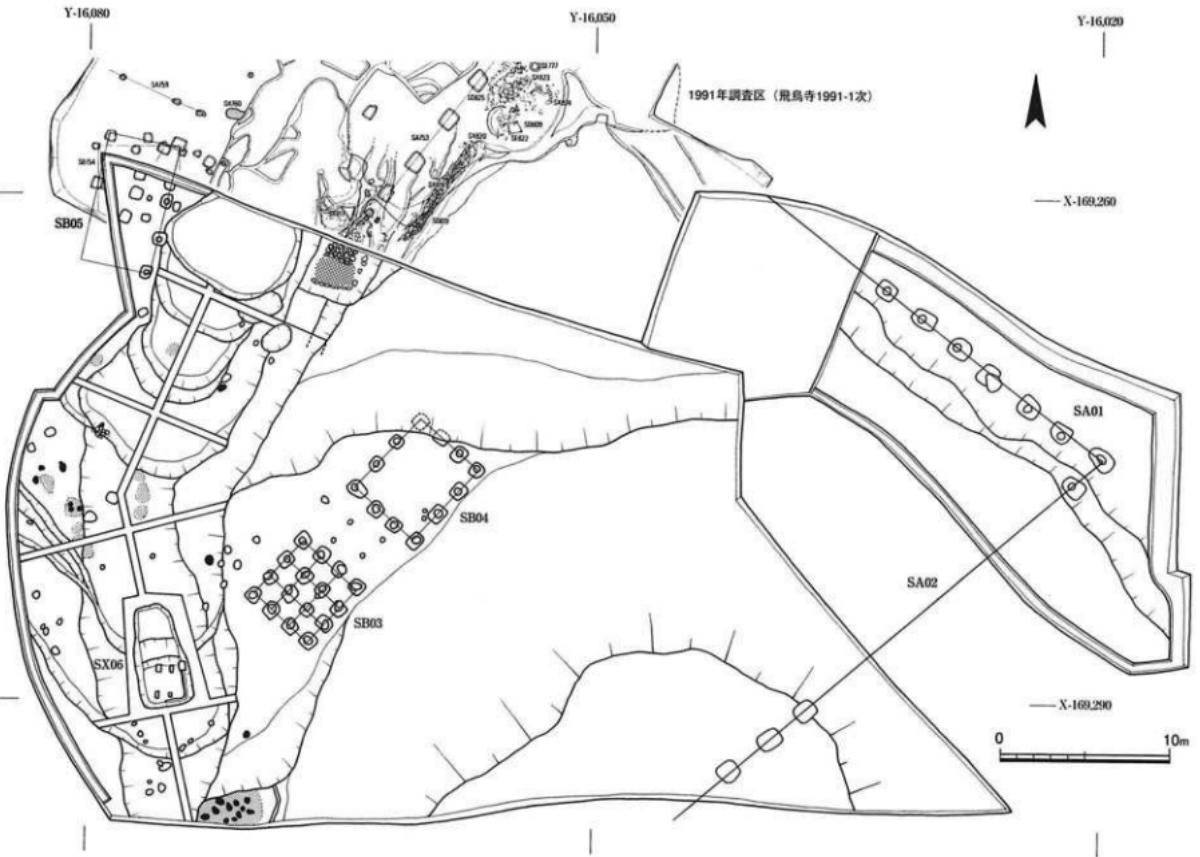
柱間寸法は、SB03が、桁行・梁間とともに5尺等間、SB04は桁行6尺、梁間5尺である。また、両建物の間隔は15尺であった。柱掘形は、一辺0.7～1.0m前後と平面はそれほど大きくなないが、深さはかなり深い。とくにSB03の掘形は深く、最大で1.8mに達する。なお、掘形底面の標高は建物ごとにほぼ一致するが、SB03の掘形底面は、山側（南東側）の柱筋が最も低い。ほとんどの柱が抜き取られており、柱径は25cm程度である。

炉跡 地面を浅く掘りくぼめた、円形ないし梢円形平面の炉跡を20基以上検出した。調査区西南端の最上段の平坦面のほか、調査区西端中央部の平坦面に顯著な集中を見せる。後者では、整地を重ねて、炉が上下に重複した状況が認められる。

炉の遺存状況は概して劣悪で、炉底をわずかに残すものが大半であった。炉壁の立ち上がりはごく一部に残るにすぎず、上部構造の復原は困難である。

炉跡は、固い還元層の炉底・炉壁をもつものから、赤い焼土（酸化層）のみ認められるもの、底面や壁面がわずかに赤く焼けた程度のものと、さまざまである。いずれも、底に炭の堆積が確認される例がある。前者のうち遺存状況の比較的良好な炉跡は、0.6×0.4mの梢円形で、

図47 第87次調査図 1:300 (出典:はかね、清い朝日社)



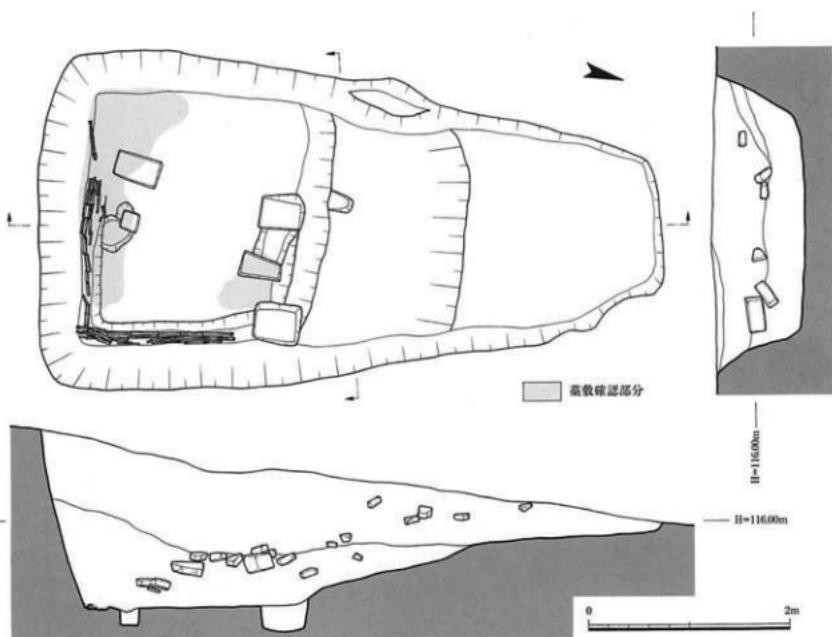


図48 江戸時代の梵鐘铸造土坑 (SX06) 実測図 1:50

0.1mほどの立ち上がりを残していた。このほか、0.55×0.15mの細長い平面をもち、両側に敷石を伴う炉跡もある。この炉底には埴堀片が遺棄され、炉の上部は板石と平瓦で覆われていた。

流 路 調査区東端で、東側の谷筋の旧流路の一部を確認した。深さは流路の肩から約3mに達し、相当な水量があったようである。下部は灰緑～青灰色粘土を主体とする厚い自然堆積層で、途中に、杭と横木を組み合わせて水流を堰き止める「しがらみ」を設けていた。一方、上部は人為的に流路を埋め立てた整地土であり、これを掘り込んで、SA01・SA02の柱が立てられている。

梵鐘铸造土坑 調査区西部、西側の谷筋で、江戸時代の梵鐘铸造土坑 (SX06) を検出した。この谷筋は、炉の操業等にともなう大量の炭や廃棄物混じりの土で埋まるが、そうした包含層を掘り込んでつくったものである。

土坑は、東西3.3m、南北6.2mほどの大きさで、北下りの斜面を掘り込んだ方形平面の豊穴部分と、それにつづく下手の斜道からなる。後者は、製品搬出のためのスロープでもある。豊穴の底面の南辺と東辺には、壁際に浅い溝を掘り、中に竹を敷く。この溝は、底面東北隅の

穴に連結する。また、底面のかなりの部分で、藁を敷いた状態を確認した。いずれも、水分を防ぐための工夫とみられる。さらに底面には、中央の空間をはさんで、2つずつ対になる、4つの長方形の穴が掘られていた。この中に梵鐘の鋳型が据えられたことがうかがえる。

鋳造後、鋳型の破片は、ほとんどが豊穴の中に廃棄されていた。それらを接合、分析することにより、鋳造方法の細部にわたる復元が可能となっている。また、鋳型の中には、「飛鳥寺」の銘文を鋳出したものがあり、飛鳥寺（安住院）に残る記録類との比較から、これが、第二次大戦中に供出されるまで同寺に架かっていた梵鐘であることが確定した。延享2年（1745）に、五位堂の鋳物師が鋳造したもので、高さ4尺9寸8分、直径2尺7寸8分、厚さ2寸5分と記録されている。

出土遺物

今回の調査でも、金属製品およびその鋳造や加工に伴う埴堀・とりべ・鋳型・輪の羽口・湯玉・鉢津をはじめとして、ガラス・玉類・土器・瓦など、大量の遺物が出土した。遺物の多くは東西の谷筋に集中しており、なか



図49 第87次調査区全景 西から

でも西側の谷筋に堆積した炭と廃棄物の層に含まれるものが圧倒的である。

そのため、この包含層については、土ごと持ち帰り、水洗選別作業を実施している。土嚢にして1万数千袋に及ぶが、これによって、微小な遺物ももれなく回収することができた。ただ、現在までに整理が終了したのは一部にとどまるため、以下ではとくに注目される遺物についてのみ、簡単に述べることとする。

金・銀 金粒と金箔、銀片および銀線が出土している。金粒と銀片は、最大のものでそれぞれ4.3g、1.4gある。また銀に関しては、科学分析の結果、銀を融かした坩埚の存在が明らかになった。この場所で金銀の生産加工をおこなったことを示すものである。

ガラス 緑、青、黄などの華麗な彩りをもつガラス玉の製品多数が出土した。小玉の鋳型や、ガラスを融かした坩埚、原料となる石英や鉛なども発見されており、ガラス玉の製作に関わる遺物一式が出そろったことになる。ここで、原材料から製品を完成させるまでの各工程が行われたことがわかる。

玉類 瑪瑙、琥珀、水晶製の玉類を多数確認した。飛鳥池遺跡では初めての発見である。ガラスとともに、仏像や仏堂の荘嚴具として用いたものとみられる。

仏像鋳型 板仏の菩薩立像の鋳型で、1991年度調査の出土品と同一の原型によるものである。三重県立博物館が所蔵する「銅板押出菩薩立像」（奈良国立博物館「押出仏と仏像型」39頁、1983年）も、この鋳型で製作した仏像を型として作られた可能性が高い。

まとめ

今回の調査によって、谷の上部まで段階的に作業面を造成し、炉を構築した状況が明らかとなった。また、掘立柱の倉庫および、それらが建つ空間を区画する壁の存在を確認した。この区画壁は、急な斜面にまで設置されており、外部からの出入りを遮断するための施設であったことがうかがえる。おそらく、内側の倉庫の存在と関連するものであろう。

一方、遺物に関しては、金銀の加工および、ガラスや瑪瑙、琥珀、水晶といった玉類の生産を確認したことが特筆される。これまで、ほとんど明らかでなかった7世紀の宝飾品生産を解明するうえで、きわめて重要な資料といえる。それは同時に、従来知られていた以上に、高級品を含む多様な製品が、この場所で生産されたことを示すものである。飛鳥池遺跡の生産工房の実態は、より明確となりつつあるといえよう。

（小澤 譲）

◆飛鳥池東方遺跡の調査—第86次

1 調査の経緯と概要

本調査は、奈良県が計画している万葉ミュージアム建設に伴う事前調査である。調査地は飛鳥寺の南東方に位置し、飛鳥池の東岸をなす丘陵と、飛鳥坐神社南の丘陵に挟まれた、北西から南東へ廻る谷筋で、岡寺の北側から下る谷を主とし、これに小原の集落から下る谷が合流している。谷川はすでに整理され、谷の西寄りにコンクリート製開渠の農業用水路として整備されている。調査地は全て水田で、前年秋まで耕作されていた。

調査対象面積は約6,500m²で、ミュージアム建設予定地の東半にあたり、建物外構の盛土による造成と、既存用水路の付け替えが計画されている。水路付替工事以外は盛土造成となるため、遺構面の確認と谷の堆積状況の把握を目的としたトレンチ調査とし、要所に8箇所のトレンチを設定して発掘調査を行なった（図28参照）。発掘面積は合計1,112m²、調査期間は7月7日から11月11日である。各トレンチの面積と調査期間を表8に示す。

本調査については、飛鳥池遺跡の調査とあわせて、万葉ミュージアム関連の報告書の刊行が予定されている。詳細報告はこれに委ねることとし、ここでは各トレンチにおける主要遺構と出土遺物の概要を述べる。

2 遺構

1 トレンチ

敷地東端の水田（H=111.3m）に、国土方眼方位に沿って設定した南北45m、東西4mのトレンチである。

基本層序は耕土、黄灰色粘質土（底土）、瓦礫層（遺物包含層）で、これを除去した暗灰色土面で遺構検出を行なった。遺構面高は110.5～111.1mである。

調査区の南端から9mまでは瓦礫層ではなく、灰褐色砂

質土面（H=110.8m）で、耕作にともなう溝のみを検出した。その北側の幅8mは流路の堆積で、東へ廻る支流SD001が、ある時期にここを流れていたと推定され、4トレンチ検出の流路SD010へ合流するとみえる。やはり瓦礫層に相当する土層ではなく、黄灰色粘質土以下は、灰褐色砂質土、茶灰色砂質土、暗褐色砂質土、灰色砂疊と堆積し、暗褐色粘土層（H=110.4m）を確認したが、底まで掘り切っていない。流路の北岸には拳大の礫が南西下がりの勾配をもって面的に検出され、あるいはこれが護岸SX002であった可能性もある。

SX002の北には、暗灰色土が南西下がりの遺構面を形成している。暗灰色土は遺物を含んでおり、7世紀中期以降の整地土と考えられる。

掘立柱建物SB004 暗灰色土の遺構面が比較的平坦な面をなす、トレンチの北端近くでL字形に並ぶ柱穴4基を検出した。南北棟掘立柱建物の南西隅部で、トレンチ東方へ続くと考える。北で東に37度の振れを測り、柱間寸法は桁行8尺、梁間9尺程度である。柱掘形はおむね1m角の隅丸方形で、残存深さ0.8mであるが、南東の柱穴は深さ1.1mと特に深く、これが身舎の隅柱で、北に3基並ぶ柱穴が底の柱であった可能性もある。南から1間目の柱穴に柱根が残っており、残存長100cm、残存径27cmで、径9寸程の円柱に復原される。

小穴列SA005 SB004の北西で、建物と直行方向に並ぶ小穴列。1トレンチ北西の2トレンチまで、4間分を検出した。直径30cm程の円形で、5～6尺間隔で並ぶ。小規模な扉であろうか。

2 トレンチ

1トレンチと同じ水田で、1トレンチの北西に接する形で国土方眼方位にあわせて設定した、南北25m、東西2mの調査区である。基本層序は1トレンチと同様で、

トレンチ	大・中地区名	面積	調査期間	トレンチ	大・中地区名	面積	調査期間
1	5AKA-A、5AME-F	181m ²	7.25~10.27	5	5AME-F	75m ²	9.12~10.23
2	5AME-F	50m ²	7.29~10.28	6	5AME-F	303m ²	8.20~11.11
3	5AME-E・F	91m ²	8.06~8.25	7	5AME-E・F	64m ²	8.26~9.05
4	5AKA-A	86m ²	7.09~9.02	8	5BAS-M・N	262m ²	9.03~11.05

表8 調査面積と調査期間

暗灰色土が北西下がりの造構面をなすが、調査区北端から南3mでは暗灰色土が残らず、褐灰色砂面となる。造構面高は110.6~110.9mである。1トレンチから続くSA005のほかに、トレンチ西辺に沿って複数の小穴があるが、間隔が不揃いで、造構としてはまとまらなかった。**礫群SX006** トレンチ南端から8m付近の礫群。拳大~人頭大の礫が集まるが、時期・性格とも不明である。

3 トレンチ

2トレンチ北西の水田(H=110.9m)に設定した、東で北に振れる南北5m、東西18mの調査区である。

基本層序は耕土、床土、青褐色粘質土、黒灰色砂質土(遺物包含層)で、これを除去した茶褐色砂礫面で造構検出を行なった。茶褐色砂礫層は遺物を含まず、造構面高は北西下がりで109.7~110.2mである。2トレンチ造構面から1m程低く、建物・塀などは検出されなかつた。土層は耕作土の堆積が厚く、早い時期に耕作目的で削平されたらしい。トレンチ中央の北寄りで南北5m以上、東西7mの広く浅い土坑SK007を検出した。(長尾充)

4 トレンチ

1トレンチ西の一段低い水田(H=111.0m)に設定した北で西に振れる南北25m、東西6mの調査区である。基本層序は耕土、黄灰色粘質土(床土)で、H=110.6m以下はトレンチ全体が流路堆積となり、顯著な造構面は検出できなかつた。この流路SD010は現況の用水路に繼承されると考えてよい。流路上層ではトレンチ南東隅から北西方向に礫が列をなし(H=110.0m)、平安時代前期頃の流路東岸SX009と推定される。これより古い時期の岸は確認できていない。トレンチ中央でH=108.9mまで掘り下げたが、流路底は確認できなかつた。中層以下の流路堆積は暗灰色粘質土、暗灰砂と有機質を含む暗褐色粘質土が互層をなしており、拳~人頭大の礫が混じる。堆積状況からみて、東岸は古い時期にはトレンチより東方にあり、堆積の進行につれて西に寄つて来ているようである。流路堆積の下層上部(H=109.3m)から7世紀末頃の土器が出土する。またトレンチ中央部で北に急に下がる堆積が認められた。明瞭な岸部は確認されなかつたが、1トレンチ検出の流路SD001はこのトレンチ付近でSD010と合流するらしい。

5 トレンチ

4トレンチ北の一段低い水田(H=110.3m)に設定し

た、東で北に振れる南北5m、東西15mの調査区である。

基本層序は耕土、床土で、トレンチ西半ではさらに黄灰色粘質土、赤灰色粘質土が堆積し、これを除去すると暗灰色土が北西下がりの造構面をなす。造構面高は109.6~110.0mである。掘立柱脚5条をそれぞれ柱穴3基ずつ、2分間を検出した。これらは全て6トレンチに連続しているので、次項に記述する。

6 トレンチ

5トレンチから北へ一段下がった水田(H=109.8m)に設定した調査区で、当初南北22m、東西5mを設定、その後西へ5m幅を拡張、主トレンチとした。西方へさらに2回の拡張を行ない不整形なトレンチとなっている。

層序は5トレンチとほぼ同様であるが、トレンチ南端から8m付近までは、暗灰色土が削平されており、暗青灰色砂質土の自然堆積上で造構検出を行なつた。西拡張区は暗灰色土がなく、小礫を含む灰色砂となり、4トレンチで検出した流路SD010は本トレンチより西の丘陵沿いを南東から北西に向かって流れていると考えられ、その東岸へ向かって緩やかに傾斜する。5・6トレンチの造構は基本的には、この流路SD010の方向に規制されている。造構面高は109.1~109.6mである。

主トレンチ西辺ではこの傾斜を整地した黄色土を確認した。東端は高さ15cm程の段差SX017となる。北で西に37度の振れをはかる直線状で、南端で西にはば直角に屈曲する。整地土は最大厚25cmが残り、北へは調査区外まで延びる。西側は削平を受けており、幅約22mを確認するにとどまる。流路寄りの軟弱な地盤を掘削し、黄色土で整地したものと考えられる。

主な造構は素掘溝2条、石組溝1条、掘立柱脚6条で、このうち脚5条は5トレンチから連続する。

斜行溝SD018 トレンチの中央を北東から南西に下る溝である。整地にともないSX017で切られるが、トレンチ西方の流路SD010に通じていたものと考えられる。埋土は灰色砂で、東の丘陵からの排水路であったのだろう。石組溝SD019 SX017の南東隅から西へ延びる石組溝で、拳大以上の石を用いる。現状、内法で幅6~14cm、深さ6~18cmで、延長75mが残り、末端で北西へ屈曲する。西から45mは削平のため削石を失い、底石のみが残る。

本来は、より東から延び、塀の内側の排水に使われたと推定するが、どの時期の塀に伴うかは確認できない。

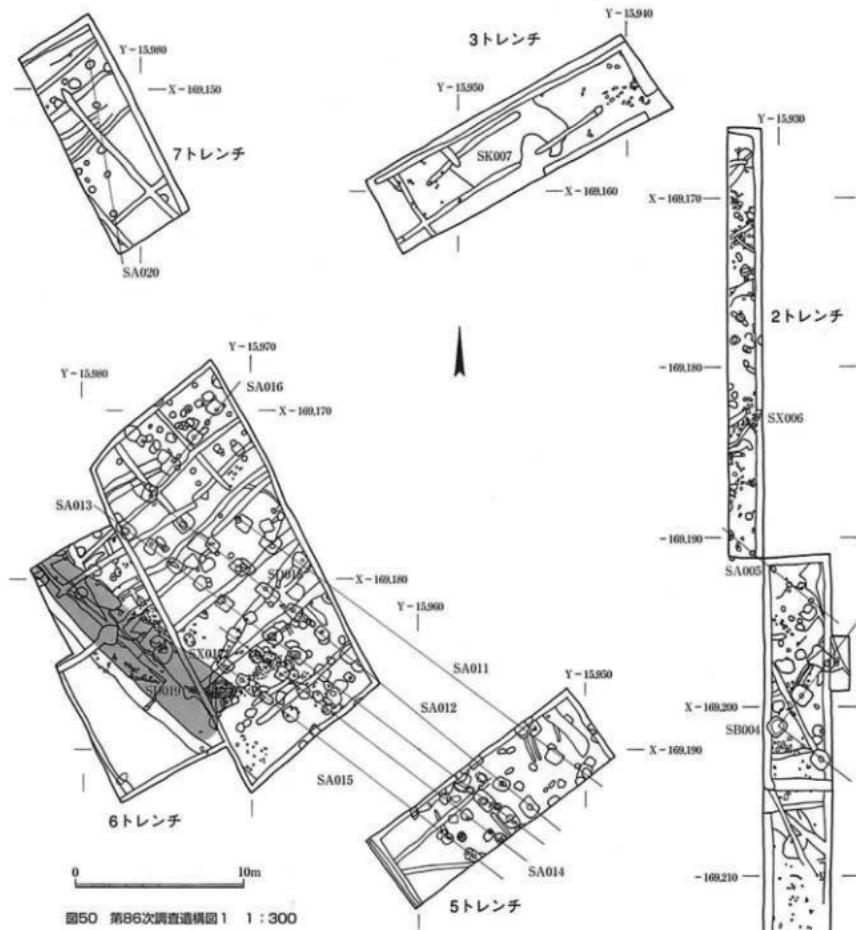
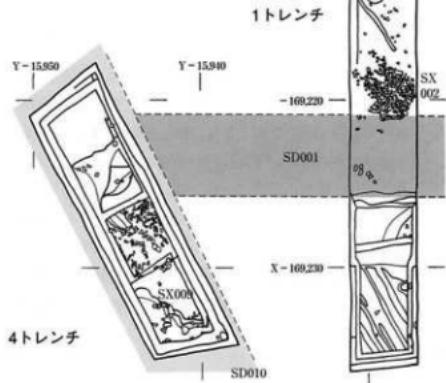


図50 第86次調査構造図 1 : 300

底石の一部には天理産凝灰岩質細粒砂岩製の磚が使われていた。

掘立柱塙SA011 トレーニチ東端の南北塙で、北で西に36度の振れを測り、流路SD010の方向に規制されるとみえる。6トレーニチで2間、5トレーニチで2間分を検出、トレーニチ間の未確認部分も含めれば12間以上となる。柱間は6~9尺と不揃いである。

掘立柱塙SA012 SA011の西方約2.5mの南北塙で、北で西に39度の振れを測る。6トレーニチで8間、5トレーニチで2間分を検出し、未確認部分を含めて14間以上となる。北端にSA016が直角に取り付き、L字型の掘立柱塙になる。柱間は北端で9尺、以南は7尺程度である。柱穴の掘形は塙の方向に長い1×0.7m程の隅丸方形で、残存深さ0.7mと深い。



掘立柱塙SAO13 SA012の西方約2mの南北界で、北で西に37度の振れを測る。6トレンチで11間、5トレンチで2間検出しており、さらに南北に延び、16間以上になる。柱間は6尺。柱穴は一辺1m程の隅丸方形で残存深さ0.4~0.5mである。

掘立柱塙SAO14 SA013の西方約1.5mの南北界で、北で西に37度の振れを測る。6トレンチで4間、5トレンチで2間を検出し、未確認部分を含めて10間以上になる。柱間は6尺、柱穴の掘形は不整形で、径0.7mとやや小さく、残存深さ0.3mである。

掘立柱塙SAO15 SA014の西方約1.5mの南北界で、北で西に37度の振れを測る。6トレンチで4間、5トレンチで2間を検出し、未確認部分を含めて9間以上になる。柱間は5~8尺と不揃いである。柱穴の掘形は不整形で、径70cm程とやや小さく、残存深さ0.6mである。6トレンチ南から1間目に残る柱根は、残存長40cm、径13cmである。

掘立柱塙SAO16 SA012の北端に直角に取り付く東西界で、西で南に39度の振れを測る。4間分を検出し、トレンチ東方へ延びる。柱間は西端8尺、その他6尺で、柱穴掘形は一辺0.8m、残存深さ0.7mである。

7トレンチ

6トレンチ北の水田（H=109.3m）に設定した、北で西に振れる南北13.5m、東西5.5mの調査区である。

基本層序は暗褐色粘質土（耕土）、灰色粘質土、黄灰色粘質土（床土）、黄灰色粗砂、褐灰色粘質土で、これを除去した赤褐色砂質土なし。トレンチ南西隅部では暗褐色粘質土面で遺構検出を行なった。遺構面は北下がりで、108.8~109.0mである。

SAO20 トレンチを南北に横切る小穴列。直径40~60cmの6基を検出した。間隔は1.5~2.5mと不揃いである。耕作溝の方向とは一致せず、性格不明である。

（水戸部秀樹）

8トレンチ

調査対象地の北西隅の水田（H=108.1m）に設定した、北で西に振れる南北20m、東西8.5mの主トレンチと、その東辺北端から東方へ延びた幅3m、延長31mのサブトレンチからなる調査区である。

基本層序は、暗褐色粘質土（耕土）、暗灰褐色砂質土、褐砂質土（床土）、褐灰色粘質土（遺物包含層）で、これを除去した褐灰色砂質土面で遺構検出を行ない、柱



図51 5・6トレンチの掘立柱塙 北から

穴等を検出した。遺構面高は107.5~107.7mで、この遺構面はサブトレンチの東端から10m付近まで続き、以西は平安時代後期まで遡る水田面（H=107.2m）となる。

主トレンチでは、トレンチの西辺と、トレンチのほぼ中央を東西に横切る水田畦畔があり、主トレンチ東辺近くにも南北方向の小畠を挟んで、サブトレンチへ18m程続く、計3面の水田を検出した。また主トレンチの北端とサブトレンチでは、水田下層の調査を行ない、平安時代から7世紀中期に遡る流路を検出している。

なお第84次調査で検出した石組方形池SG30から北東へ延びる石組溝SD31を延長すると主トレンチ北西隅にかかるが、このトレンチでは検出できていない。SD31は北へ屈曲するか、あるいは平安時代までに流路SD010で擾乱されているものと考えられる。

水田畦畔SX021 主トレンチの西辺に沿って検出した水田畦畔。黒青灰色粘質土で、幅0.6m以上。

水田畦畔SX022 主トレンチ南辺に近い水田畦畔。暗灰色粘質土で幅1m以上。SX021に接する部分は幅0.4mの砂の堆積があり、水口SX023と考えられる。

水田畦畔SX027 主トレンチ中央を東西に横切る水田畦畔。畦幅は0.5~1mで、SX021に接する部分に幅0.5mの砂の堆積があり、水口SX028と考えられる。

水田畦畔SX029 主トレンチ東辺の北半で検出した南北方向の水田畦畔。幅0.8mで、SX027との間3m程が砂



図52 第86次調査遺構図 2 1:300

の堆積で途切れ、小畔であった可能性が高い。

水田SX025 主トレンチ南半の水田で南北7.3m、東西は4.8m以上となる。出土遺物から平安時代後期には水田化していたと推定される。水田面では、流入した砂の堆積により、ヒトおよび偶蹄目の足跡SX026を多数検出している。牛耕が行なわれたことを示すものと考えられるが、足跡の配列は不規則で重複が多く、耕作方向等を検証するには至らなかった。

水田SX030・SX031 主トレンチ北半の水田で、上層のSX030は南北10.5m以上、東西7.0m、小畔SX029を挟んで東にSX032が続く。下層のSX031の段階では、小畔SX029の西1.7mに畦があり、耕作の過程で東方へ拡大したことがわかる。

水田SX032 サブトレンチ西半の水田で南北2m以上、東西はSX029から東20mまで明瞭な畦畔がなく、東側の

褐灰色砂質土造構面に緩傾斜で連なる。

掘立柱塀SA033 水田SX032の東で検出した掘立柱穴2基で南北塀と考える。北で東へ42度の振れを測る。

掘立柱塀SA034 サブトレンチ南東隅で検出した東西方向の3柱穴で、東で北へ52度の振れを測る。柱間は6尺で、トレンチ南方へ続く建物の北端部の可能性もある。

掘立柱穴SX035 サブトレンチ北辺東端近くで検出した柱根を残す柱穴。柱根は残存長55cm、残存径25cmで、9寸程の円柱に復原される。これに組み合う柱穴は検出できず、トレンチ北方の建物の南隅角と考えられる。

流路SD010 の下流部 水田下層では平安時代まで存続した流路を検出しており、SD010の下流部と考えられる。最末期の東岸はサブトレンチ東端から13m付近まで広がり、西岸はトレンチ西辺よりさらに西にあると推定される。サブトレンチ東端から18m付近に1m程の間で1.1mと急激に落ち込む部分がある。当初の東岸と考えられ、人為的な掘削をうけた可能性が高い。この底近くに残る古い堆積からは7世紀中期の遺物が出土している。ここから西へ岩盤起源と考えられる淡青灰粘質土の地山が平坦に(H=105.6m) 9m程続いた後、さらに0.3m程落ち込んで最深部となる。底は岩盤起源と考えられる青白色粘土である。

堆積は上から、暗灰色シルト、暗青色砂質土、暗茶褐色砂質土、黒灰色粘土、暗灰色粘土、淡灰色粗砂、褐色粗砂礫、褐灰色砂礫で、最深部は底近くに長径0.4~0.6mに及ぶ大礫がある。最深部から西では拳大までの礫の厚い堆積があり、地山まで到達できなかった。

3 遺物

遺構面直上の瓦礫層および、流路SD010の堆積中から

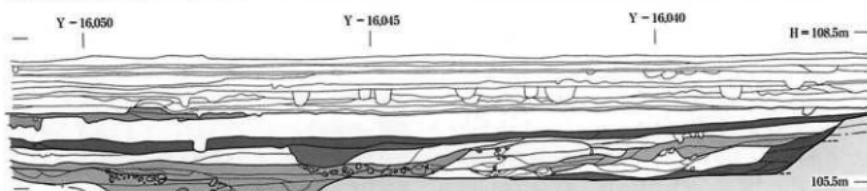


図53 第86次調査8トレンチ北壁土壙図(流路部分) 1:100

多種多量の遺物が出土した。現在、整理が進行中であり、ここでは主要遺物の概要のみを記す。

木製品 流路SD010から曲物底板片および折敷底板片が出土した。曲物底板は直径13.4cm、厚0.6cmである。折敷底板は長円形で、長軸に沿って割れた半分強が残り、厚1cmで、長径75.5cm、短径は40cm程度に復原される。このほか、漆刷毛など工房利用品もあり、飛鳥池工房との関連が注目される。

金属製品 流路SD010からは、鉄釘、銅製太刀頭^{太刀}、刀子吊金具、銅薄板などが出土した。またSD010最深部近くから隆平永宝【延暦15(796)年初鑄】が出土した。そのほか鉛津、鉄津なども出土した。

石製品 石礫、滑石製子持勾玉などがある。また少量ながら砥石も出土している。

岩石 流路SD010で多数の石英塊を採取した。表面は磨滅しており、流路上流から流されてきたとも考えられるが、ガラスの原料として搬入された可能性もある。

また1・6トレンチでは天理産の凝灰岩質細粒砂岩が出土した。酒船石遺跡から出土するものと同質であるが小片で、出土状況からみて二次的に移動したものである。

土器・土製品 繩文、弥生、古墳時代の土器も出土しており、古くから利用された土地であったことがわかる。塙や建物を検出した暗灰色土遺構面を覆う瓦砾層では、藤原宮期の遺物が目立つ。また少量ながら縄羽口、埴輪、炉壁、溶銅付埴輪片、漆壺などの生産関連遺物も出土しており、飛鳥池工房との関連も注目される。

SD010では7世紀中頃から平安時代までの遺物が出土した。特に7世紀中頃の土師器、須恵器は、磨滅が少なく、良好な資料が得られた。また第84次調査の南北大溝

SD05出土の須恵器の火舎と壺に接合するものが、SD010東岸の堆積上層で出土しており、7世紀後葉にこの区域が一体として利用された状況を示すと考えられる。

瓦類 飛鳥時代から平安時代の瓦が出土した。軒丸瓦29点のうち飛鳥寺I型式が19点を占める。軒平瓦は飛鳥寺IIA型式1点がある。これら飛鳥寺創建期の瓦片が全城から出土する。また流路SD010出土の垂木先瓦が、小堀田宮跡出土品と同範であることを特記しておきたい。

4まとめ

谷の地形 現状地形は谷の東側が緩い傾斜、飛鳥池側の

西側は急傾斜である。自然流路も谷の中央より西寄りを流れていたと考えられる。谷川は7世紀代には谷の西寄りに整備されており、その東側には南東から北西へ緩やかに傾斜する平坦面が形成されていたことがわかった。

谷の利用状況 この緩傾斜をもつ平坦面では、5・6トレンチで数次にわたって改作された塙を検出した。これらの塙は谷の西寄りに管理された流路と東側の施設との間を閉塞すると推定される。塙は相互に柱穴の切り合がないが、前後関係が不明だが、おそらくSA011が最も古く、順次西に造り替えて東側施設の空間を広げたものと推測される。またSA012にL字に接続するSA016は区画が細分割された時期があったことを示している。残念ながら区画内施設は確認できていないが、南方の1トレンチで検出した大規模建物SB004の存在は注目される。

建物遺構が未検出で、現状では施設の性格は特定し難い。遺構面上の遺物包含層には飛鳥寺創建期の赤色瓦が多く含まれており、飛鳥寺と関わりのある施設も想定しうるだろう。一方で工房関連遺物も少量ながら出土しており、飛鳥池工房との関連も考慮すべきであろう。

8トレンチでは7世紀中期に遡る流路の存在が確認された。土器は器種も豊富で磨滅も少なく、谷筋での活発な活動を裏付ける。

流路SD010の性格 調査区南西の丘陵の酒船石遺跡では、大規模な造成が行なわれた可能性が指摘され、日本書紀齊明2年(656)条に「廻ち水工をして渠穿らしむ。香山の西より、石上山に至る。舟二百隻を以て、石上山の石を載みて、流の順に控引き、宮の東の山に石を累ねて壇とす。時の人の誇りて日はく、狂心の渠。」とあるのをあてる説がある。

今回検出した流路SD010は酒船石遺跡の東麓まで遡る可能性があり、8トレンチで検出した東岸は人為的な掘削をうかがわせる状況である。書紀にいう「狂心渠」(たぶれごころのみぞ)との関連が注目されるが、「石上山の石」に相当する天理産砂岩は、SD010からは出土していない。このSD010の性格については、進行中である遺物の分析成果を踏まえた上で検討したい。

なお今回の調査範囲では、平成10年度に工事の施工に先立って、水路施工部分および流路部分の補足調査を計画している。今回の調査で生じた諸課題がわずかでも解明できるよう努めたい。
(長尾 充、水戸部秀樹)

◆吉備池廃寺の調査—第89次

1 調査の経緯と概要

吉備池廃寺は櫛原市との境に近い桜井市吉備に位置する（図54）。ここに吉備池という農業用溜池があり、その東南隅と南辺に大きな方形の土壇が2つ東西に並んで存在し、池の堤の一部として利用されてきた。これからは西に大和三山と二上山が、東に三輪山が、南に多武峯が見渡せる。これらの土壇については従来、寺院説（前園実智雄「磐余の考古学的環境」「考古学論叢」第6冊

1981）と瓦窯説（大脇潔「吉備寺はなかった」「文化財論叢II」1995）があった。

1996年に東の土壇の北・西辺で、池の護岸工事が計画されたので、桜井市教育委員会とともに1997年1月から3月まで東の土壇を発掘調査した（図55）。その結果、東南隅の土壇は、東西37m、南北28mほどで高さが2mもある巨大な基壇であることが判明した（「奈文研年報1997-II」）。基壇の断ち割り調査と基壇周囲の精査によって、基壇構築にあたっては、まず東西37m、南北27m、



図54 吉備池廃寺位置図 1:25000



圖55 直備池廢棄場位置圖 1:2000

深さ1mの直方体の大きな穴を掘って、そこに石を入れ、版築で基壇の基礎固めをする掘込地業を行い、つぎにその上に版築で基壇土を積んでいたこともわかった。東の土壇は東西に長く、瓦が出土していることから、寺院の金堂とみられ、そうであればその大きさは飛鳥時代で最大となる。出土した軒瓦が山田寺式軒瓦の祖型とみなされるので、東の土壇の年代は、山田寺の造営が始まる641年よりや古いと考えられる。そこでこの基壇は、639年に舒明天皇が発願した百济大寺の有力な候補と推定され、学界に衝撃を与えた。

それではその西54mにある土壇は何だったのか(図55)。その解明と回廊などの建物跡の有無を確認するために、1998年1月から3月まで発掘調査を実施した。それに先だって行った地中レーダー探査(奈文研埋蔵文化財センター西村康による)では、土壇部分は固くしまって

た状態であるという反応が出了ので、基壇の可能性がきわめて高くなつた。発掘調査の結果、この土壇も版築工法によって積み上げられ、一辺が約30m四方、高さが2.1m以上もある巨大な基壇であることが判明した。しかも、その中心に心礎の抜取穴があつたので、塔の基壇であることも確定した。さらに、塔基壇の南方約30mのところに回廊の痕跡を検出した。吉備池廃寺は法隆寺式伽藍だったのである。

2 塔の遺構

西基壇では北側がすでにコンクリートで護岸されているので、基壇の東・西・南辺を確定し、心臓に関わる情報を得ることを目的として調査区を設定した(図56)。基壇上は現在柿栽培が行われており、上面は後世の掘削によって南に向かって低く傾斜している。厚さ20~30cm

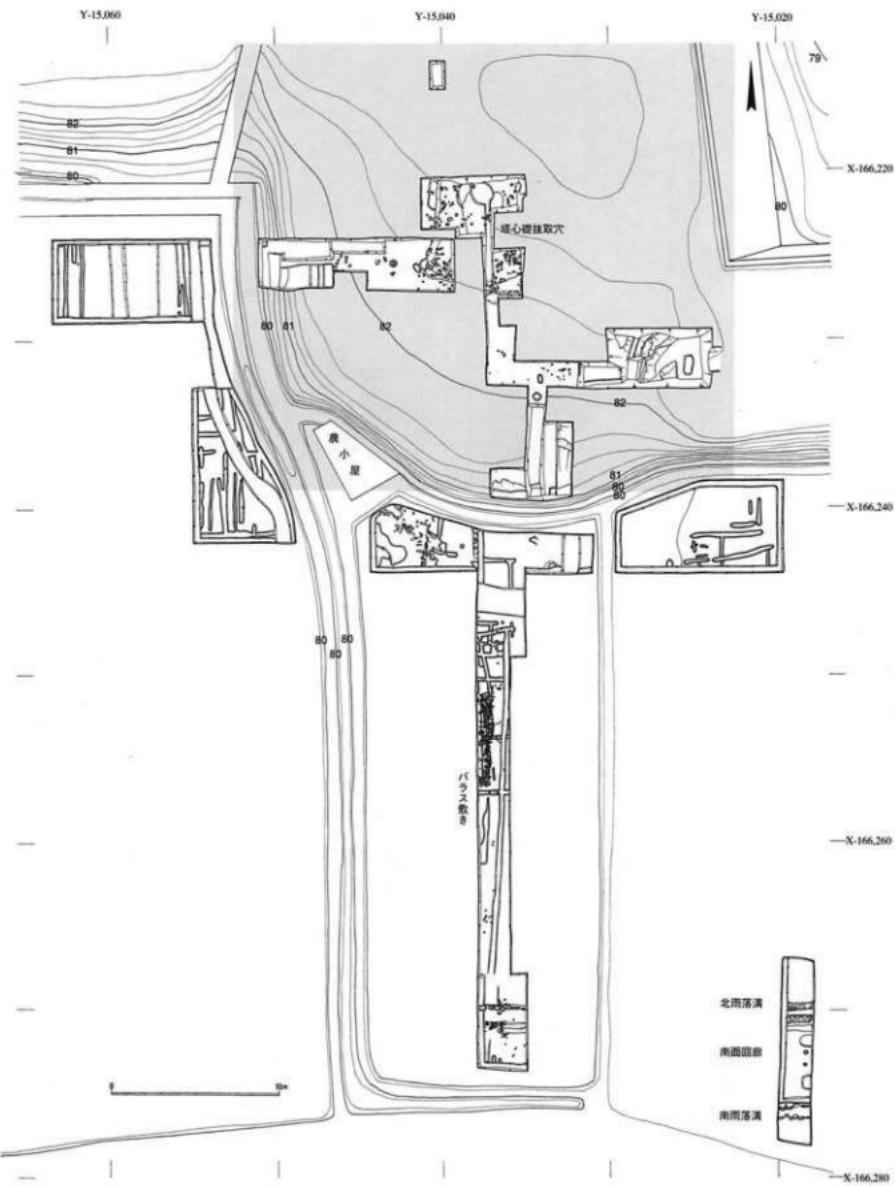


図56 吉備池底寺遺構図 1:300

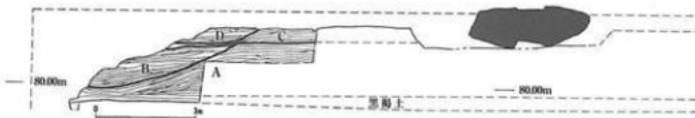


図57 塔基壇中の斜路と基壇構造の復原 1:150



図58 塔基壇中の斜路 西区断ち割りの北壁



図59 塔基壇中の水平な施設 南区断ち割りの東壁

の耕作土とその下に厚さ10~20cmの基壇擾乱土があり、それらを除去すると、赤褐色の固くしまった基壇土が現れる。基壇土は花崗岩の風化土を利用したものである。

心礎抜取穴 西基壇平面と地中レーダー探査結果、さらに金堂基壇の東西方向の中軸線から、この基壇が塔であった場合の中心を事前に予想した。それに非常に近い位置で、東西約6m、南北8m以上の長方形の巨大な穴が検出された。残存する深さは約40cmである。その底には根石とみられる人頭大の石が多量に残っていた。この穴は大きさと位置から、巨大な心礎の抜取穴であると断定した。西基壇は塔であり、東基壇が金堂であったことも改めて確認できた(口絵参照)。

抜取穴が長方形なのは、心礎が長方形だったからか、あるいは巨大な心礎を抜き取るにあたって、心礎を北側へ引き上げるための傾斜面を作ったからなのか、いずれかの可能性を考えている。心礎の破片は残っていないかったが、前述のように人頭大の石の一部は、心礎の根石である。

基壇規模 断ち割り調査によって、基壇土は現地壇の縁近くまで残っていることが確認できた。心礎はその抜取穴の南寄りにあった可能性が高いので、幅3mほどの心礎を想定して、心礎の心を仮定した。ここから基壇土

がもっとも遠くまで残っている土壇南側までの距離が、約15mがあるので、この基壇の規模は少なくとも一辺約30mに復原できる。

基壇土の残存高は、旧地表面の暗褐色土層からもっとも高いところで約2.3mある。吉備池庵寺の塔心礎抜取穴に、参考までに尼寺庵寺の厚さ約1.2mの日本最大級の心礎を置いてみた(図57)。この心礎の頂部付近まで版築層を積んでいたとすれば、基壇高はさらに70cm高い2.8mほどであったと推定できる。

基壇外装については、基壇土の削平により、その痕跡を認めることはできなかった。また基壇外装に使用された石材も、まったく残されていない。

整地 塔基壇では掘込地業を行わず、旧地表である暗褐色土や暗褐色砂質土上面に厚さ20~40cmの整地をしてから、版築を行っている(図57)。整地土は南寄りが厚い。整地の範囲は基壇の下だけでなく、その周辺にまで及んでいる。整地の目的は2つであろう。1つは、塔基壇では掘込地業をしていないので、旧地表面に整地層を盛って、地盤を落ちかせるためである。第2に、旧地表面は現地表面と同様に、東から西に向かって緩やかに低く傾斜しているので(金堂基壇の西端から塔基壇の西端



図60 塔南面のバラス敷 北から



図61 南面回廊 北から

までの78mで約40cm低くなる)、基壇の版築を行いう一帯をより平坦にするためである。ただし、このような金堂基壇における掘込地業との差は、金堂と塔の建設の微妙な時期差を示す可能性がある。

4工程をたどる基壇構築 基壇西辺での断ち割り調査によって、基壇版築層は大きくA、B、C、Dの4ブロックにまとめられ、A→B→C→Dの順序に積んだと復原できる(図57)。

Aブロックは基壇縁辺部寄りでは傾斜して版築し、基壇中央部寄りではほぼ水平に版築する。つまり、その版築層は基壇縁辺寄りでその傾斜を徐々に強くして、整地層上面となす角度を最終的に最大20度ほどにする。この傾斜面はそのまま基壇上面に統かず、基壇土半ばではほぼ水平にする。さらに、この水平部分の上面には心礎抜取穴の位置まで、小バラスを突き固めている。

BブロックはAブロックの傾斜面上にのり、Aブロックの水平部分の上面に天端をそろえ、版築層の上面をいったんほぼ水平にする。その傾斜は10度から徐々に弱ま

っている。しかし、Bブロックの上面にはAブロックのような小バラス敷はない。

CブロックはAブロックのバラス面の上とBブロックの上面の一部にのり、心礎寄りでは水平に積むが、西端ではやや斜めに積む。Cブロックのなかには心礎の根石と同大の石が入っているので、据え付けた心礎をより不動にする目的があった可能性がある。北・東・南側では、心礎抜取穴に関わる断ち割りをしていないので、Cブロックの工程が心礎の周囲全体に及んでいたか否かは不明であり、将来の調査に託したい。

DブロックはBブロックの上とCブロックの傾斜面の上にのる水平の版築層である。おそらくCブロック上面と天端をそろえて、基壇土構築をほぼ完成させたと考えられる。この時に基壇土を完全に積み終えてから、礎石の据付掘形を掘ったのか、あるいは先に礎石を据え付けてから、基壇土を積み終えたのかは不明である。

この問題は礎石位置の確認とともに、今後の塔基壇の全面調査に委ねたい。

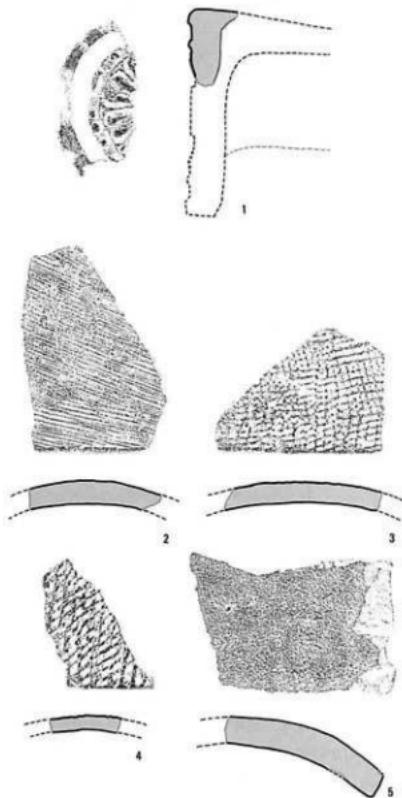


図62 吉備池廃寺（第89次）調査出土瓦 1:4

心礎を引き上げた傾斜面 Aプロックの西辺はなぜ傾斜面をなすのか。基壇版築層の断面を西辺、南辺、東辺で比較した。南辺と東辺では、通常の基壇と同様に、下から上までほぼ水平に版築層を積んでいる（図59）。これに対して、西辺のAプロックでは明らかに斜面を作ることを意図して積んでいる（図58）。さらに、Aプロック上面の小バラス面と心礎抜取穴の底面の高さは近接している。この傾斜面は心礎を引き上げるための傾斜面で、小バラス面に達した心礎を水平に移動して、基壇中心に据えたのであろう。

このような傾斜面は香芝市の尼寺廃寺の塔基壇中にもある（香芝市教育委員会「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報5」1996）。尼寺廃寺では北側の版築土中に傾斜面を設けている。この傾斜面は目下2列しか確認されていないが、塔基壇に特有なものなので、吉備池廃寺の西基壇

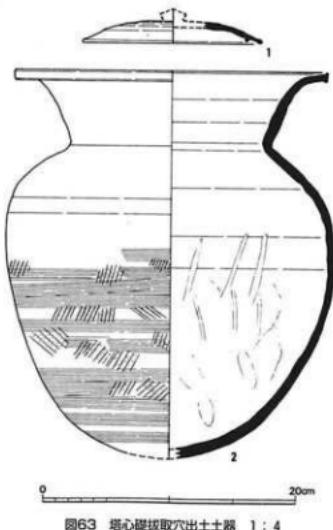


図63 塔心礎抜取穴出土土器 1:4

が塔であったということの有力な証拠となる。吉備池廃寺の塔心礎は、西側から引き上げたのである。

階段の出の可能性 塔基壇南西側にバラス敷があり、それが南辺中央付近で直線的に途切れる部分があり、南の階段の可能性を考えた（図60）。しかし、基壇の南・東側にバラスが続かないことで、確証は得られていない。

3 南面回廊の遺構

塔基壇南方の水田部分に設けた2箇所の調査区で、幅50cmの東西方向の石組溝を、その北で石組を抜き取った東西溝をあついで検出した（図56・61）。2条の東西溝の方位は、金堂と塔の東西軸に平行しているので、これらを南北の雨落溝とする南面回廊と断定した。溝の心間距離はほぼ6mで、回廊の基壇幅は5.5mである。これは飛鳥時代では平均的な基壇幅である。基壇部分で掘込地業は行っていない。基壇土は後世の削平がひどく、最下層のごく一部が残っているにすぎない。東側の調査区では、礎石抜取穴と思われる一对の浅いくぼみを検出したが、基壇外装は確認できなかった。回廊の詳細は、将来の広い面積での調査に委ねることにしたい。

4 その他の遺構

塔基壇の南辺から南へ9mから15mのところで、拳大的河原石を使ったバラス敷を検出した（図56・60）。この砾敷が塔基壇の南西側に部分的に残っていたバラス敷

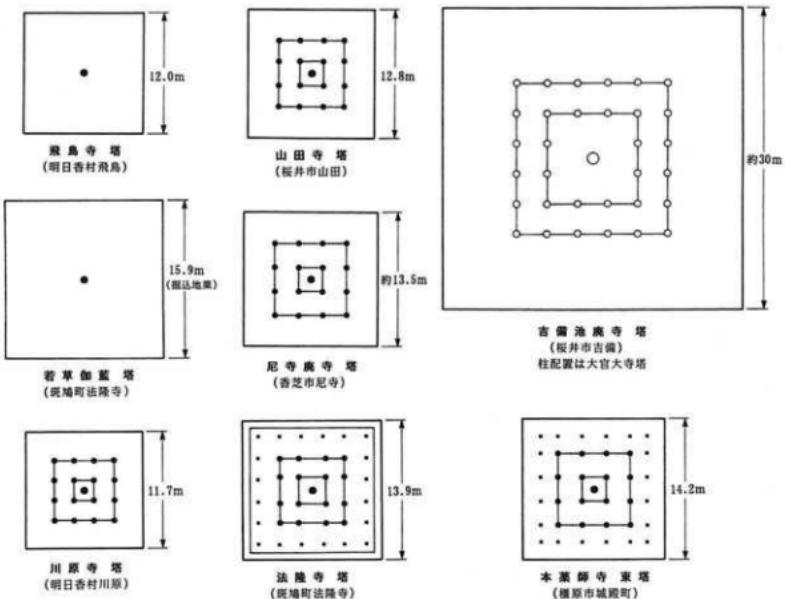


図64 飛鳥時代の塔平面規模の比較 1:500

に連続するのか、本来この南側にも広がっていたか否かについては不明であるが、東側は南北にはほぼ直線的になっている。この位置は、先に塔基壇の階段の可能性を考えた部分の南側にあたり、東辺の見切り石こそないが、参道の存在を想定することは可能である。バランス敷は西側の未調査区に広がっているので、その性格については将来その位置を調査するときに、あらためて検討したい。

5 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、若干の瓦のほかに土器などがわずかにあるにすぎない。以下、瓦と土器について概略を述べる。

瓦 吉備池廬寺の軒瓦は出土していないが、平安時代中期にあたる10世紀頃の軒丸瓦が1点ある(図62-1)。塔基壇の西方から出土した。紋様は全体に平板である。外区内線に比較的密に朱絞をめぐらし、それと外縁との間が一段低くなる。外縁は低い素紋の直立縁である。同範例は未確認である。

丸瓦は25点(3.5kg)、平瓦は203点(17kg)が出土した。ともに厚手品(厚さ1.8~2.5cm)と薄手品(1.2~1.6cm)がある。両者は金堂基壇の調査時でも出土した。

薄手品は重量比によれば、丸瓦の1%、平瓦の10%を占める。厚手品は丸・平瓦とともに凸面の叩き目を完全になじみ消すのが特徴である(図62-5)。丸瓦はすべて玉縁式である。薄手品の平瓦には凸面を完全になじみ消すものばかりに、平行叩き(図62-2)、正格子叩き(図62-3)、斜格子叩き(図62-4)を施すものがある。薄手品は厚手品と比べて硬質で、青灰色か灰白色を呈するものが多い。土器 塔心礎の抜取穴から須恵器の蓋(図63-1)と甕(図63-2)の破片が出土した。7世紀後半の製品である。

6まとめ

巨大な塔基壇 今回検出した基壇は、巨大な心礎の抜取穴と心礎を引き上げた傾斜面の存在などから、塔であることは確実である。その平面規模は、一辺が約30m四方に及ぶ巨大なものである。また、基壇高も2mを大きく越えると推定される。

吉備池廬寺の塔基壇の平面規模を、飛鳥・白鳳時代の主要寺院と比較してみる(図64)。吉備池廬寺の塔はほかの塔に比べて4倍近い面積をもち、飛鳥・白鳳時代最大級の塔基壇であったことがわかる。

その巨大さと比肩できるのは、大官大寺の塔基壇だけ

である。大官大寺の塔基壇の一辺は36~37mであるが、基壇外装の設置にまでは至らず、さらに少なくとも東辺は角度25度の傾斜面を残したまま、未完の状態で焼亡したことが判明している（〔藤原概報9〕）。塔基壇の平面規模については、2つの解釈の可能性がある。1つは、傾斜面を削り落して、一辺30m程の基壇にする計画だったという可能性である。2つ目は、傾斜面が吉備池廃寺の塔と同様に、心礎やその他の礎石を引き上げためのものだという可能性である。後者であれば、傾斜面に版築を積んで水平にする計画だったということになり、基壇の一辺は36~37mとなる。いずれにせよ、大官大寺の塔基壇は飛鳥・白鳳時代最大であった。その高さも少なくとも2mと推定されている。

心礎の大きさと深さ 心礎の抜取穴が巨大なのは、心礎が巨大だったからであろう。大官大寺の発掘調査所見によれば、明治時代に抜かれた塔心礎の抜取穴の東西幅は5.4mである。これは吉備池廃寺の心礎抜取穴の東西幅6mに近い。岡本桃里は大官大寺の塔心礎の見取図と寸法を明治時代に記録している。それによると、心礎の大きさは、南北約3.6m、東西約3mである。また、奈良県香芝市の尼寺廃寺の塔心礎は約3.8m四方、東大寺の東塔心礎の長辺は約3.8mで、いずれも日本最大級である。吉備池廃寺の塔心礎の抜取穴の大きさから考えて、そこにある心礎の大きさも、尼寺廃寺や東大寺に匹敵する大きさだったと推定される。

吉備池廃寺の塔心礎は、基壇の中央のかなり深い位置に据えられた地下式心礎であると、当初予想していた。それは飛鳥寺、山田寺、尼寺廃寺など多くの飛鳥時代の塔の心礎が地下式だからである。これに対して、吉備池廃寺では基壇の相当上部（旧地表面の暗褐色土層から1.5m上）に据えられている。前述したように吉備池廃寺でも尼寺廃寺規模の心礎（厚さ1.3m）が据えられていたとすると、心礎の頭部が地上に露出している場合の基壇復原高は2.8mである（図57）。もし地下式心礎に拘泥すれば、基壇高は3mを越す異常な高さに復原されることにならう。心礎は地上式であったと考えたほうが妥当であろう。

大官大寺の塔初重の規模 吉備池廃寺の塔基壇も心礎も巨大だった理由は、この上に立っていた建物が巨大だったからであろう。基壇規模が唯一近い大官大寺では、「大安寺伽藍縁起併流記資財帳（以下、縁起）」によると、

文武朝（7世紀末～8世紀初頭）に九重塔が建てられたと伝えている。大官大寺の塔の建物礎石は側柱5間四方（1間10尺等間）、入側柱3間四方で、四天柱のない特異な配置ではあるが、初重の一辺が50尺（約15m）と考えられており、飛鳥・白鳳時代最大の平面規模をもつ（図64）。日本最大の塔である東大寺の東塔と西塔は七重塔であるが、その初重はともに一辺55尺（約16.5m）、高さは東塔で33丈8尺7寸（約101.6m）、西塔で33丈6尺7寸（約101m）である。両者の初重の平面規模を比較すると、大官大寺の九重塔の高さも80~90mはあったことになる（〔藤原概報9〕）。

ただし、大官大寺の塔初重の平面規模については、再考の余地がある。それは基壇の平面規模を一辺30mとみようが、36~37mとみようが、一辺約15mの初重と比較すると、基壇平面は異常に大きい。そこで5間四方の外側にさらに7間四方の側柱を立て、初重を一辺約21mと考えたほうが、基壇上で収まりはよく、初重の軒の出の問題も解決する。韓国にある新羅皇龍寺にも645年創建の木造の九重塔があり、礎石が残っているので、初重の側柱は7間四方で、一辺22mであることがわかる（金東賢「皇龍寺の発掘」「佛教藝術」207号）。「三国遺事」などの史料と含利函に刻まれた塔の修理記録によれば、塔の高さは約80mであった。韓國国立文化財研究所の金東賢所長が描いた復原図は、日本の五重塔と比べて膨らんだ感じがするが、九重塔を安定して支えるためには、各重の平面規模を広くすることが必要なのであろう。

吉備池廃寺の塔も九重塔か 吉備池廃寺の塔基壇では、心礎以外の礎石位置に関する情報が不明なので、〔藤原概報9〕における大官大寺の初重平面案を借用して、吉備池廃寺の塔基壇に重ねてみると、十分に入る上に、さらに建物端から基壇端まで7.5mも空間が残る（図64）。吉備池廃寺塔初重の規模は、前項で提示した大官大寺の初重平面改訂案のように、7間四方と解釈するか、柱間が東大寺七重塔のように広かったと解釈するかである。ともあれ、吉備池廃寺の塔基壇と心礎抜取穴の巨大さからみて、そこに大官大寺に匹敵する九重塔が建っていた可能性は、きわめて高い。

最古級の法隆寺式伽藍配置 今回の調査によって、東に金堂、西に塔があり、そのまわりに回廊をめぐらしていることが判明したので、吉備池廃寺の伽藍配置は、法隆

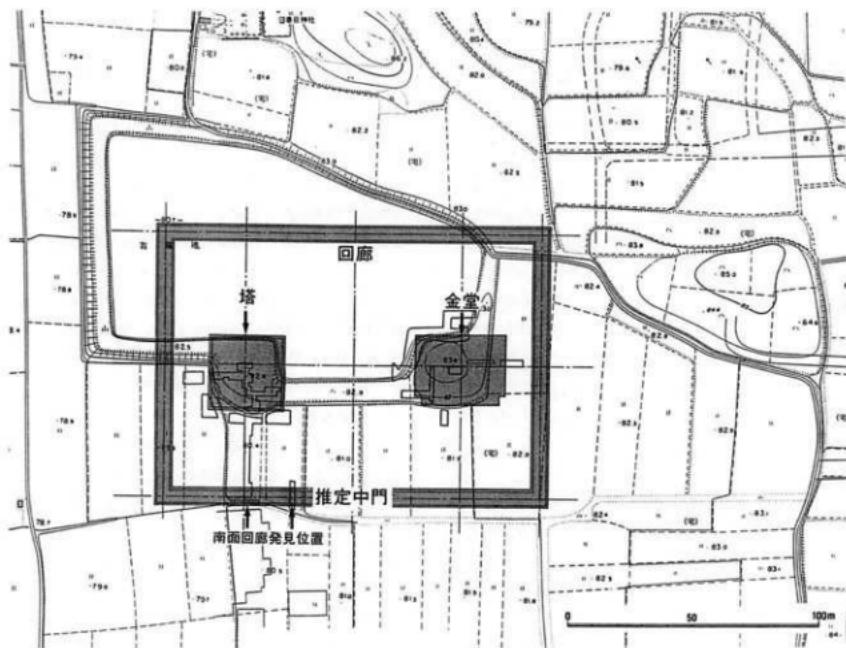


図65 吉備池廃寺の推定伽藍配置 1:2000

寺式であることが確定された。しかも、從来発見された軒瓦の年代によれば、最古級の法隆寺式伽藍となる。

東西両基壇の中心間距離が84.6mと長大なことから、広大な伽藍が想定されるが、南面回廊の発見によって、その広さがさらに具体的になりつつある。金堂の掘込地業の南北の中心軸から南面回廊南端までの距離が56mであるので、これを北に折り返して求められる回廊の南北規模は112mである(図65)。これは法隆寺西院回廊の南北規模(約63m)の1.8倍もある。吉備池廃寺の回廊の東西規模は來年度以降の調査で明らかになろうが、法隆寺西院回廊の南北規模と東西規模(90.5m)の比率と同一であったと仮定すれば、吉備池廃寺の回廊の予想東西規模は160mにもなる。この推定によれば、回廊の位置の、3分の1が吉備池にかかるが、南面・東面回廊のすべて、西面回廊の南半分、北面回廊の一部も、現水田部分で発見される可能性が高い。

南北2条の雨落溝を検出した調査区のある水田から、その東側の水田にかけては、南端の畦が南へ向かって突出している。ここが塔基壇と金堂基壇の中間に南方にあることを考慮するならば、中門の基壇を反映している

可能性がある。吉備池の北の堤と春日神社の小丘の間にある水田部分では、講堂の発見が期待できる。さらに、僧房や大廈、そこに聞く東西南北の門についても、今後追究していくことになる。なお、金堂と塔は基壇の北辺をおおむねそろえているものの、それぞれの南北の中軸線が一致していない点も、今後の検討課題である。

百済大寺の可能性 昨年の金堂基壇の調査の結果、吉備池廃寺は639年に舒明天皇の発願で建設が始まった百済大寺の可能性があると報告した。今回の調査によって、吉備池廃寺の塔は九重塔であった可能性がきわめて高くなつた。「日本書紀」と「継起」によれば、日本で大官大寺造営以前に九重塔があったのは、百済大寺だけである。さらに、南面回廊の発見によって、吉備池廃寺が飛鳥時代では比類のない壮大な伽藍であったことも明確になつた。したがつて、吉備池廃寺が百済大寺であった可能性も、一層高まつたことになる。

東アジアの九重塔の流れ 東アジアにおける九重の木造塔といえば、516年に靈太后胡氏の発願で造営された北魏の首都洛陽の永寧寺が、おそらく歴史上最大規模を誇る。史料の検討によれば、相輪を含む高さは147mもあったと

いう。その後、隋の文帝と煩帝が長安に建てた木造塔も、100m級であった。そして、日本で舒明天皇が百済大寺の造営を発願した7世紀前半には、百済の武王が益山の弥勒寺に、新羅の善德王が慶州の龍宮寺に、それぞれ九重の木造塔を建てている。龍宮寺の九重の高さは約80mである。東アジアにおけるこのような超一級の塔は、皇帝、王、天皇及びその一族が開基して建てられたものばかりであり国家的シンボルとして威容を放っていたことであろう。

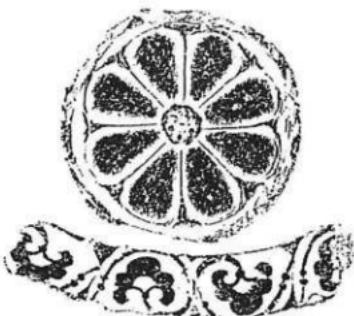
その後の吉備池廃寺 「縁起」によれば、子部社神の怨みによって、九重塔は焼けたとあるが、今回も金堂基壇の調査と同様に、火災を示す証拠は一切ない。

つぎに、塔基壇とその周辺の調査では、吉備池廃寺の所用軒瓦は1点も出土していない。出土した丸・平瓦の特徴は、金堂基壇調査時出土のものと同様であり、640年頃に製作された所用軒瓦に伴うものに限定される。しかし、その出土量は昨年より少ない。金堂や塔の基壇外装の石材も、心礎やそのほかの礎石も残されていない。今回のこののような状況は、寺院の存続期間が短く、建築資材を移建先で再利用したことが原因とする従来の見解を、支持するものである。

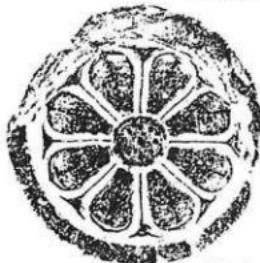
吉備池廃寺が百済大寺である可能性が一層高まった現在、その移建先である高市大寺の所在地も問題となる(小澤毅「吉備池廃寺の発掘調査」「仏教藝術」235号1997)。吉備池廃寺と同範の軒瓦と同一の丸・平瓦が出土した木之本廃寺も、その候補として有力視されており、都多本神社付近での今後の調査が注目される。今回、塔心礎抜取穴から7世紀後半の土器が出土したということは、塔を含む吉備池廃寺の移建年代を考える上で、非常に重要である(図63)。それは百済大寺が移建されて高市大寺となった年代が、「縁起」や「日本書紀」によれば天武2年(673)だからである。

吉備池廃寺の軒瓦 吉備池廃寺と木之本廃寺から出土したいわゆる山田寺式軒丸瓦には、IAとIBの2種がある。吉備池廃寺は639年から造営された百済大寺である可能性が高いので、吉備池廃寺の2種の軒丸瓦が最古の山田寺式軒丸瓦になろう。

軒平瓦にも忍冬紋のスタンプを押したIBとそれに三重弧紋を加えたIBの2種があり、木之本廃寺では、これらを2種の軒丸瓦と組ませてきた。しかし、セット



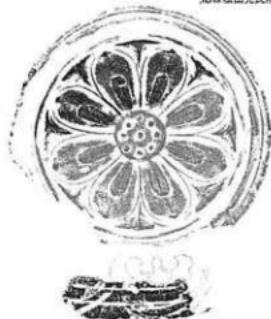
1 法隆寺7Aa-213B



2 法隆寺8B



3 吉備池廃寺IB-a
JBは松田光氏所蔵



4 吉備池廃寺IA-b

図66 吉備池廃寺の軒瓦とその成立過程 1:4

関係については從来厳密には検討されず、IA・Ib₁とIB₁の2セットが公表されてきた（大脇前掲書）。その原因は、先に調査が行われた木之本庵寺では基壇などの遺構が未発見で、吉備池庵寺でも1996年以前は寺院であるという確証が得られていなかったので、金堂や塔という建物との関係で、軒瓦を検討する機会がなかったからである。

今回、吉備池庵寺では金堂と塔の存在が明確となり、軒瓦2セットの所用先を検討する必要が出てきた。軒丸瓦IAは弁の子葉の幅が不ぞろいで、中房蓮子にも整った配置をしていない部分がある。これに対して、軒丸瓦IBは弁の子葉の幅も中房の蓮子の配置も整然としており、型式的にはIAよりやや先行すると考えられる。軒平瓦でもIB₁が新要素である重弧紋をもつIB₁に先行する可能性がある。そこでまず、從来公表されてきたセットの組み合わせを、IB₁とIA・Ib₁に変更する提案をしたい。そして、日本古代の寺院造営は、塔より金堂が先行することから、IB₁を金堂のセット、IA・Ib₁を塔のセットとする仮説を提示しておきたい（図66-3・4）。回廊や講堂などのほかの建物の軒瓦については、新型式の軒瓦が出土する可能性も含めて、今後の調査結果を待って検討することになる。

山田寺式軒瓦の成立について 最後に山田寺式軒瓦の成立過程についてまとめておく。まず、最古の山田寺式軒丸瓦であるIA・Bは、弁端が尖り、中房の縦断面が半球形をなし、I+8の蓮子を置く。これらは山田寺式軒丸瓦に先行する船橋式軒丸瓦にみられる特徴である（花谷浩「寺の瓦作りと宮の瓦作り」『考古学研究』158 1993）。とくに、法輪寺創建用で、若草伽藍（斑鳩寺）でも補足用に葺かれた法隆寺8Bは、船橋庵寺式軒丸瓦の中でも外縁幅が広く、重圓紋をめぐらす空間が確保されていることから、IA・Bの祖型となったのではないかと考えられる（図66-2）。法隆寺8Bは法輪寺塔心柱の基部から、重弧紋軒丸瓦とともに出土したので、このセットが塔に先行して建てられた金堂用とみられ、なお、そうであれば、法輪寺は吉備池庵寺に先行する最後の法隆寺式伽藍となる可能性がある。

それではIA・Bに始まる弁の子葉と外縁の重圓紋の由来は何か。その鍵は、法隆寺西院伽藍金堂に安置されている釈迦如来像などの光背にあろう（井内功「山田寺瓦当紋様の源流」『古代瓦研究論』1982）。推古31年

（623）に製作された釈迦如来像は元来、斑鳩宮の仏殿か若草伽藍に安置されていたという説が有力である。その光背には内側から子葉をもつ單弁10弁蓮華紋、幅線紋、重圓紋、連珠紋、忍冬紋を同心円状にめぐらしている。IA・Bは法隆寺8Bを下敷きにし、そこに光背に使われた子葉と重圓紋を新たに付加して成立したのではないだろうか。IA・Bの成立には斑鳩の上官王家系の造瓦組織や仏師が関与していた可能性がある。

軒平瓦IB₁の型押し忍冬紋が、若草伽藍のスタンプ（213B）を再利用したものであることも、IB₁に付加した重圓紋が、本来仏像光背の重圓紋を模したロクロ引きの重弧紋を分割したものであることも、この考え方の妥当性を示すものである（図66-1）。しかし、それは斑鳩の瓦工や仏師を丸抱えで再雇用するというあり方ではなかったようである。たとえばIB₁・IB₂の瓦当厚は213Bの3分の2しかないので、忍冬紋は部分的にしか表出されない。つまり、IB₁・IB₂を製作した工人は、若草伽藍の瓦工房で創作された軒平瓦というものを熟知していなかったのである。さらに、640年頃であれば、中宮寺、斑鳩宮仏殿、若草伽藍北方建物に葺いた日本最初の範型（均整忍冬唐草紋）による軒平瓦215Aの影響がなかった原因についても、今後の検討課題として残る。

さて、吉備池庵寺にやや遅れる642年頃に完成した山田寺金堂の創建用の山田寺式軒丸瓦には、弁の尖りがない。弁の輪郭線がない、間弁基部が中房に達する、中房が半球形から円柱形になる、蓮子が1+6になる、外縁の重圓紋が四重になるという変化がある。丸瓦の瓦当への接合技法も、丸瓦広端の凹面側を片側面に加工しており、法隆寺8Bや吉備池庵寺IA・Bが楔形加工であるのと異なる。四重弧紋軒平瓦は段頭であり、吉備池庵寺IB₁・IB₂が直線頭であるのと異なる。山田寺の瓦工集団は、吉備池庵寺の軒瓦紋様をモデルとしながらも、技術的にはかなり独自の集団であったことがわかる。

吉備池庵寺における新たな軒瓦紋様の成立、そして壮大な伽藍の成立の背景には、最初の官寺造営という大きな歴史があり、九重塔の造営も、東アジア諸国を意識したものであろう。これらの点を一層明確にするためにも、吉備池庵寺の今後の調査のもつ意味は大きい。

（佐川正敏）



奈良国立文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町2丁目9-1
Nara National Cultural Properties Research Institute
2-9-1, Nijo-cho, Nara-city, 630-8577, JAPAN